

一金三十六錢

職工賃其他製造費一切

一金二十九錢

税金

計金三圓五錢

差引

金十錢

利益

(六) 販出額及仕向地

本品ハ多ク縣外ニ販出セラル、モ其數詳カナラス仕向地ハ大阪、名古屋、東京及山陰、山陽、四國、九州、北海道ノ沿海地方ニシテ就中四國、九州、北海道ハ其最モ主ナルモノトス

(七) 相場

一貫目ニ對スル概價ハ左ノ如シ

機械製米利堅帆

三圓十五錢

手織製米利堅帆

三圓十錢

松右衛門帆

二圓二十錢

(八) 荷造法及其費用

普通三反ヲ一捆トシ進包トシテ繩ニテ緊縛ス其費用約二十錢ヲ要ス

(九) 販出先ニ於ケル用途

本品ハ主トシテ帆船ノ帆ニ用ヒラル、コト勿論ナルモ松右衛門帆ハ汽船ノ覆及敷物ニ用ヒラル、ヲ普通トス

(十) 主ナル製造者

明石郡明石町
同 林崎村
同 同
神戸市野田村

明石帆布株式會社
稻 田 藤 市
稻 田 山 松
澤 村 市 松

(ハ) タ オ ル

(一) 産 額

年 次	數 量	價 額
三十七年	二〇〇、九一五	一四八、二八〇 _円
三十八年	二四六、八四九	一八八、三七九
三十九年	三九四、五八一	四〇二、六九七

(二) 主要産地

印南郡最モ盛シニシテ總産額ノ八割強ヲ産出ス之レニ亞クハ多加郡及加西郡トス

(三) 沿革

本品ハ明治二十四年縣下印南郡西志方村稻岡某ノ創製ニ係レリ當時我國ニ於テ殆ント本品製造ヲナスモノナク同氏ハ歐洲製品ヲ見本トシ幾多ノ研究ヲ經テ漸ク良品ヲ産出シ明治三十年ノ頃ヨリ海外ニ之ヲ輸出セラル、ニ至リ漸次當業者ヲ増シ以テ今日ニ至レリ

(四) 製造戸數及職工數 (三十九年)

兵庫縣

製造戸數 五〇戸
 職工數 九人
 男 一、〇六二人
 女 一、〇七一人
 計

製造並ニ輸出狀況

(五) 本品ノ製織ハ多ク在來ノ手織機ヲ使用シ主ニ農家ノ副業トシテ賃織スルモノニシテ稻岡合名會社ノ工場ヲ除キテハ規模ノ比較的大ナル工場アルヲ聞カス然レトモ此等ノ集合シテナセル本縣「タオル」工業ノ勢力ハ近來甚ダ殷盛ヲ致シ其製品殆ント海外ニ輸出セラレ就中鹿印、錨印ノ如キハ海外市場ニ於テ好評ヲ博シ益々其需要ヲ増進シ去ル三十七八年戰爭ノ際ト雖モ其打撃ヲ受クルコトナク尙頗ル盛況ヲ呈セリ是ヲ以テ輓近縣下各地ニ斯業勃興シ爲メニ職工ヲ得ルニ稍困難ヲ感スルニ至リシモ織機ノ増設、職工ノ熟練ニヨリ著シク本品ノ生産ヲ増加シ前途頗ル有望ナリ

(六) 原料ノ需要供給

左二十手ヲ用フルヲ普通トスレトモ「タオル」専用ノ十八手ヲ用フルモノアリ緯糸ハ多ク十六手若クハ十五手ヲ使用ス而シテ是等ノ綿糸ハ主トシテ鐘ヶ淵紡績會社ノ製品ナルモ尼ヶ崎紡績會社ノ線糸ヲ用フルモノモ多少アリト云フ

(七) 製産費及收益ノ比較

巾十五吋長サ三十吋ニシテ晒上リ目方一打二百二十夕ノ製品ニ對スル大要左ノ如シ

收 入	一金八十九錢	賣 價	一金六十二錢五厘
支 出		原 料	綿糸代

一金七錢五厘

織 賃

一金三錢八厘

晒 賃

一金十三錢四厘

包裝荷造其他諸雜費

計金八十七錢二厘

差 引

利 益

金一錢八厘

(八) 販出額及仕向地

製品ハ殆ント全部神戸港ヲ經テ海外ニ輸出ス其仕向地ノ主ナルモノハ清國上海、長江沿岸、英領香港ニシテ印度、新嘉坡、南洋各地、北清、朝鮮等之レニ次ク

(九) 販 賣 手 續

上海其他ノ海外ニシテ代理店アル地方ハ直接輸出シ北清、香港、印度、濠洲等此レナキ地方ハ在神戸ノ清商歐米商人或ハ内國商人ノ手ヲ經テ輸出ス其直接輸出ノ場合ハ總テ神戸正金銀行ニ於テ荷爲替ヲ附ス

(十) 相 場

綿糸相場ノ高下ニ連レ本品ノ相場モ亦從テ高低セルモ鐘淵紡績左二十手ノ相場自四十圓位ノトキ晒上リ目方二百二十目物一打ノ市價ハ八十九錢位ニシテ此外形狀量目ノ如何ニヨリ夫々異ナレトモ概シテ此標準ニヨリテ高低スト云フ

(十一) 輸出先ニ於ケル用途並ニ需要者ノ階級

普通顔面身體ノ洗拭用ニ供セラル、ヒ敷布、寝衣、浴衣等ニモ用ヒラレ主ニ中流以上ニ於テ需要セララル

(十二) 荷造法及其費用

兵庫縣

二枚宛ヲ疊ミ一打毎ニ赤色ノ紐ヲ以テ結束シレールヲ卷キ二打ヲ合セテ紙包トナシ商標及ヒ記號等ヲ貼付シ芋紐ヲ以テ括ル此ノ如クシタルモノ六十個即チ百二十打ヲ堅固ナル外國ニ詰入ル、モノトス其費用概算左ノ如シ

商標記號其他印刷物代	七	厘
内括リ紐及外括リ芋	六	厘
包紙及洋函ノ内側ヲ包ム防濕紙	八	厘
外 函 代	一	錢 四 錢
荷 造 賃	六	厘
諸 費(ゴム印荷印刷込費其他)	四	厘
合 計	四	錢 五 厘

(十三) 輸出先ニ於ケル競争品

獨逸品及英國品等アリ獨逸品ハ我カ「タオル」ニ對スル最優ノ競争品ニシテ其品質本邦品ノ上ニアリ然レトモ價格ノ低廉ナルコト我ニ及ハス

(十四) 本品ノ長所缺點並ニ改良スヘキ要點

價格ノ著シク低廉ナルハ本品ノ長所トスル所ナルモ其品質ニ於テ歐洲品ニ比シ甚タ脆弱ニシテ而カモ製品ハ極メテ區々ナリ其脆弱ナルハ織方ノ不完全ナルニモ依ルヘケレト主トシテ本品ノ強力ヲ掌ル地糸トシテ普通ノ綿糸ヲ經糸トスルカ故ニシテ方今本邦ニ於テ製セラレ、普通綿糸ハ「タオル」ノ地糸ニ適スル強度ヲ有セス是レヲ以テ本品ノ地糸トシテハ特ニ之ニ適應セル強度ノモノ或ハ42²カ32⁷ノ撚糸ヲ用ヒ本品ノ品位ヲ上進セシムルヲ要ス

(十五) 主ナル製造者

印南郡西志方村	合名會社 稻岡商店
武庫郡武庫村	田 匠 鶴 松
多可郡黒田庄村	藤 田 織 機 工 場
加西郡九會村	内 藤 佐 藤 治

(二) 毛 織 物

年 次	毛		布		羅紗其他ノ毛織物		價 額 合 計
	數	價	數	價	數	價	
三 十 五 年	?	?	?	?	?	?	六三、八〇九
三 十 六 年	?	?	?	?	?	?	五七、〇〇六
三 十 七 年	?	?	?	?	?	?	八八、七七一
三 十 八 年	一九三、四四五	三六七、三三三	五二八、二〇〇	七四、七一九	一〇、七二六	一〇、八八九	一〇八、七六八
三 十 九 年	一九三、六〇〇	三六七、三三三	五二八、二〇〇	七四、七一九	一〇、七二六	一〇、八八九	一〇八、七六八

前表中羅紗其ノ毛織物ノ内ニハ肩掛、膝掛等アルモ其産額ハ甚タ少ナシ

(一) 主 要 産 地

殆ント加古郡加古川町ニ産出ス

(三) 製造場數及職工數 (三十九年)

製造場數	二ヶ所
職 工 數	二七八人
男	二四五人
女	三十三人

(四) 製産状況

本業ハ近來著シキ進歩ヲナシ逐年産額ヲ増大セリ而シテ其製品ハ殆ント陸海軍ニ於テ需要セラレ、故ニ去ル日露戰役中ノ如キハ毛布其他軍需品ノ製織ニ日モ亦足ラサルノ狀況ニシテ爲メニ三十八年ニ至テハ一躍シテ百萬圓以上ヲ生産セリ平時復舊ノ後ト雖モ軍隊被服ノ補充及軍事擴張等ニヨリ本品ノ需要亦頗ル多ク極メテ盛況ヲ呈シ三十九年ニ在テモ亦前年ニ劣ラサルノ産出アリキ戰後本邦ニ於ケル一般生活程度ハ急激ナル上進ヲ示シ從テ毛布其他ノ毛織物ハ需要激増シ外品ノ輸入益々多キヲ加ヘ來リシヲ以テ獨リ軍需品ノ製造ニ止マラス汎ク世ノ需要ニ應スルニ於テハ斯業ノ前途頗ル多望ナリ

(五) 原料ノ需要供給

原料羊毛ハ主トシテ濠洲、印度及清國ヨリノ輸入品ヲ使用セリ

(六) 製産費及收益ノ比較

紺維紗一碼ニ對スル概要左ノ如シ

收入	支出
一金三圓	原料羊毛代
	一金一圓二十六錢
	染料
	一金三十五錢
	職工賃
	一金十七錢八厘
	石炭
	織物消費稅
	雜費
	計金二圓五十三錢八厘

賣價	利益
石炭	利
織物消費稅	益
雜費	
計金二圓五十三錢八厘	

緋毛布一封度ニ對スルモノ左ノ如シ

收入	支出
一金一圓	原料羊毛代
	一金五十五錢
	染料
	一金二錢
	職工賃
	一金四錢五厘
	石炭代
	一金五錢
	織物消費稅
	一金十五錢
	雜費
	一金五錢一厘
	計金八十六錢六厘

差引

兵庫縣

金十三錢四厘

利 益

(七) 販出額及仕向地

製品ノ殆ント全部縣外ニ販出ス其仕向地ノ主ナルモノハ東京、京都、大阪及地方師團、鎮守府所在地等トス

(八) 販賣手續及取引慣習

軍需品ハ直接契約ニ基キ納入スルモノニシテ代金ハ検査終了後二、三週間内ニ支拂ヲ受クルヲ例トス諸官衙、鐵道會社等ニシテ纏マリタル需要アル場合ハ直接製造者ニ來リ其他一般市場ニ出スヘキモノニアリテハ總テ問屋ニ賣渡スモノニシテ荷着迄ノ費用及保險ノ負擔ヲ明カニシ賣買約定ヲナス而シテ代金ハ概テ現金取引ナリト雖モ相手方ノ信用如何ニヨリテハ短期ノ約束手形ヲ以テ取引セラル、コトアリ

(九) 荷造法及其費用

製品ノ種類ニヨリ一様ナラスト雖モ概テ適宜ノ數ヲ以テ一捆トナシ之レヲ紙ニテ包ミ更ニ「ズツク」ヲ蔽ヒ其外部ヲ葎包ミトナス此ノ費用約七八十錢ヲ要ス

(十) 主ナル製造者及取扱商店

(イ) 製 造 者

本社位置 神戸市兵庫戶場町

日本毛織物株式會社

工場位置 加古郡加古川町

(ロ) 取 扱 店

東京日本橋區本材木町二丁目

日本毛織物株式會社出張所

大阪市東區高麗橋五丁目

日本毛織物株式會社支店

(ホ) 由 多 賀 織

(一) 產 額

年 次

數 量

價 額

三十八年

四三、八五五

四一、七八七

三十九年

八一、五三〇

七七、五七九

(二) 主 要 產 地

川邊郡伊丹町ヨリ產出ス

(三) 製 造 戶 數 及 職 工 數 (三十九年)

製 造 戶 數

三ヶ所

職 工 數

九六八

男

一七二人

女

二六八人

(四) 製 產 狀 況

本品ハ縣下特產物ニシテ經ニ紡績綿糸ヲ用ヒ緯ニ稻藁ヲ使シ捺染ヲ以テ織布ニ模様ヲ附シタルモノニシテ特許品タリ本業ハ創始以來時未タ甚タ久シカラス爲メニ之レカ製造規模モ亦小ナルヲ免カレスト雖モ其質強靱ニシテ模様ノ鮮明ナルカ故ニ敷物トシテ内外ノ需要漸ク開ケ殊ニ近年物價ノ騰貴セルニ係ラス製造者ハ忍ンテ前定ノ價格ヲ以テ需要ニ應セルト其捺染法ヲ逐年改良セルトニヨリ益々海外ノ需要ヲ増進スルノ傾向ニアリ

兵庫縣

金十三錢四厘

利 益

百九十八

(七) 販出額及仕向地

製品ノ殆ント全部縣外ニ販出ス其仕向地ノ主ナルモノハ東京、京都、大阪及地方師團、鎮守府所在地等トス

(八) 販賣手續及取引慣習

軍需品ハ直接契約ニ基キ納入スルモノニシテ代金ハ検査終了後二、三週間内ニ支拂ヲ受クルヲ例トス諸官衙、鐵道會社等ニシテ纏マリタル需要アル場合ハ直接製造者ニ來リ其他一般市場ニ出スヘキモノニアリテハ總テ間屋ニ賣渡スモノニシテ荷着迄ノ費用及保險ノ負擔ヲ明カニシ賣買約定ヲナス而シテ代金ハ概テ現金取引ナリト雖モ相手方ノ信用如何ニヨリテハ短期ノ約束手形ヲ以テ取引セラル、コトアリ

(九) 荷造法及其費用

製品ノ種類ニヨリ一様ナラスト雖モ概テ適宜ノ數ヲ以テ一捆トナシ之レヲ紙ニテ包ミ更ニ「ズツク」ヲ蔽ヒ其外部ヲ菴包ミトナス此ノ費用約七八十錢ヲ要ス

(十) 主ナル製造者及取扱商店

(イ) 製 造 者

本社位置 神戸市兵庫戶場町

日本毛織物株式會社

工場位置 加古郡加古川町

(ロ) 取 扱 店

東京日本橋區本材木町二丁目

日本毛織物株式會社出張所

大阪市東區高麗橋五丁目

日本毛織物株式會社支店

(ホ) 由 多 賀 織

(一) 産 額	年 次	數 量	價 額
	三十八年	四三、八五五	四一、七八七
	三十九年	八一、五三〇	七七、五七九

(二) 主要産地

川邊郡伊丹町ヨリ産出ス

(三) 製造戸數及職工數 (三十九年)

製 造 戸 數	職 工 數		合 計
	男	女	
三ヶ所	九六人	一七二人	二六八人

(四) 製 産 状 況

本品ハ縣下特産物ニシテ經ニ紡績綿糸ヲ用ヒ緯ニ稻藁ヲ使シ捺染ヲ以テ織布ニ模様ヲ附シタルモノニシテ特許品タリ本業ハ創始以來時未タ甚タ久シカラス爲メニ之レカ製造規模モ亦小ナルヲ免カレスト雖モ其質強靱ニシテ模様ノ鮮明ナルカ故ニ敷物用トシテ内外ノ需要漸ク開ケ殊ニ近年物價ノ騰貴セルニ係ラス製造者ハ忍ンテ前定ノ價格ヲ以テ需要ニ應セルト其捺染法ヲ逐年改良セルトニヨリ益々海外ノ需要ヲ増進スルノ傾向ニアリ

兵庫縣

百九十九

(五) 製産費及收益ノ比較

一、蠶物一枚ニ對シ其概要ヲ示セハ左ノ如シ

收 入	賣 價
一、金壹圓三錢	
支 出	原料綿糸及糞代
一、金五十一錢五厘	職 工 賃
一、金十四錢	諸 稅
一、金二十二錢二厘	捺染其他諸雜費
一、金十錢九厘	
計金九十八錢六厘	
差 引	利 益
金四錢四厘	

(六) 販出額及仕向地

産額ノ大部ヲ縣外へ販出シ其海外ニ輸出セラル、モノ亦尠ナカラス而シテ内地ニアリテハ關西地方ヲ主ナル仕向地トシ東北地方之レニ亞ク海外ニアリテハ北米合衆國ヲ以テ主ナル輸出先トシ又近年濠洲、亞弗利加及ヒ清、韓地方等ニモ多少ノ輸出アリト云フ

(七) 販 賣 手 續

内地向ハ東京、大阪、京都ニアル特約販賣店ニ委託販賣スルヲ普通トシ輸出ニアリテハ神戸及横濱在留外國商人ノ手ヲ經ルモノトス

(八) 相 場

品質及模様ノ如何ニヨリ多少ノ差アルハ勿論ナルモ概畧一蠶物一枚ニ付一圓内外ヲ以テ取引セラレ居レリ

(九) 荷造法及其費用

一蠶物百枚ヲ卷キテ菴包トシ細掛ヲナス外國輸出ノモノモ總テ假荷造ニテ外商ニ引渡スカ故ニ之レト異ナルコトナシ此費用約四五十錢ヲ要ス

(十) 主ナル製造者

川邊郡伊丹町

由多加織合資會社

(十一) レース肩掛

(一) 産 額

本品ノ産額ニツイテハ縣統計書ニ掲載ナキヲ以テ累年ニ亘リテ之ヲ知ルニ由ナク只縣ノ調査ニヨリ三十六年ニ於ケル概數ヲ知り得ルノミ故ニ稍古キニ失スレトモ即チ之レヲ左ニ掲ク

數 量	六、〇〇〇打
價 額	一、二〇、〇〇〇圓

尙縣下ニ於ケル本品製造ノ大斗井上商店ニツキ聞ク所ニヨレハ三十九年ニ於ケル縣下ノ生産額ハ大約二千五百打價額二十萬圓ナリシト云フ其數量ト價額ニ於テ前記ノモノト甚タシク其比率ヲ異ニスルモ茲ニ附記シテ參考ニ資ス

(二) 主 要 産 地

武庫郡ノ産出最モ多シ

兵庫縣

(五) 製産費及收益ノ比較

一、蠶物一枚ニ對シ其概要ヲ示セハ左ノ如シ

收 入	支 出	賣 價
一、金壹圓三錢	一、金五十一錢五厘	原料綿糸及蒸代
	一、金十四錢	職 工 賃
	一、金二十二錢二厘	諸 稅
	一、金十錢九厘	捺染其他諸雜費
	計金九十八錢六厘	
差 引		利 益
金四錢四厘		

(六) 販出額及仕向地

産額ノ大部ヲ縣外へ販出シ其海外ニ輸出セラル、モノ亦尠ナカラス而シテ内地ニアリテハ關西地方ヲ主ナル仕向地トシ東北地方ニシテ亞ク海外ニアリテハ北米合衆國ヲ以テ主ナル輸出先トシ又近年濠洲、亞弗利加及ヒ清、韓地方等ニモ多少ノ輸出アリト云フ

(七) 販賣手續

内地向ハ東京、大阪、京都ニアル特約販賣店ニ委託販賣スルヲ普通トシ輸出ニアリテハ神戸及横濱在留外國商人ノ手ヲ經ルモノトス

(八) 相 場

品質及模様ノ如何ニヨリ多少ノ差アルハ勿論ナルモ概畧一蠶物一枚ニ付一圓内外ヲ以テ取引セラレ居レリ

(九) 荷造法及其費用

一蠶物百枚ヲ卷キテ莖包トシ繩掛ヲナス外國輸出ノモノモ總テ假荷造ニテ外商ニ引渡スカ故ニ之レト異ナルコトナシ此費用約四五十錢ヲ要ス

(十) 主ナル製造者

川邊郡伊丹町

由多加織合資會社

(三) レース肩掛

(一) 産 額

本品ノ産額ニツイテハ縣統計書ニ掲載ナキヲ以テ累年ニ亘リテ之ヲ知ルニ由ナク只縣ノ調査ニヨリ三十六年ニ於ケル概數ヲ知り得ルノミ故ニ稍古キニ失スレトモ即チ之レヲ左ニ掲ク

數 量	價 額
六、〇〇〇打	一、二〇、〇〇〇圓

尙縣下ニ於ケル本品製造ノ大斗井上商店ニツキ聞ク所ニヨレハ三十九年ニ於ケル縣下ノ生産額ハ大約二千五百打價額二十萬圓ナリシト云フ其數量ト價額ニ於テ前記ノモノト甚タシク其比率ヲ異ニスルモ茲ニ附記シテ參考ニ資ス

(二) 主要産地

武庫郡ノ産出最モ多シ

兵庫縣

(三) 製産状況

今ヲ去ル十數年前本品ノ一度我國ニ輸入セララルヤ其流行ハ極メテ激シク輸入額ノ益々多額ニ上リシヲ以テ武庫郡良元村井上伊ハナル者之レカ製法ヲ考究シ遂ニ三十一年始メテ之レヲ製出シ低價ヲ以テ之レヲ市場ニ出セリ爾來本品ノ流行ハ殆ント全國ニ涉リ各階級ヲ通シテ是レヲ需要スルニ至リ爲メニ斯業頗ル盛大トナレリ抑モ本品ハ防寒的實用品ト云ハンヨリ寧ロ裝飾品ニシテ而カモ多ク婦女子ノ需要スル所ナルカ故ニ其流行ノ變遷激甚ニシテ絶ヘス色合、模樣、其他意匠ノ嶄新ナルヲ要シ年々多少製品ノ態樣ヲ異ニセリ是レヲ以テ現今本品ノ需要ハ尙甚タ盛ナルヲ失ハスト雖モ今ヤ「レース」肩掛ノ流行ハ殆ント其極ニ達シ東京、大阪等ノ大都會ニ於テハ漸ク此ノ流行ニ飽キ新奇ノ流行ヲ欲スルノ兆候ヲ呈セルヲ以テ現時ノ狀況ニテ進マハ將來格別ノ望ミヲ屬スルニ足ラサルカ如シ

(四) 原料ノ需要供給

原料ノ柞蠶糸ハ支那山東省産ノモノヲ用ヒ京都地方ヨリ染色シタルモノヲ輸入ス此ノ外原料トシテハ綿糸及毛糸、羽毛、兔毛、絹糸、人造絹糸、「リボン」、羽二重ヲ使用スレトモ其數少ナシ近來柞蠶糸ノ價格ハ漸次騰貴シ四十年ニ於テハ著シク昇騰セリ是レ近年英、米其他ノ諸國ニ於テ柞蠶糸ノ需要激增セシ結果ナラン

(五) 販出額及仕向地

産額ノ大部分ヲ縣外ニ販出ス其主ナル仕向地ハ大阪、東京及名古屋ニシテ大阪へ販出セシモノハ關西以西各地ニ再輸セラル是レヲ以テ大阪へ送ルモノハ田舎向キトシテ安物多キモ東京向ハ概シテ上等品ナリ

(六) 販賣手續

毎年見本ヲ各地問屋ニ送附シテ注文ヲ求ム大抵三月頃マテニ其年ニ仕入ルヘキ數量、種類ヲ定メテ注文シ來リ六七月份以降ニ於テ約定ニ從ヒ送荷スルヲ普通トス而シテ製品引渡ハ殆ント仕向地渡ナルヲ以テ運賃ハ製造者ノ負擔ニ屬ス

(七) 相場

本品ハ品質、模樣等ニヨリ其價格一定セサルコト言フヲ俟タサルモ試ニ之レヲ三種ニ大別シ其概要ヲ示セハ左ノ如シ

織物地	一打ニ付	拾五圓ヨリ五十圓
編物地	同	六圓ヨリ五十圓
雜物	同	拾五圓ヨリ六十圓

(八) 荷造法及其費用

半打ツ、商標ヲ貼付セル紙箱ニ入レ此ノ箱二十個即チ十打ヲ堅牢ナル木箱ニ入ル、ヲ普通トスレトモ時ニ運賃ノ低廉ヲ計ル爲メ巾狹キ板ニテ梓締トナスコトアリ其費用左ノ如シ

木箱	一箱	壹圓
紙箱	二十個	貳圓
雜費		拾錢
合計		三圓拾錢

梓締ノトキハ約五十錢少ナシ

(九) 主ナル製造者

武庫郡良元村

井上伊八

(三) 製革

(二) 産額

兵庫縣

年次	數量	價額
三十五年	八八、八二三 ^以	三四一、三五五 ^四
三十六年	一四六、一六七	五九二、四三九
三十七年	一四六、二一九	六九三、〇九九
三十八年	一八八、六五八	四五六、三八五
三十九年	九五、三七六	三七五、五四三

(二) 種 類

姫路革及露西亞革ヲ主ナルモノトス

(三) 主 要 産 地

飾磨郡ハ最モ主ナル産地ニシテ之レニ亞クハ揖保郡トス

(四) 製造戸數及職工數 (三十九年)

製造戸數	職 工 數	
	男	女
二二一戸	七〇一人	一七〇人
合計	八七一人	

(五) 製 産 狀 況

本縣ニ於ケル製革業ハ古クヨリ行ハレ其製品ハ姫路革トテ全國ニ其名ヲ傳ヘラレ維新以來ハ益々發達シ年々盛大トナレリ然レトモ其工業組織ハ未タ幼稚ニシテ總テ舊態ヲ踏襲シ精白鬆軟ノ作業ハ總テ職工ノ足踏ニヨリテセラレ非常ノ

時間ト熟練ナル勞力トヲ要スルカ故ニ一時的生産力ノ伸縮ハ甚タシク其自在ヲ欠ケリ而シテ近年ニ至リ姫路革ノ外ニ

露西亞革ノ製造起リ其工場ハ規模稍大ニシテ一般製革場ニ比シ多少進歩セルモノアリ

露西亞革ノ製造ハ三十九年ヨリ始マリタルモノニシテ其以前日露戰爭中第十師團管内ニ收容セル捕虜露國兵士ノ露西

亞式製革ノ製造ニ精通セルモノヲシテ之レカ試製ヲナサシメタルニ其結果頗ル良好ナリシヲ以テ平和克復後技師トシ

テ傭入レ之レヲ製出スルニ至レリ露西亞革ハ其質柔軟防水、耐久ナル點ヨリ軍靴用トシテ最モ適當ナルカ故ニ製品ハ

總テ軍需ニ供セラル、モ未タ創業日尙淺ク工業設備ノ不完備ナル爲メ多數ノ生産ヲ見ルニ至ラサルナリ姫路革ハ往時

ヨリ産出セシモノニシテ内地ニ於ケル需要ノ漸次増加セルノミナラス近來之レヲ外國ニ輸出セラル、ニ至リ益々其製

産ヲ増加セリ

近時輸出ノ不振ニ加フルニ原料皮ノ一時的騰貴ノタメ製品賣買ノ均衡ヲ失シタル結果小製造家ハ其製品ヲ保持スルヲ

得スシテ投資スルニ至リ市價ハ爲メニ益々墜落シテ甚タシク不況ニ陥レリ然レトモ今後價格ノ回復ト共ニ漸次盛大ニ

向フヘキコトハ疑ヒヲ容レサル所ナリ

(六) 原 料 ノ 需 要 供 給

原料ハ殆ント牛皮ニシテ其十分ノ八ハ内地産ニシテ他ハ滿、韓ヨリノ輸入品ナリ稀ニ濠洲及米國、獨逸ノ輸入品ヲ使
用スルコトアルモ其數ハ極メテ僅少ナリ而シテ是等ノ原料ハ主トシテ大阪ヨリ購入スルノ外神戸、京都、岡山、廣島、

長崎等ヨリ輸入ス

(七) 製 産 費 及 收 益 ノ 比 較

姫路革壹枚ニ對スルモノ大要左ノ如シ

收 入

一、金拾圓貳拾錢 賣 價(一枚ノ坪數三十四坪トシ一坪賣價ヲ約三十錢トセルモ但一坪ハ一尺(四尺)平方寸)

一、金三十錢 副産品(毛漚屑等)代

計金拾圓五拾錢

出

支

一、金九圓 原料皮代

一、金壹圓 職工賃(日給四十錢ノモノ二人半)

一、金拾錢 藥品代

計金拾圓拾錢

差引

一、金四十錢 利益

露西亞革ハ姫路革ニ比シ製品賣價ハ一坪ニツキ七錢即チ一枚(三十四坪)ニ付二圓三十八錢製造費一圓五十錢高シ故ニ一枚ニ付一圓二十八錢ノ利益アル割合ナリ

(八) 販出額及仕向地

姫路革ノ輸出品ハ主トシテ神戸港ヲ經テ英國、獨逸、米國、濠洲等ヘ仕向ケラル横濱ヨリ輸出セラル、モノハ甚ク少ナシ内地仕向地ハ大阪最モ主ナルモノトス露西亞革ハ殆ント縣下姫路市ノ第十師團ニ供給ス

(九) 販賣手續及取引慣習

本品ノ外國向ニ在テハ總テ神戸在留ノ外人貿易商ヲ經テ輸出ス製造者ニシテ地方仲買人ニ賣渡スモノト神戸ニアル仲買人ニ販賣スルモノト製造者自ラ貿易業者ニ賣渡スモノトアリ委託販賣ヲ爲ストキハ内地向ニ於テハ一坪ニツキ手數

料五厘ニシテ外國向ニ在テハ荷主ヨリ外國市場ノ氣配ニ鑑ミ相當ノ指値ヲナシ荷物發送ノ際代價ノ約十分ノ八ニ相當スル金額ヲ被委託者ヨリ借入レ(利子ヲ負擔セス)置キ他日精算スルモノニシテ若シ外國市場不振ノタメ取引出來サルトキハ更ニ價格ヲ協定シ精算スルヲ例トス

(十) 相場

最近(四十年七月)ニ於ケル神戸賣リ相場ハ大要左ノ如シ

一等品	一坪ニ付	三十二三錢以下
二等品	同	三十錢以下
三等品	同	二十七八錢以下
四等品	同	二十二三錢ヨリ二十五六錢

備考

四等品ハ輸出不合格品(即チ「ベケ」品)ニシテ皆内地賣トス

露西亞革 一坪ニ付 三十七錢ヨリ三十九錢

(十一) 輸出狀況

輸出品ハ姫路革ノミニ限ラレ其精白ニシテ彈力ニ富ミ價格亦廉ナルヲ以テ近來海外ニ需要ヲ増シ輸出漸ク盛ナリ而シテ日露戰爭中ハ異例ノ好潮ヲ以テ輸出セラレタリシモ是レニ伴フテ粗製濫造ノ惡弊ヲ生シ遂ニ海外需要者ノ嫌厭ヲ來シ加フルニ貿易商人ノ思惑賣買ノ益ンニ行ハレタルタメ海外市場ニ停滯ヲ招キタル結果漸次不振トナレリ然レトモ在外停滯ノ消散ト粗製濫造ノ防止トニヨリ遠カラス之レヲ回復スルニ至ルヘシ

(十二) 荷造法及其費用

兵庫縣

産地ニ於テハ神戸迄ノ假荷造ヲナスニ過キスシテ製品十五枚ヲ一梱トシ古新聞紙ニテ中包ヲナシ其上ヲ菴ニテ覆ヒニケ所ヲ結束シ縦繩ヲ掛ク其費用約十錢ヲ要ス

(十三) 輸出先ニ於ケル用途
従前ハ主ニ袋物其他花模様等ヲ施シテ裝飾ノ用ニ供セラレシカ現今ハ「ツボン」釣ノ力皮、婦人用ノ帯皮及「ボタン」ノ接觸スル部分其他椅子、壁張、車駕ノ内張等家具什器等其用途甚タ廣シ

(十四) 長所欠點並ニ改良スヘキ要點
姫路草ハ其質柔軟ニシテ韌強性ニ富ミ純白ニシテ價格亦外國品ニ比シ遙カニ低廉ナリ然レトモ脱脂不充分ノタメ各種ノ染色充分ナラサルト水濕ニ遇ヘハ膠質還元シテ軟性ヲ失ヒ長年月ヲ經ハ白色ノ稍曇リヲ帶ブコトアリ之等ハ將來改良ヲ要スヘキコトニ屬ス

(十五) 主ナル製造者及取扱商店

製造者	姫路市本町	丸山芳介
	飾磨郡花田村	菅治平
	同 同	大垣伊三郎
取扱商店	神戸元居留地	シモン、エバース商會
	同 同	ラヌベ商會
	同 同	野澤組神戸支店

(四) 柳行李

(一) 産額	年次	數量	價額
	三十五年	一、四六三、二七五	二八一、六五〇
	三十六年	九三九、〇二五	二〇一、九〇二
	三十七年	一、一四九、一二〇	三一九、四一〇
	三十八年	一、五九一、八〇二	九八九、一五九
	三十九年	九八七、三七五	七二八、〇一三

(二) 主要産地
但馬國城崎郡ヲ最トシ之レニ次クハ出石郡トス其他養父郡美方郡内ニモ多少ノ産出アリ

(三) 製造戸數及職工數 (三十九年)

製造戸數	九六五戸
職工數	一、四〇二人
男	五三三人
女	一、九三五人
合計	一、九三五人

(四) 製産狀況

本業ハ近時偶々専業トスルモノナキニアラスト雖モ其大部分ハ農家ノ副業ニシテ杞柳ノ作付、行李ノ下地作り、仕上ケ

ハ多ク各分業トシテ營メリ

本品ハ往時ヨリ縣下但馬ノ特産品トシテ全國ニ需要セラレ維新後ニ於テ交通ノ至便トナルニ伴ヒ益々需要ヲ増加シ斯業逐年盛大ニ向ヘリ殊ニ近來ニ於ケル進歩ハ甚タ顯著ナルモノニシテ獨リ内地需要ニ止マラス海外ニ於テモ本品ノ旅行用ニ適スルヲ以テ外人ノ嗜好スル所トナリ漸次輸出ヲ増加シ加フルニ軍用飯盒及靴ニ之レヲ用ヒラル、等ニヨリ著シキ生産ヲ増大セリ殊ニ日露戰爭ニ際シテハ軍需品ノ製産頗ル多ク爲メニ三十八年ノ如キハ未曾有ノ盛況ヲ呈シ戰後モ尙引續キ好況ニシテ前途甚タ有望ナリ

(五) 原料ノ需要供給

原料杞柳ハ主トシテ但馬地方ニ産出スルモノヲ使用ス近時本業ノ顯著ナル發達ト共ニ杞柳ノ作付反別モ逐年増加シ從テ其收護モ年々増大スルト雖モ現下ノ狀態ハ到底地方産ヲ以テ需要ヲ充タス能ス北海道及岐阜地方ヨリ輸入シテ補足シ居レリ

(六) 製造費及收益ノ比較

長尺一個ニ對スル大要左ノ如シ

收 入	一、金一四七十錢	賣 價	原料杞柳一貫目
支 出	一、金二四十錢		麻糸十六匁代
	一、金八 錢		職 工 賃
	一、金十二錢		
	計金一圓五十錢		
	差引金二十錢	利 益	

一、金十九錢

縁組織工賃

一、金一 錢

雜 費

計金一圓五十錢

差引金二十錢

利 益

(七) 販出額及仕向地

産額ノ大部ハ縣外ニ販出セラレ内海外ニ輸出セラル、モノ少ナシトセス而シテ仕向地ハ内地向ニアリテハ殆ント全國各地ニ亘リ殊ニ東京、京都、大阪及師團、旅團ノ所在地へ販出スルモノ多シ外國向ハ清、韓兩國向キヲ主トシ南洋諸島及北米合衆國へモ多少之ヲ輸出ス

(八) 販賣手續及取引慣習

製造業者ヨリ直接ニ各地小賣商人ト取引スルモノト仲買商ノ手ヲ經テナスモノトアリ從前ハ概ネ大阪ニ於ケル仲買商ノ手ヲ經テ各地方へ販賣セラレシカ日露戰爭當時ヨリ急激ナル發展ヲナセシ結果直接各地方商人ニ販賣スルモノ續出セリ而シテ運賃ハ多ク荷受主ノ負擔ニシテ代金ハ總テ現品仕向地若ノ上受取ルヲ例トス

(九) 相 場

本品ノ相場ハ大要左ノ如シ

大 々 馬	貳圓三十一錢
長 尺	壹圓六十五錢
大 馬	壹圓九十三錢
尺 馬	壹圓三十二錢

兵庫縣

大	大	上	兩	七寸三番	七寸二番	七寸一番	尺	大
荷	荷	下	掛	番	番	番	荷	荷
壹圓三十二錢	壹圓五錢	壹圓	壹圓	八十三錢	六十三錢	貳圓	壹圓五錢	壹圓三十二錢
				八十三錢				
				貳拾七錢五厘				
				貳拾五錢三厘				
				參圓四十一錢				
				七錢二厘				
				六錢五厘				
				五錢				
				十錢				

(十) 荷造法及其費用

本品ハ大小種々アルカ故ニ其荷造ノ方法モ多少異ナルモ内地販賣ノモノハ概ネ十二個宛重ネ合セ之ヲ蒔包トシ繩ニテ結束ス此費用約十二錢ヲ要ス而シテ海外輸出ノモノハ容積一噸ノ箱入トス此費用約二圓ヲ要スト云フ

(十一) 長所缺點並ニ改良スヘキ要點

本品ハ旅行用衣櫃トシテ金屬製木製ニ比シ攜帶極メテ便ニシテ且雨水等ノ浸入スル憂ナク價格亦皮革製、金屬製等ニ比シ頗ル廉ナリ然レトモ船車等ノ積卸ニ際シ線角ノ編綴破綻シ易シ此點ハ第一ニ改良ヲ要スル所ナリ

(十二) 主ナル製造者

域崎郡豐岡町	和	田	垣	淑
同	遠	藤	嘉	吉
同	郎	郎	郎	郎

(五) 素 麵

(一) 產 額	年 次	數 量	價 額
	三十五年	二、三四四、三三五	八一〇、三四二
	三十六年	二、二六八、八三八	八七八、三一一
	三十七年	三、三七七、三八五	一、三九八、一一一
	三十八年	三、二九一、五二九	一、四七八、一一〇
	三十九年	四、四二四、九七〇	二、〇七一、八九七

(二) 主要產地

掛保郡ハ最モ主ナル產地ニシテ全產額ノ七割以上ヲ生産シ之ニ亞ク者ハ武庫郡、飾磨郡ニシテ此他掛、播ノ各郡ニ產出ス

(三) 製造戸數及職工數 (三十九年)

兵庫縣

製造戸數

二、五八八戸

職工數

男
女

五、七四二人

四一八人

合計

六、一六〇人

(四) 製産狀況

往時本品ノ製造ハ總テ農家ノ餘業ニ屬セシモ近年ハ之ニ専從スルモノ續出シ株式組織ノ會社興レルノミナラス從前ハ
専ラ手工ト天候トニヨリ製出セシカ明治三十年以來製麵器械ヲ使用シ乾燥室ヲ設備スルモノ益々多キヲ加ヘ著シク生
産ヲ増進シ嘗テ關西ニ於ケル本品相場ノ大阪ニ立テラレタリシヲ現時ハ縣下揖保郡ニ於テ公定セラル、ニ至リ斯業ノ
發達ハ頗ル顯著ナルモノニシテ三十九年ニ於ケル一戸平均産額ハ八百圓以上ニ達スルヲ見レハ今ヤ本業ハ農業ノ餘業
ヨリ移リテ專業的工業ノ域ニ進ミタルコト明カナリ

今最近數年間ニ於ケル本業ノ狀況ヲ見ルニ三十五、六年ハ原料麥粉ノ騰貴ニ拘ハラス一般商況ハ概テ沈滞ナリシヲ以
テ例年ノ製産ヲ見ル能ハス概シテ不振ニ陥リシカ三十七年ニ入り漸次ニ之ヲ回復シ三十八年ニ在リテハ原料豐富ニシ
テ且廉價ナリシノミナラス製品市價ノ騰貴ニヨリ需要多カリシ爲メ益々好況ヲ呈シ殊ニ三十九年ニ入りテハ一層ノ盛
況ヲ示シ未曾有ノ生産ヲ見タリ

抑モ本品ハ専ラ内地ニ於テ消費セラル、モノナリト雖モ夏季ニ於ケル副食物又ハ特用食品トシテ全國一般ニ用フルノ
ミナラス地方ニヨリテハ冠婚葬祭等ノ儀式ノ必要品トシテ又漁業者ノ出漁中ニ於ケル常食トシテ用ヒラレ其需要甚タ
多キカ故ニ近時前記ノ如キ業態ノ發達ニ伴フ生産額ノ激進ハ内地各地ニ於ケル販路益々擴大スルニ至リ前途亦望ミ少
ナシトセス

(五) 原料ノ需要供給

原料小麥粉ハ殆ント内地産ヲ用フ只機械製ノ原料麥粉ニ混用スルタメ又ハ内地産ノ不足若クハ高價ナルトキニ限り僅
カニ米國及加奈陀産麥粉ヲ用フ而シテ農家ニ在リテハ自家ニ於テ收穫シタル小麥ヲ地方水車業着ニ託シテ製粉セシメ
タルモノヲ用フルヲ以テ器械製ノ原料ニ比シ概シテ上等品ナリ

(六) 製産費及收益ノ比較

三十斤入レ六箱ニ對スル大要左ノ如シ

賣 價	支 出	手 製	器 械 製
一五、六〇〇 _圓	一〇、五三一	一一、七〇〇 _圓	
	職 工 賃		八、七六〇
	税金及檢査手数料		一、〇〇〇
	雜 費		一八〇
	合 計		三二〇
	差 引 (利 益)		一〇、二六〇
			一、四四〇

(七) 販出額及仕向地

生産額ノ大部分ハ之ヲ縣外ニ輸出セラル、所ニ係リ其仕向地ハ手製品ハ主トシテ京畿及紀伊地方ヨリ以東及山陰、九

州各地ニシテ機械製ハ中國、沖繩、臺灣及滿、韓方面ナリト云フ

(八) 販賣手續及取引慣習

揖保郡地方ニ産スルモノハ同郡網干驛ノ附近ニアル播州素麵株式会社ニ於テ製造者ノ委託ニヨリ時々製品ヲ仲買人ノ競争入札ニ附シテ販賣スルヲ普通トスレトモ右競落價格ヲ標準トシテ該會社ヲ經スシテ直接仲買人ニ販賣スルコトアリ武庫郡地方ニ産出スルモノハ大阪間屋業ニ直接販賣スルヲ普通トス

(九) 相場

揖保郡産十五斤入六箱ニ對スル概價ハ左ノ如シ

品名	手製價額	機械製價額
三神ノ糸	九、五〇〇 <small>圓</small>	—
聖ノ糸	七、五〇〇	—
三幡ノ糸	六、〇〇〇	五、二〇〇
譽ノ糸	五、五〇〇	四、五〇〇
揖保ノ糸	五、二〇〇	三、九〇〇
龍ノ糸	五、一〇〇	三、八〇〇
八尋ノ糸	五、〇〇〇	三、七〇〇

(十) 荷造法及其費用

十五匁ヲ以テ一把トナシ三十斤(稀ニハ十五斤詰トナスモノアリ)縦又ハ梅ノ五分板ヲ以テ長サ一尺九寸、巾六寸三分、深サ七寸ニ作レル箱ニ入レ繩ニテ二ヶ所ヲ結束ス而シテ蓋ハ釘付トシ夫レニ組合ノ章標及ヒ検査證ヲ貼付シ製造

(十一) 主ナル製造者
人ノ住所氏名ヲ記入ス此ノ費用手製麵ニアリテハ約十五鐵三厘機械製麵ニアリテハ十八鐵三厘(把賃ヲ含ム)ヲ要ス

揖保郡龍野町	淺尾長兵郎
同	曾谷卯吉
同 譽田村	山口卯之市
同 石海村	原田宗三郎
揖保郡越部村	井上槌右衛門
同 揖保村	眞殿賢治
飾磨郡余部村	北山堅藏
同	高野清右衛門
同 八幡村	森作藏
武庫郡本山村	松田吉次郎
同	松田新七
三原郡福良町	守本猪太郎

(十二) 事業上ノ施設

播州灘素麵製造同業組合、播磨國揖保郡素麵同業組合及三原郡福原町素麵營業組合及加西郡素麵同業組合アリテ製品ノ検査ヲ行ヒ品質ノ改良事業ノ發達ヲ圖レリ

(去) 麥粉

(一) 產額	年次	數量	價額
	三十八年	一二、一八五、九八一	六九〇、二三三 _円
	三十九年	二五、七七二、〇四一	一、一六三、一五二

備考 三十八年以前ハ統計ノ微スヘキモノナキヲ以テ産額不明ナリ

(二) 主要產地

母保郡ハ最モ主ナル產地ニシテ全産額ノ約三分ノ二ヲ占ム之レニ亞クモノハ飾磨、神崎郡トス

(三) 製造戸數及職工數 (三十九年)

製造戸數	一六〇戸
職工數	四八九人
男	一三人
女	一三人
合計	五〇二人

(四) 製産狀況

製粉業ハ未ダ幼稚ニシテ作業ハ總テ水車ニヨリ規模甚タ小ナリ而シテ從前ニ在テハ總テ貸業ナリシカ近來獨立セル製粉業者ヲ生セシモ其數未タ甚タ多カラズ
本業ハ製麵原料ノ供給ヲ唯一ノ目的トスルモノナルカ故ニ其盛衰ハ一ニ製麵業ノ消長ニ關聯ス近年素麵製造ノ顯著ナ

ル發展ニ伴ヒ本業モ亦益々盛大ニ向ヒ三十九年ノ如キハ素麵生産ノ頗ル盛ナリシタメ本品ノ産額モ亦著シク増加シ前年ニ比シ殆ント二倍ヲ産出セリ要スルニ本縣ニ於ケル素麵原料ハ主トシテ内地産麥粉ヲ使用スルカ故ニ外國産麥粉ノ壓迫ヲ受クルコト極メテ尠ナク製麵業ノ發達ト共ニ本業モ亦將來益々進歩スルヲ得ヘシ

(五) 原料ノ需要供給

原料小麥ハ主トシテ縣下及四國、九州ニ生産スルモノヲ用フルモ内地産ノ高價ナルカ又ハ品不足ノトキハ外國産ヲ充用スルコトアリ

(六) 製産費及收益ノ比較

一石ニ對スル貸業ノ收支計算大要左ノ如シ

收 入	支 出
一、金六十九錢	雇人給金
一、金二十一錢	諸税金組合經費
計金九十錢	器具修繕費
	雜費
	計金七十錢

兵庫縣

差引

金二十錢

利益

(七) 販出額及仕向地

製品ハ殆ント素麵製造ノ原料ニ供セラル、ヲ以テ縣外へ輸出スルモノナシ

(八) 販賣手續及取引慣習

素麵製造者ノ貸業ヲナスモノ大部ヲ占メ其獨立製粉業者ニアリテモ皆地方製麵業者ニ販賣スルヲ以テ特ニ掲クヘキコトナシ

(九) 相場

一石(二叭)ニ對スル概價ハ左ノ如シ

一等品	九圓
二等品	八圓六十錢
三等品	八圓二十錢

(十) 荷造法及其費用

叭入トナシ繩ニテ三ヶ所ヲ結束ス重量十四貫四百目ヲ普通トス此ノ費用約十二錢内外ヲ要ス

(七) 寒天

(一) 産額

年次	數量	價額
三十七年	五一、一八九 <small>卍</small>	二二五、五〇九 <small>卍</small>
三十八年	八、六四六 <small>卍</small>	一七〇、五九一
三十九年	四六、一六二	二五〇、二七〇
備考	三十六年前ハ微スヘキ統計ナキヲ以テ産額不明ナリ	

(二) 主要産地

武庫郡ハ最モ主ナル産地ニシテ約三分ノ二ヲ産出シ其他ハ川邊、有馬ノ兩郡ヨリ産出ス

(三) 製造戸數及職工數 (三十九年)

製造戸數	一八戸
職工數	四七八人
男	一六五人
女	六四三人
合計	六四三人

(四) 製産狀況

本品ハ主トシテ海外ニ輸出セラル、モノニシテ極寒ノ時ニ於テ製セラレ其主要工程タル凍結ハ一ニ天候ニヨリテセラ
ル是レヲ以テ三十八年ノ如キハ海外ニ於ケル需要ニ格別ノ變化ナカリシト雖モ製造期節ニ於テ雨雪多ク寒氣ノ和カナ
リシカ爲メ前年ニ比シ約二割ヲ減産セリ業況斯ノ如クナルノミナラス近時原料及製造費ノ上進セルニ拘ハラヌ清商其
他仲買人ノ壓迫ニヨリ製品價格ノ是レニ伴ハス事業次第ニ困難ニ向ヒツ、アレハ將來格別ノ發展ヲナスコトナカルヘ
シ

(五) 原料ノ需要供給

原料海藻ハ紀伊及伊豆地方ヨリ來レル者ヲ主トシテ用ヒ其他内地各地産及臺灣、支那、朝鮮産ノモノモ僅カニ混用セリ

(六) 販賣額及仕向地

製品ハ殆ント全部神戸港ヲ經テ輸出セラル其主ナル仕向地ハ清國ニシテ歐米各國ニモ多少ノ輸出ヲナス

(七) 販賣手續及取引慣習

總テ大阪、神戸ニ在ル清國貿易商又ハ仲買人ノ手ヲ經テ販賣ス

(八) 相場

本品ハ普通三等ニ區別シテ立相場ヲナス概シテ百斤ニ付五十圓乃至七十五圓ノ間ニアリ

(九) 輸出先ニ於ケル用途

食料又ハ織物ノ艶出用トシテ使用スルノ外食物ノ防腐劑トシテ用フ

(十) 主ナル製造者

武庫郡西宮町
同 住吉村

西宮寒天製造株式會社
松下寒天製造所

(六) 凍豆腐及凍蒟蒻

(一) 産額

年次	凍豆腐		凍蒟蒻	
	數量	價額	數量	價額
三十五年	三四、三二一、二〇〇	一〇四、二〇二	三一、八一、〇〇〇	五三、二二一

三十五年	四七、四九九、五〇〇	一六二、八四九	二七、三一三、〇〇〇	四六、七一
三十六年	二八、三八三、九〇〇	一一二、〇〇〇	二五、六九八、〇〇〇	三五、五九七
三十七年	四〇、〇三三、五〇〇	一三八、二〇五	三二、三五四、五〇〇	五三、九〇一
三十八年	四二、七六八、五五〇	一四八、七三八	四七、〇八五、〇〇〇	九一、二八一

(二) 主要産地

凍豆腐ハ多可郡第一ノ産地ニシテ加西郡、多紀郡、氷上郡及神崎郡之レニ亞ク凍蒟蒻モ亦多可郡ヲ以テ第一トシ神崎郡、氷上郡之ニ亞ク

(三) 製造戸數及職工數 (三十九年)

製造戸數	職工數		製造戸數	職工數	
	男	女		男	女
凍豆腐	二一〇戸	八八三人	凍蒟蒻	二一四戸	八五五人
合計	八九三人	一〇人	合計	一、三〇五人	

(四) 製産状況

本品ノ製造ハ中國山脈ノ過クル一帶寒氣強烈ナル山間ニ於テ冬季農家ノ餘業トシテ行ハル、モノニシテ操業期間ハ僅ニ三四ヶ月ニ過キサレトモ其作業甚タ容易ニシテ且ツ比較的収益多キカ故ニ農家ノ副業トシテ甚タ適當ノモノナリ然レトモ本品ノ需給ハ自ラ定數アリテ著シキ發達ヲナス能ハサルモ凍豆腐ハ近年其形狀ヲ改メ花形ノモノヲ製出セルヲ以テ従前ニ比シ賣行甚タ良好ナルニ至リ凍蒟蒻ニ在テモ内地ニ於ケル最良品トシテ需要次第ニ増進シツ、アレハ將來

顯著ナル發達ハ到底爲シ得サルヘシト雖モ亦決シテ少ナキ事業ニハアラサルナリ

(五) 原料ノ需要供給

凍豆腐ノ原料大豆ハ主トシテ滿、韓產ヲ使用シ内地產ハ僅カニ用ヒラル、ニ過キス滿、韓產ハ品質稍内地產ニ劣ルカ如キモ其供給多キ價格亦甚タ廉ナリ

凍蒟蒻ノ原料タル蒟蒻玉ハ京都府下天田郡、加佐郡、竹野郡產ノモノヲ主トシテ需要ス此ノ外ハ岡山縣備中產ノモノ及地方產トス莖粉ハ茨城郡久慈郡產ノモノヲ東京若クハ大阪商人ヨリ購入ス近時本品ノ製造地方ニ於ケル蒟蒻玉ノ栽培ハ年々増加シツ、アリト雖モ未タ僅カニ需要總額ノ十分ノ二、三ヲ得ルニ過キス

(六) 製産費及收益ノ比較

一萬個ニ對スル大要ヲ示セハ左ノ如シ

(イ) 凍豆腐

收入

一、金三十七圓

支出

一、金二十四圓

一、金七圓

一、金四圓

計金三十五圓

差引

賣價

原料大豆代

職工賃

雜費

金二圓

利益

(ロ) 凍蒟蒻

收入

一、金二十五圓

支出

一、金十圓

一、四圓九十五錢

一、金五圓四十三錢

計金二十圓三十八錢

差引

金四圓六十二錢

利益

(七) 販出額及仕向地

凍豆腐、凍蒟蒻共大部分縣外ニ販出ス其主ナル仕向地ハ凍豆腐ニアリテハ神戸、岡山、津山、廣島地方トシ凍蒟蒻ハ大部分大阪ニ輸出シ同地ヨリ主ニ九州地方ニ仕向ケラレ其他ハ地方ヨリ直接ニ中國、四國、伊勢、尾張地方ニ販出ス此ノ外大阪ヲ經テ滿、韓及米國ニ輸出セララル、モノアルモ其額極メテ僅少ナリ

(八) 販賣手續及取引慣習

地方仲買人ハ農家ニ就キ其製品ヲ買集シ大阪若クハ需要地商人ニ販賣シ現金取引ヲ普通トス

(九) 相場

兵庫縣

製品一萬ニ對スル概價ハ左ノ如シ

凍 豆 腐
凍 蒟 蒻

十七八圓乃至三十八圓五十錢
三十圓乃至四十圓

(十) 荷造法及其費用

凍豆腐ノ荷造ニハ二種アリ一ハ箱詰ニシテ一ハ籠詰トス籠詰トスルモノハ底ヨリ濕氣ノ浸入ヲ防クカ爲メ藁ヲ敷キテ製品ヲ不紀律ニ二千五百個又ハ千二百五十個宛投入シ其口ハ菰ヲ以テ覆ヒ繩ニテ結束ス箱詰トナスモノハ凡ソ石油箱大ノ箱ニ規則正シク詰メ蓋ヲ覆ヒテ釘付トナス箱詰ハ籠詰ニ比スルニ運搬上便ナルノミナラス濕氣ノ浸入モ充分ニ豫防シ得ルノ利益アリト雖モ荷造費ニ於テ二倍以上ヲ要ス即チ籠詰ハ製品一萬個ニ付約七十二錢内外ナレトモ箱詰ハ一圓五十錢内外ヲ要ス

凍蒟蒻ハ適宜ノ數ニ結束シ莖ヲ以テ包ミ兩口ニ莖ヲ當テ之ヲ綴テ横ニ繩ヲ掛ク

(十一) 主ナル製造者

多可郡杉原谷村ノ内大箸村	藤 田 平 右 衛 門
同 同	永 井 治 三 郎
同 同	神 崎 増 藏
同 同	神 崎 治 之 吉
同 同	永 井 金 治
同 同	高 杉 逸 藏
氷上郡和田村ノ内坂尻村	古 西 元 藏
同 同	

多可郡松井庄村ノ内多神村
同 同

谷 尾 秀 三 郎
谷 本 金 作

(十二) 事業上ノ施設

凍豆腐ノ製造ニ就テハ多可郡ニ於ケル野間谷物産株式會社カ地方製造者ノタメ原料ノ簡易購入、製品ノ確實販賣ニ努ムルアリ凍蒟蒻ニ在テモ準則組合アリテ事業ノ發達ヲ圖レリ

(九) 輸 出 向 屏 風

(一) 産 額	年 次	數 量	價 額
	三十五年	二二、八〇〇 _元	九五、二〇〇
	三十六年	六〇、〇〇〇	二一〇、〇〇〇
	三十七年	五〇、〇〇〇	一七〇、〇〇〇
	三十八年	九四、八三〇	一九一、五七七
	三十九年	六七、〇〇〇	二六八、〇〇〇

(三) 種 類

金巾地、寒冷紗地、縹子地ノ普通屏風及炬屏ト稱シテ四枚折ノモノアリ

(三) 主 要 産 地

總テ神戸市ニ於テ産出ス

兵庫縣

(四) 沿 革

本品ハ明治六、七年ノ頃表具師戀田清三郎、建具師松本善七ノ兩人共同シテ刺繡地ヲ京都ヨリ購入シテ屏風ヲ作り試賣セシニ大ニ外人ノ嗜好ニ投シ年々需要ヲ増シ以テ今日ニ至レリ

(五) 製造戸數及職工數 (三十九年)

製造戸數	一六戸
職工數	男 七〇人

(六) 製産並ニ輸出狀況

本縣ニ於ケル屏風ノ製造ハ刺繡地及外枠等ノ材料ヲ殆ント他地方ヨリ輸入シ之ヲ組立ツルニ過キスシテ屏風屋ト稱スル十六戸ノ製造家ハ職工ヲ常備シテ之レカ製造ヲナスノ外貨業者ヲシテ製作セシムルコトアリ而シテ常備職工ノ賃銀ハ多ク月額ヲ以テ支給スルヲ普通トスレトモ中ニハ出來高勘定ノモノアリト云フ

本縣ニ産スルモノハ京都産ニ比シ概シテ下等品ニシテ金巾又ハ寒冷紗ニ刺繡ヲ施シタルモノヲ以テ作レルモノ多キヲ以テ本縣産ハ安物トシテ海外ニ需要多ク晩近益々盛大トナレリ三十七、八年ニ於テ戰爭ノ爲メ多少ノ不振ヲ見タリシモ三十九年ハ頗ル好況ヲ呈シ四十年ニ入り前年ノ輸出過剩ノタメ前年ノ盛況ニ及ハスト雖モ例年ニ比シ尙好況ヲ示シツ、アリテ斯業ハ漸次發達ノ大勢ニアリ

(七) 原料ノ需要供給

刺繡布巾ハ多ク徳島縣ヨリ來ルモノヲ用フルノ外神戸ニ於テ製スルモノ多少需要セラル而シテ上等屏風ニ用フル刺繡布ハ京都ヨリ購入スルモ其額ハ極メテ少ナシ外枠ハ塗漆セルモノヲ紀州地方ヨリ輸入セリト云フ

(八) 販出額及仕向地

製品ハ全部海外ニ輸出スルモノニシテ其主ナル仕向地ハ歐、米ニシテ清、韓地方ニモ多少仕向ケラル

(九) 販賣手續

製造家ハ普通毎年九月ヨリ一月ニ至ルノ間ニ於テ在神戸商館ノ注文ヲ受ケ翌年内ニ製造シテ引渡シ此等商館ノ手ヲ經テ海外ニ輸出セラル

(十) 輸出先ニ於ケル嗜好

清國ニ輸出スルモノハ赤地或ハ黒地ノ金巾地ニ金色其他華麗ナル刺繡ノモノヲ好ム他ノ輸出先ニ在テハ特異ノ嗜好アルヲ見スト云フ

(三) 陶 磁 器

(一) 産 額	(二) 年 次	産 額
	三十五年	二〇九、二六四
	三十六年	二一九、一〇八
	三十七年	一七八、七八七
	三十八年	一九八、〇五九
	三十九年	二八〇、六一九

備考 本統計ノ外給付品多額アリト雖モ其數詳カナラス

(二) 種 類

兵庫縣

淡路焼、交趾焼、人丸焼、舞子焼、出石焼、及繪付品等トス繪付品ハ輸出向ニシテ飲食器多シ

(三) 主要産地

淡路焼ハ淡路島ヨリ産シ交趾焼、人丸焼、舞子焼ハ明石郡ヨリ出石焼ハ出石郡ヨリ産出シ繪付ハ神戸市ニ於テセラル

(四) 製造戸數及職工數 (三十九年)

製造戸數 一五五戸

職工數 六九九人

男 二一三人

女

合計 九一二人

右ノ外繪付品ノ製造戸數及職工數ヲ神戸貿易組合ニツキ聞キ得タル所ニヨリ示セハ大約左ノ如シ

製造戸數 二〇戸

職工數 三〇〇人乃至四〇〇人

(五) 製産并ニ輸出狀況

本縣ハ原料ニ富ミ斯業ニ適セルヲ以テ往時ヨリ行ハレ維新以來益々盛大トナレリ然レトモ未タ在來ノ舊態ヲ脱セス築窯造坯共ニ格別ノ進歩ヲナセルモノナク其産業組織ハ一般我國ニ行ハル、モノト大差ナキモ只繪付ハ製陶業ノ部分工業ニ屬シ且ツ近來ノ發達ニ係ルモノナルカ故ニ聯カ其趣キヲ異ニセリ即チ繪付業ハ燒上ケタル陶磁器ヲ購入シテ之上繪ヲ施シ着繪ノ脱落セサル程度ニ於テ燒成スルモノナルカ故ニ其燒窯ハ普通ノモノニ於ケルヨリ小ニシテ且ツ基數モ多キヲ要セス是レヲ以テ前記二十戸ノ繪付製造家ハ自家ニ燒窯ヲ設置セルコト勿論ナルモ賃職ニ従事スル職工ニ在テモ殆ント自家ニ小ナル燒窯ヲ有シ製造家ヨリ給セラレタル生地ニ上繪ヲ施シ燒成シテ引渡スモノ多ク從テ製造者ノ

内ニ常備セラル、職工ハ其數僅少ナリ

本品ノ最近ニ於ケル狀況ヲ見ルニ三十七年ハ戦争ノ影響ヲ受ケ非常ノ不振ニ陥リシカ三十八年十一月頃ヨリ漸次景況ヲ回復シ戰勝國ノ商品トシテ海外ニ著シキ需要ヲ増シ來リシノミナラス内地ニ於テモ賣行好ク殊ニ軍隊ノ凱旋等ニヨリ盃類ノ需要激增シ三十九年中ハ殆ント注文ノ全部ニ應スル能ハサルノ狀況ニシテ頗ル段盛ヲ呈セリ四十年ニ入り前年ノ如ク注文多カラサルモ例年ニ比スレハ稍好況ニシテ本業ハ概シテ益々進歩シツ、アリ

(六) 原料ノ需要供給

淡路焼ハ原料土ハ總テ三原郡大野村産ニシテ甚タ豊富ナリ土質白色ナラサルヲ以テ備前三石産ノ蠟石及讃岐産ノ硃石、長石ヲ混用ス交趾焼、人丸焼、舞子焼ニ在リテハ三原郡大野村産ノモノ及同郡垂水村舞子附近加古郡三見村地方ニ産スルモノヲ混用セリ出石焼ノ原料土ハ出石郡内城山及寶埴村ヨリ産スルモノヲ使用ス此他ノ陶器ニ在テモ殆ント地方ニ産出スルモノヲ用フ繪付ノ生地ハ尾濃地方ヨリ購入ス

(七) 販出額及仕向地

繪付品ハ殆ント海外ニ輸出セララル、ノ外淡路焼モ相當ノ輸出アリテ内地ノ需要ハ産額ノ約三四分ナリト云フ而シテ海外ノ主ナル仕向地ハ北米合衆國ヲ第一トシ清、韓、英領印度地方トス

(八) 販賣手續及取引慣習

米國及印度地方ニ輸出スルモノニアリテハ總テ在神戸外國商人ノ手ヲ經ルモノニシテ賣込商ハ在留外商ハ見本ヲ示シ外商ハ更ニ賣行ノ見込アル見本ノミ其需要地ニ送リテ實際賣行アルモノト認ムルモノニ付テ注文シ來ルヲ普通トスルカ故ニ見本提示ノ後注文ヲ受クルニ至ルマテハ甚タ長シ清、韓地方へ出スモノハ同地代理店若クハ出張所又ハ在留邦人ニ直接輸出ス

(九) 荷造法及其費用

本品ハ最モ破損シ易キモノナルカ故ニ大小及形状ノ如何ヲ問ハス一々齟ニテ卷キタル上箱詰トナス其費用ハ詳細ニ之レヲ知ルヲ得サルモ平均原價ノ百分五ヲ要スルモノト見テ大差ナカルヘシト云フ

(十) 主ナル製造者

- 神戸市元町 神陶株式会社
- 同 三宮町 泉平次郎
- 津名郡洲本町 淡路製陶株式会社
- 三原郡阿萬村 淡陶株式會社
- 出石郡 出石改良陶磁器株式會社

(廿) 貝 釦

(一) 産 額	年 次	數 量	價 額
	三十八年	一四二、〇〇〇 ^冊	四三、〇〇〇 ^冊
	三十九年	九七、四四八	三三、三八八

備考 三十七年前ハ概スヘキ統計ナキヲ以テ産額詳カナラス

(二) 主要産地

神戸市ハ最モ主ナル産地ニシテ之レニ亞クハ揖保郡トシ津名郡ニモ多少ノ産出アリ

(三) 製造戸數及職工數 (三十九年)

製造戸數	四戸
職 工 數	男 一三三人
	女 七二人
合 計	一九五人

(四) 製産并ニ輸出狀況

本品ノ製造ハ未タ甚タ盛シナラスト雖モ本邦ニ於テ大阪市ニ次キ其産出多シトス從來本品ノ製造上原料貝殻ノ漂白ハ更ニ行ハレサリシカ近年佛國ニ於テ高瀬貝、榮螺貝、玉貝、廣瀬貝、夜光貝ノ漂白法發見セラレシ以來本縣ニ於テ之レカ漂白ヲナスニ至リ品位ヲ上進シ賣行益々良好トナレリ貝眞珠貝、鮑貝ノ漂白ハ未タ歐、米各國ニ於テモ其方法發見セラレサルカ故ニ是等ノモノニアリテハ原殻ノマ、ニテ製出シ居レリ

本品ハ殆ント海外ニ輸出セラル、モノニシテ三十七、八年ハ日露戰爭ノタメ不況ヲ呈セシカ平和克復後ハ俄カニ盛況ヲ呈シ漸次發達ノ傾向ニアリ

(五) 原料ノ需要供給

原料トシテ使用スルモノハ眞珠貝、高瀬貝、廣瀬貝、鮑貝、榮螺貝、唐貝、蝶貝、夜光貝、南光貝等ニシテ常陸、伊勢、土佐、肥前、琉球産ノ外濠洲並ニ印度地方産ヲ用フ而シテ是等原料ハ價額ノ高低實ニ著シキヲ以テ仕入上殊ニ注意ノ怠ルヘカラサルモノアルノミナラス時ニ海運ノ便ヲ缺キ事實上意外ノ困難ニ遭遇スルコト尠シトセス

(六) 販出額及仕向地

産額ノ殆ント全部海外ニ輸出スルモノニシテ其仕向地ハ佛、獨、英、米及伊太利、支那、印度、濠洲等トス

(七) 販賣手續及取引慣習

總テ在神戸外國商館ニ賣込ムモノニシテ見本ニヨリ賣買ノ約定ヲナスラ普通トス而シテ製品ノ代金ハ庫入後十五日乃至三十日內ニ授受スルノ慣例ナリ

(八) 相場

本品ハ其大小細工ノ粗々ニヨリ價格ニ非常ノ差異アルノミナラス原料貝殻ノ價格ハ高低實ニ著シキヲ以テ本品ノ市價亦從テ變動多シトス左ニ只概要ヲ掲クヘシ

真珠貝	十二哥ニ付	至自一四	圓九十七錢
高瀬貝	同	至自三三	圓五十五錢
廣瀬貝	同	至自三三	圓五十五錢
鮑貝	同	至自二六	圓二十七錢
茶螺貝	同	至自三二	圓五十五錢
玉貝	同	至自五二	圓八十五錢
唐貝	同	至自五六	圓百圓
蝶貝	同	至自三三	圓八十五錢
夜光貝	同	至自二二	圓二十八錢
南光貝	同	至自三三	圓五十五錢

(九) 荷造法及其費用

本品ハ其大小ニヨリ一哥又ハ五哥、六哥、十一哥、十二哥ヲ紙ニテ包ミ從ノ八分板ニテ造リタル箱ニ入レ鐵帶ヲ二ケ

所ニ附ス其費用約賣價ノ十分ノ二ヲ要ス

(十) 主ナル製造者

神戸市三宮町二丁目二百四十四番地	中村三平
同 市下山手通六丁目	井上六三郎
同 市布引町	東洋貿易卸製造會社
揖保郡龍野町	上田正太郎

(三) 竹器

(二) 産額	年次	産額
	三十五年	三一八、二三〇 _円
	三十六年	二五三、九七三
	三十七年	五七五、二三八
	三十八年	四〇五、二三四
	三十九年	八二五、九九七

(三) 種類

籠最モ多ク籬之レニ亞ク此ノ他菓子入、手套入、手巾入、行李、靴、椅子、卓子、棚等アリ

(三) 主要産地

兵庫縣

神戸市ヲ最トシ有馬郡之ニ亞ク其他揖保郡、多可郡、加西郡、氷上郡、多紀郡等ヨリモ多少ノ産出アリ

(四) 製造戸數及職工數 (二十九年)

製造戸數	五二五戸
職工數	男 八三〇人
	女 四六五人
合計	一、二九五入

(五) 製産並ニ輸出狀況

本業ノ最モ盛ナルハ神戸市ニシテ縣下ニ於ケル總産額ノ八割以上ヲ産出シ而カモ其製品ハ殆ント海外ニ輸出セラレ、モノナルカ故ニ神戸市ニ於ケル製造家ハ主ニ工場ヲ有シ多數ノ通勤職工ヲ雇傭セリ然レトモ有馬郡及其他ノ諸郡ニ在テハ總テ家内工業ニ屬シ且ソ農家其他ノ副業トシテ製出セラル現今本縣ニ於ケル竹器工業ハ全國中第一位ヲ占メ内外ニ需要多シ殊ニ近時外國向ハ甚タ好況ニシテ年々多額ノ輸出ヲナセリ是レ竹ハ東洋ニ於ケル特産トシテ外人ノ好奇心ニ投セルノミナラス本邦固有ノ精巧ナル手工ニ成レルモノニシテ輕便且ツ太々雅味ニ富ミ夏季ノ室内裝飾用トシテ大ハ歐、米人ノ嗜好ニ投シ殊ニ戰勝國ノ製品トシテ歡迎セラレ、ニ基クモノニシテ形狀其他ニ就キ嶄新ナル意匠ヲ考究シテ之ニ應スルニ於テハ前途亦甚タ多望ナルコト疑ヒナキ所ナルモ近年輸出品中往々粗製品ヲ混用セルモノアリテ爲ニ本品ノ信用ヲ失セントシ現ニ米國ニ於テハ竹材ヲ本邦ヨリ輸入シ在米邦人ヲシテ本品ノ製造ヲナサシムルモノアリ而モ年々竹材ノ輸入ヲ増加スルノ傾向アリト云フ此レ當業者ノ大ニ留意スヘキコトニ屬ス

(六) 原料ノ需要供給

原料竹ノ種類ハ眞竹、黒竹、破竹、虎斑竹、布袋竹、女竹、煤竹、篠竹、矢竹、明竹、孟宗竹等ニシテ主トシテ大分、

(七) 販出額及仕向地
山口、宮崎、京都、高知、徳島、香川、和歌山、静岡、鹿兒島ノ各府縣及本縣下ノ生産品ヲ使用ス

神戸産ノ殆ント全部即チ本縣總産額ノ約八割及有馬産ノ一部ヲ海外ニ輸出ス其仕向地ノ主ナルモノハ濠洲、英領印度ニシテ其他ノ家具類、籠等ハ米國及英國ヲ主トシ此ノ他歐、米各國及南米各地へ輸出セラレ

(八) 販賣手續及取引慣習

内地向ハ直接地方商人へ賣渡シ或ハ之ヲ行商シ又ハ各地ノ問屋ニ販賣ス有馬郡ニ産スルモノニアリテハ浴客ノ土産トシテ購買歸郷スルモノ尠ナカラスト云フ
輸出向ハ概ネ在神戸貿易商ヨリノ注文ニヨリテ販賣スルノ外是等貿易商ト特約シテ販賣スルモノアリ而シテ此ノ貿易商ハ之レヲ外國商館ニ賣渡スヲ例トシ直輸出ヲナスモノハ少ナシ

(九) 荷造法及其費用並ニ運賃諸費保險料

(イ) 荷造法
内地向ハ各種ノ竹器ヲ俗ニ用心籠ト稱スル大竹籠ニ入レルモノアリ又ハ菴包トナスモノアリ或ハ木箱ニ容ル、モノアリテ一定セス從テ其費用モ亦詳ナラザレトモ大約三十錢乃至五十錢ノ間ニアリ
輸出向製品ノ内家具類ハ何レモ符號ヲ付シテ之ヲ分解シ其容積ヲ縮少シ物品ノ大小ニ從ヒ六個乃至五十個位ヲ平均二十才乃至三十才程度ノ木箱ニ納ム玩具類ノ如キ小物ハ一旦一打或ハ一組等ヲ紙函ニ入レ之ヲ二十才乃至三十才ノ木箱ニ適宜ノ數ヲ納ム而シテ何レモ木箱ノ外部ニ鐵帶ヲ施ス此費用約二圓以上三圓五十發ヲ要ス

(ロ) 運賃

神戸ヨリ米國マテノ運賃ハ一噸ニ付大約左ノ如シ

兵庫縣

原價	百圓未満ノモノ	六	弗
同	百圓以上ノモノ	八	弗

(ハ) 保險料
 大約百圓ニ付二十五錢乃至五十錢トス
 (十) 主ナル製造者

神戸市三ノ宮町	合名會社中井商店
同 市磯上通	吉 田 平 兵 衛
同 市元町	田 中 龜 之 進
同 市三ノ宮町	井 上 丑 松

(三) 物

(一) 産 額	年 次	産 額
	三十五年	二七八、八一二
	三十六年	二九七、八三二
	三十七年	三七〇、七六八
	三十八年	四〇四、三三八
	三十九年	五四〇、四二五

参照 當業者ノ言ニヨレハ年産額百萬圓ニ達スルナラント云フ

(二) 種 類

大工道具ヲ主トシ鎌、剪刀、剃刀、小刀等トス

(三) 主 要 産 地

美濃郡三木町ハ最モ主ナル産地ニシテ加東郡小野村地方ノ産出亦尠カラス

(四) 製造戸數及職工數 (三十九年)

製造戸數	六二二戸
職 工 數	一、八七五人
男	一一二人
女	一、八八七人
合 計	一、八八七人

(五) 製 産 狀 況

美濃郡三木町ニ於ケル及物製造業ハ古來其盛名天下ニ知ラレタルモノニシテ現今同町ニ於ケル戸數約一千戸ノ内三百五十戸ハ斯業者ヲ以テ之ヲ占メ全町到ル所鍛冶ノ鈍音ヲ聞カサルナク其ノ一ケ年ノ産額ハ縣下總産額ノ約九割ヲ占ム此ノ外加東郡小野村地方亦鎌ノ製出ヲ以テ名アリ而シテ是等ノ地ニ産スル製品ハ全國各地ニ需要セラレ年々之ヲ増進シツ、アリ今最近ニ於ケル狀況ヲ見ルニ日露戰爭中ニアリテハ一般需要品ハ概ネ不況ニシテ一時ハ製産甚タ振ハサリシカ三十七年七月頃ヨリ軍需品ノ注文多ク爲ニ甚ク好況ヲ呈シ三十九年ニアリテハ内地各地ノ需要頓ニ増加シ職工不足ノタメ悉ク注文ニ應スル能ハサルノ盛況ニシテ近年ニナキ産出ヲナセリ四十年ニ入りテモ尙引續キ好況ヲ呈セリ近時一、二當業者ノ原動機ヲ備フル器械的工場ヲ新設セルアリテ此ノ成績ニシテ良好ナランニハ斯業ハ將來殊ニ著シキ

發送ヲナスニ至ルヘシ

(六) 原料ノ需要供給

原料鐵ハ米國及瑞西ヨリノ輸入品ヲ神戸在留外國商人ヨリ購入ス然レトモ輸入鐵ハ彈力ヲ保タシムルニ重キヲ置キテ製シタルモノナルカ故ニ三木町ノ主要製出品タル鋸ノ原料トシテハ甚タ不適當ナルモ他ニ適當ノモノナキヲ以テ已ムナク之ヲ使用シ居レリト云フ

(七) 販出額及仕向地

産額ノ約八割ヲ縣外ニ販出ス其仕向地ハ京阪地方、北越地方、中國、四國、九州、關東、北海道等ノ各地トス左ニ是等地方ヘノ販路額ヲ百分率ヲ以テ示サン

(一)	京、阪地方	二十一%
(二)	中國	十六%
(三)	九州	十五%
(四)	關東及東北地方	十二%
(五)	北越地方	十%
(六)	北海道	八%
(七)	四國	五%

(八) 販買手續及取引慣習

各地販賣店若クハ問屋ヨリノ注文ニヨリ送荷シ代金ハ六ヶ月勘定ヲ普通トス

(九) 荷造法

同	美濃郡三木町	中本鍛冶工場
同	同	井筒金物工場
同	同	三木金物組合工場
同	同	三榮商會工場

(十) 主ナル製造者

一個毎ニ油紙ニテ包ミタルモノヲ五挺若クハ十挺宛緊束シ藁詰ノ木箱ニ入レ釘付トナシ外部ヲ紙ニテ包ム

(一) 産額	年次	數量	價額
(一) 主要産地	三十五年	一七六、〇〇〇 _円	五七、七〇〇 _円
	三十六年	一六〇、一〇〇	四八、九五〇
	三十七年	一一八、九〇〇	三三、三〇〇
	三十八年	一二〇、五八〇	四一、八六〇
	三十九年	一二五、〇〇〇	五四、三〇〇

(二) 主要産地
川邊郡伊丹町ニ於テノミ産出ス

(三) 製造戸數及職工數 (三十九年)

製造戸數
兵庫縣

一戸

職工數
男
女

七〇人
五〇人

合計

一二〇人

(四) 製産狀況

本業ハ創業以來日未タ淺キノミナラス近年原料價格ノ昇騰スルタメ收益甚タ少ナク爲メニ著シキ發達ヲ見ル能ハス殊ニ去ル三十七、八年戰役ニ際シテハ原料昂騰甚タシク收支相償ハツルノ狀況ナリシヲ以テ頗ル不振ニ陥リシカ平和克復後漸次回復シ三十九年ニ於テハ相當ノ好況ヲ呈セリ由來本業ハ川邊郡伊丹町ノ富豪小西新右衛門ト稱スル者地方細民ノ生業ヲ扶ケンカ爲メ之ヲ經營セルカ故ニ之カ製造ハ細民ノ手工ニ屬スル所多ク爲メニ生産費ヲ要スルコト比較的
大ナリ是ヲ以テ方今上記ノ如キ業況ヲ呈セリト雖モ將來漸次發達ノ大勢ニ在ルモノ、如シ

(五) 原料ノ需要供給

原料眞鍮板及針金ハ主トシテ大阪ヨリ購入ス

(六) 販出額及仕向地

製品ハ殆ント大阪ニ販出シ同地商人ノ手ヲ經テ内地各地ニ販賣セララル

(七) 相場

一打ニ對スル取引相場ハ大約三十二錢内外トス

(八) 荷造法

五十打又ハ百打ヲ紙製箱ニ入レタルモノヲ更ニ木箱ニ入レ釘付トナス

(九) 主ナル製造者

川邊郡伊丹町

小西新右衛門

愛知縣

産業概説

本縣ハ尾三兩國ヲ管シ東北方ハ概シテ山岳重疊セリト雖モ南西部ハ渺茫タル濃、尾ノ沃野ニ屬シ三河ノ沿岸地方亦地勢概ネ平坦ナリ而シテ本縣ハ關東、關西ニ於ケル樞要市場ノ間ニ介在シ交通上ノ要衝ニ當ルヲ以テ近時其便ノ甚ク能ク開ケタルヲ見ル即チ東海道鐵道東西ニ貫通シテ京濱及阪神地方トノ連絡ヲ保チ關西鐵道ノ名古屋ニ發シ三重、奈良ノ各地ヲ經テ大阪ニ到リ又中央西線ノ名古屋市ニ起リテ中津ニ達シ近ク中央、東線ト連絡セントスルアリ且ツ豊川、武豊、尾西ノ各鐵道及電氣鐵道ノ開通セルアリテ其延長百五十六哩ニ達シ陸運ノ甚ク円滑ナルアルノミナラス伊勢灣沿岸ハ港灣ニ富ミ船運ノ利便尠ナカラズ殊ニ熱田ノ築港ハ今ヤ略完成ヲ告ケ輸出港トシテ船舶ノ出入益々多キヲ加ヘントセリ斯ノ如ク自然地理ノ有利ナルニ加ヘ運輸機關ノ施設亦甚ク發達セルカ故ニ近來本縣ニ於ケル産業ハ之カ爲メ甚ク進歩シ殊ニ工業ニ於テハ一層顯著ナル發達ヲナセリ是レヲ以テ工業ハ各産業ノ首位ニアリテ本縣生産力ノ過半ヲ占ム之ニ次クモノハ農業ニシテ水産業、林業及畜産業ノ如キハ共ニ産額遙カニ其下位ニアリ礦産業ニ至リテハ極メテ微々タルモノニシテ見ルニ足ラス今最近五ヶ年ニ於ケル各産業ノ生産額ヲ示セハ左ノ如シ

年次	三十九年	三十八年	三十七年	三十六年	三十五年
工業	七四、七七八 <small>四</small>	六〇、九五七 <small>四</small>	五二、八八四 <small>五</small>	四七、三九七 <small>四</small>	四五、九〇五 <small>二</small>
農業	四七、四七三 <small>六</small>	四三、〇六五 <small>〇</small>	四一、四五六 <small>七</small>	三九、八五三 <small>四</small>	三八、〇九二 <small>三</small>
水産	二七、九三五 <small>三</small>	二七、八五五 <small>四</small>	一九、七三六 <small>九</small>	二二、三四七 <small>〇</small>	二七、〇五八 <small>七</small>

計	林畜産		
	産	産	産
	一四二、七〇四	一一九、六五〇	一一九、六二〇
	一四一、〇九二	一一五、〇九三	九七、七四〇
	四〇八、〇〇〇	三三九、四七六	二六五、三三〇
	二八、三〇〇、九四	一〇八、九七、四三六	九七、三二、四九三
			九二、三六、〇三八
			九六、九、三七
			一〇八、二、五七
			二八、九、二八〇
			八九、〇、四八八

前表ニヨレハ本縣ノ産業ハ工業ヲ主腦トシテ年々順調ノ進歩ヲナセルコト明カニシテ將來亦益々發達ノ勢ヲ示セリ以下各産業ニツキ其概況ヲ記スヘシ

(一) 工業

本縣ノ工業ハ近時著シク發達シ最近ニ於ケル産額ハ實ニ七千四百七十三萬七千餘圓ニ達セリ而シテ其主力工業ハ機械、紡績、蠶糸等ノ纖維工業ニシテ其生産ハ工産總額ノ過半ヲ占ム窯業ハ之ニ次テ盛大ナリ左ニ三十九年前五ケ年ニ於ケル主要工産品ノ統計ヲ掲ケン

品別	三十九年	三十八年	三十七年	三十六年	三十五年
織物	一七三、六八四	一三、三七一	一〇、九八七	六三、七六五	一一、〇六八
糸	二二、八〇二	一五、六〇九	六、八九六	八、二六四	七、六八六
糸	八七、七五五	六、二七三	五、七四七	四、六〇七	三、七六四
生糸	一、五八二	一、五八二	九三、七四八	八五、九七〇	一〇、二八八
刺	四九、二九六	四九、三三四	四四、五〇五	四五、七九〇	二六、九〇三
大	400,000	二八、〇一四	二七、〇〇八	一〇〇、四五〇	

陶器	五、四八三	三、四四六	二、三五七	二、〇九三	二、三〇三
磁器	三、五八三	三、五八三	三、七四〇	三、五四七	五、四八二
時計	九三、六九二	五、四〇一	五、七五三	五、一八五	四、五〇〇
燐寸	七九、〇三四	一、〇八九	一、二八八	七、七四〇	九、七二八
麥稈及經木真田	三、五二九	三、五二六	四、三三三	五、九七三	五、五三二
扇子	三、五〇四	三、五八〇	三、〇五七	二、〇〇五	三、五〇一
提燈	二、七五五	二、五〇四	二、九四九	一、六四二	一、七五九
清酒	五、一五〇	三、二九四	三、九一〇	三、七三三	四、〇六八
麥酒	四、九七五	五、一七四	二、一六〇	三、三、八五五	二、八六四
機械製粉	四、四九八	三、五〇九	四、五三二	三、五〇五	四、八一
漆器	二、四四一	二、四七六	二、六〇五	二、〇六七	二、五七四
罐詰	二、〇九四	四、三、四四	三、六二六	七、六八八	七、四一七
茶箱組板	五、四、五〇〇	一、六、五七六	三、〇、五四三	四、四、三六六	四、〇、二八八
車類	七、八、三三	一、四、八三三	三、九、三〇〇	一、三、七四九	三、五、二六三

前表ノ中織物、綿糸、生糸、陶磁器、七寶、燐寸、時計、刺繡、麥稈真田、扇子、提燈、漆器、ハ海外へ輸出セラル、モノ少ナカラス又染物、組紐、塗箸、一閑張等ハ本縣ニ於ケル特産物トシテ著名ナリ左ニ是等主ナルモノ、中數種ニツキ其概況ヲ記スヘシ

(二) 織物

織物ハ往時ヨリ盛ニ産出セルモノニシテ近時各工産品中ノ首位ヲ占ム其重ナルモノハ綿織物ニシテ年々總産額ノ約八割ヲ産シ絹綿交織及絹織物ハ産出極メテ少ナシ而シテ綿織物中其産額ノ多キモノハ白木綿ニシテ二子縞其他ノ縞木

綿之レニ亞ク知多白木綿、三河綿及岡木綿ハ其名世ニ高シ本品ハ主トシテ内地向ニシテ外國向ハ甚タ少ク三十九年ニ在テハ僅カニ二百餘萬圓ヲ輸出シタルニ過キス輸出品中主ナルモノハ綿毛布ニシテ白木綿(金巾類ヲ含ム)及紫綿ト稱シテ下等ナル縮木綿ノ輸出亦少ナカラス要スルニ本縣ニ於ケル織物ハ内外ノ需要漸次増進シテ年々其製織高増加ノ勢ヲ示セリト雖モ殆ント下等品ニシテ絹織物ノ如キニ至リテハ其産額頗ル微少ナルハ本縣機業上遺憾ナキ能ハス將來高等機業一層顯著ナル發達ヲ要スル所ナリ

終ニ綿毛布ニツキ特ニ其梗概ヲ記スヘシ抑モ本品ハ本縣ニ於ケル特産物トシテ且輸出品トシテ著名ナルモノニシテ産地ハ名古屋市トシ全産額ノ約九割五分ニ達ス

本縣ニ於テ始メテ之レヲ産セシハ明治十六年ノ頃ニシテ當時ハ技術未タ甚タ幼稚ナルヲ以テ殆ント見ルニ足ラザリシカ爾來大ニ發達シ三十九年ノ産額ハ四十三萬餘圓ニ達シ内三十萬餘圓ヲ海外ニ輸出スルニ至レリ然レトモ近來獨逸品ノ海外市場ニ立テ我製品ヲ凌駕スルノミナラス内地ニ於テモ大阪地方ニ於テ本品ノ製造漸次増加シ同業者間ノ競争ハ漸次製品ヲ粗悪ナラシムルニ至リ近時稍々退勢ノ兆候ヲ呈シタリシカ如シ

(二) 紡績綿糸

現今縣下ニ於ケル紡績工場ハ六ヶ所ニシテ内三重紡績ノ分工場三アリ其産出高モ亦大部ヲ占ム尙本縣ニハ矢作川流域ニ於テ水車ヲ用ヒ小規模ノ作業ヲナスモノ八十八個所アリ皆俗稱「ガラ」紡トテ落綿、油綿等ヲ以テ二三番位ノ大手モノヲ製ス是レ本縣ハ綿毛布ノ製織盛ニ行ハル、ヲ以テ經系用トシテ之レヲ製出スルモノニシテ其産額ハ索ヨリ少ナシ今三十九年ニ於ケル綿糸ノ産額ヲ見ルニ一千二百餘萬圓ニシテ之レヲ五ヶ年前即チ三十五年ノ産額七百六十餘萬圓ニ對比スレハ約一倍六ノ増進ヲ示シ三十七年ニ於テ日露戰爭ノ結果著シク其生産ヲ減セシモノアルノ外其五ヶ年間ニ於ケル状態ハ年々順調ノ發達ヲ示セリ

(三) 陶磁器

本縣ハ古來陶磁器ノ一大産地トシテ汎ク世ニ知ラレタル所ニシテ其盛ナルコト殆ント全國ニ冠絶セリ今三十九年ノ産額ヲ見ルニ五百五十餘萬圓ニシテ三十五年ニ比シ三百二十餘萬圓ヲ増加セリ是レ三十九年ハ海外輸出ノ一時的膨脹ニ因由スル所多シト雖モ亦年々發達ノ趨勢ニアルコト疑ヲ容レズ本縣ニ産スル陶磁器ノ中古來最モ名アルモノハ瀬戸焼ト稱スル磁器ニシテ普ク世人ノ知ル所ナリ往時ハ東春日井郡瀬戸地方ニ産セシカ現今ハ名古屋市及東西春日井郡其他附近郡部ニ産出シ總産額ノ大部ヲ占メ海外ニ輸出セラル、モノ亦主トシテ之ナリ常滑燒モ亦古來其名世ニ高ク主トシテ知多郡常滑地方ニ産出ス此ノ外犬山燒、富士見燒、夜寒燒、日ノ本燒等アレトモ其産出甚タ微々タリ抑モ本縣ハ陶磁器製造ノ主要原料タル陶工及磁土ニ富ミ殆ント無盡藏ト稱セラル此ノ先天的有利ノ地位ヲ占ムル本縣陶磁器業ハ近時歐米ノ窯業ニ倣ヒ其製造方法ノ漸次改良セラル、モノト相俟テ將來尙益々發達スルコト明カナリ

(四) 七寶

七寶ハ本縣ノ特産物トシテ往時ヨリ知ラレタリシモ其著シク發達セシハ明治十年以降ニアリトス産地ハ名古屋市及海東郡遠島村ニシテ就中遠島村ニ在テハ全村舉テ本品ノ製造ニ從事スルノ有様ニシテ一名七寶村ト稱セラル近來一般ニ技術著シク進歩シテ精巧品ヲ産出スルニ至リシモ京都産ノ如ク高價ノモノハ少ク概チ安値物ナルヲ以テ需要廣ク從テ其産額モ京都ニ比シテ多額ナリ今近年ノ狀況ヲ見ルニ三十九年ニ於ケル産額ハ二十三萬五千餘圓ニシテ五ヶ年前即チ三十五年ニ比スレハ三十餘萬圓ヲ減少シ而モ年々減退ノ傾向ニアリ之レ千九百年巴里ニ開催セラレタル萬國博覽會ニ出品セシ以來大ニ歐米人ノ嗜好ニ投シタル結果頗ル盛大ヲ極メタリシヲ以テ當業者ハ之レニ乘シ商利ヲ占メントシテ粗製品ヲ輸出スルコト多キニ至リ爲メニ歐米人ノ嫌厭スル所トナリ輸出漸次不振トナリシニヨルモノニシテ最近ニ於ケル狀況尙益々衰盛ヲ呈シツ、アルハ甚タ慨嘆ニ堪ヘサル所ナリ

綿之レニ亞ク知多白木綿、三河綿及岡木綿ハ其名世ニ高シ本品ハ主トシテ内地向ニシテ外國向ハ甚タ少ク三十九年ニ在テハ僅カニ二百餘萬圓ヲ輸出シタルニ過キス輸出品中主ナルモノハ綿毛布ニシテ白木綿(金巾類ヲ含ム)及紫綿ト稱シテ下等ナル綿木綿ノ輸出亦少ナカラス要スルニ本縣ニ於ケル織物ハ内外ノ需要漸次増進シテ年々其製織高増加ノ勢ヲ示セリト雖モ殆ント下等品ニシテ絹織物ノ如キニ至リテハ其産額頗ル微少ナルハ本縣機業上遺憾ナキ能ハス將來高等機業一層顯著ナル發達ヲ要スル所ナリ

終ニ綿毛布ニツキ特ニ其梗概ヲ記スヘシ抑モ本品ハ本縣ニ於ケル特産物トシテ且輸出品トシテ著名ナルモノニシテ産地ハ名古屋市トシ全産額ノ約九割五分ニ達ス

本縣ニ於テ始メテ之レヲ産セシハ明治十六年ノ頃ニシテ當時ハ技術未タ甚タ幼稚ナルヲ以テ殆ント見ルニ足ラザリシカ爾來大ニ發達シ三十九年ノ産額ハ四十三萬餘圓ニ達シ内三十萬餘圓ヲ海外ニ輸出スルニ至レリ然レトモ近來獨逸品ノ海外市場ニ立テ我製品ヲ凌駕スルノミナラス内地ニ於テモ大阪地方ニ於テ本品ノ製造漸次増加シ同業者間ノ競争ハ漸次製品ヲ粗悪ナラシムルニ至リ近時稍々退勢ノ兆候ヲ呈シタリシカ如シ

(二) 紡績綿糸

現今縣下ニ於ケル紡績工場ハ六ヶ所ニシテ内三重紡績ノ分工場三アリ其産出高モ亦大部ヲ占ム尙本縣ニハ矢作川流域ニ於テ水車ヲ用ヒ小規模ノ作業ヲナスモノ八十八個所アリ皆俗稱「ガラ」紡トテ落綿、油綿等ヲ以テ二三番位ノ太手モノヲ製ス是レ本縣ハ綿毛布ノ製織盛ニ行ハル、ヲ以テ經系用トシテ之レヲ製出スルモノニシテ其産額ハ索ヨリ少ナシ今三十九年ニ於ケル綿糸ノ産額ヲ見ルニ一千二百餘萬圓ニシテ之レヲ五ヶ年前即チ三十五年ノ産額七百六十餘萬圓ニ對比スレハ約一倍六ノ増進ヲ示シ三十七年ニ於テ日露戰爭ノ結果著シク其生産ヲ減セシモノアルノ外其五ヶ年間ニ於ケル状態ハ年々順調ノ發達ヲ示セリ

(三) 陶磁器

本縣ハ古來陶磁器ノ一大産地トシテ況ク世ニ知ラレタル所ニシテ其盛ナルコト殆ント全國ニ冠絶セリ今三十九年ノ産額ヲ見ルニ五百五十餘萬圓ニシテ三十五年ニ比シ三百二十餘萬圓ヲ増加セリ是レ三十九年ハ海外輸出ノ一時的膨脹ニ因由スル所多シト雖モ亦年々發達ノ趨勢ニアルコト疑ヲ容レス本縣ニ産スル陶磁器ノ中古來最モ名アルモノハ瀬戸焼ト稱スル磁器ニシテ普ク世人ノ知ル所ナリ往時ハ東春日井郡瀬戸地方ニ産セシカ現今ハ名古屋市及東西春日井郡其他附近郡部ニ産出シ總産額ノ大部ヲ占メ海外ニ輸出セラル、モノ亦主トシテ之ナリ常滑焼モ亦古來其名世ニ高ク主トシテ知多郡常滑地方ニ産出ス此ノ外犬山焼、富士見焼、夜寒焼、日ノ本燒等アレトモ其産出甚タ微々タリ抑モ本縣ハ陶磁器製造ノ主要原料タル陶工及磁土ニ富ミ殆ント無盡蔵ト稱セラル此ノ先天的有利ノ地位ヲ占ムル本縣陶磁器業ハ近時歐米ノ窯業ニ倣ヒ其製造方法ノ漸次改良セラル、モノト相俟テ將來尙益々發達スルコト明カナリ

(四) 七寶

七寶ハ本縣ノ特産物トシテ往時ヨリ知ラレタリシモ其著シク發達セシハ明治十年以降ニアリトス産地ハ名古屋市及海東郡遠島村ニシテ就中遠島村ニ在テハ全村舉テ本品ノ製造ニ從事スルノ有様ニシテ一名七寶村ト稱セラル近來一般ニ技術著シク進歩シテ精巧品ヲ産出スルニ至リシモ京都産ノ如ク高價ノモノハ少ク概テ安値物ナルヲ以テ需要廣ク從テ其産額モ京都ニ比シテ多額ナリ今近年ノ狀況ヲ見ルニ三十九年ニ於ケル産額ハ二十三萬五千餘圓ニシテ五ヶ年前即チ三十五年ニ比スレハ三十餘萬圓ヲ減少シ而モ年々減退ノ傾向ニアリ之レ千九百年巴里ニ開催セラレタル萬國博覽會ニ出品セシ以來大ニ歐米人ノ嗜好ニ投シタル結果頗ル盛大ヲ極メタリシヲ以テ當業者ハ之レニ乘シ商利ヲ占メントシテ粗製品ヲ輸出スルコト多キニ至リ爲メニ歐米人ノ嫌厭スル所トナリ輸出漸次不振トナリシニヨルモノニシテ最近ニ於ケル狀況尙益々衰盛ヲ呈ジツ、アルハ甚タ慨嘆ニ堪ヘサル所ナリ

(五) 時 計

本品ハ掛時計及置時計ニシテ名古屋市ニ産ス本業ハ明治十七年創始以來顯著ナル發達ヲナシ今ヤ産額ノ大部ヲ海外ニ輸出スルニ至レリ今三十九年ニ於ケル産額ヲ見ルニ九十三萬六千餘圓ニシテ輸出額ハ六十六萬五千餘圓ニ上レリ之レヲ五ヶ年前即チ三十五年ニ比スレハ産額ニ於テ四十八萬六千餘圓ヲ増シ輸出額ニ在テモ亦四十七萬一千餘圓ヲ増加セラルヲ見ル以テ其進歩ノ著シキヲ知ルニ足ルヘク前途頗ル有望ノ事業ナリ

前記ノ外其詳細ノ事項及此ノ他ノ工産品ニ關シテハ後ニ項ヲ更メ之レヲ詳説スヘキヲ以テ茲ニ之レヲ贅セズ

(二) 農 業

本縣ハ西尾地方及三河ノ矢作下流一帶及海岸ニ沿フテ平野多ク木曾川、庄内川、矢作川、農川等ノ河川ハ是等平野ヲ潤シ地味肥沃ナリ是ヲ以テ農業ハ古來ヨリ發達シ田畑ノ能ク開ケタルヲ見ル今三十九年十二月末日現在ニ於ケル其面積ヲ見ルニ田九萬四千五百六十町歩、畑六萬四千五百六十町歩、計十五萬五千二百町歩ニシテ専ラ農業ヲ營ムモノ十四萬六千七百六十六戸ノ多キニ上リ三十九年ニ於ケル農産總額ハ四千七百四十七萬六千餘圓ニ達ス而シテ農作物中主ナルモノハ無論米ニシテ年々農産總額ノ約五割七分ヲ産ス之レニ次クモノハ麥、大豆、菜種ニシテ蘿蔔其他蔬菜類ノ生産亦尠ナカラズ今三十九年前五ヶ年間ニ於ケル主要産物ノ産額ヲ示セハ左ノ如シ

種 別	三十五年	三十六年	三十七年	三十八年	三十九年
米	三、五九九、九〇三	三、五〇三、九三五	三、三三四、二八一	三、二七四、四三四	二、七、一七、一七六
麥	六、二四七、七五五	四、四九六、九九一	六、八八五、四〇二	六、五〇八、二五二	四、七七七、五八三
大豆	四、四二七、二二	四、〇一四、一一	五、四九八、五二	四、五二四、七	四、九四、三五

種 別	三十五年	三十六年	三十七年	三十八年	三十九年
菜 類	四八七、三三〇	五二七、六〇〇	三六一、二七〇	四四六、四八一	七五七、〇三三
甘 藷	二〇一、五四九	二二二、〇六五	二二五、九九〇	一八一、一五二	二三五、三三二
薯 類	七六、〇四〇	六四四、一九五	八五七、九五三	八七二、三六九	八八八、三四七
菓 實	一一五、五三三	三三〇、〇〇〇	五九七、七三五	四八一、二九七	六四三、七六五
蔬 菜	一五〇、二一八	二六〇、〇〇〇	二、七五、〇〇〇	二、七五、〇〇〇	二、八五、〇〇〇
實 類	二九、五五五	四〇〇、〇〇〇	二二二、一六〇	四五六、三七三	五五四、六九二
繭	四、〇〇五、三三二	二、五六、一八五	三、二七、四〇八	三、二七、五五五	五〇五、六三三
繭 類		五、〇七八、六三七	四、五五三、五五四	五、八〇二、一九三	七、六三七、九九九

前表ノ示ス所ニヨレハ米其他農作物ノ概シテ年々其生産ヲ増加シツ、アルコト明カナリ之レ近時本縣ニ於ケル農事上ノ改良の施設ノ漸ク周到ヲ加ヘタルニヨルモノナルヘシ現今農業上ノ施設ニツキ主ナルモノハ耕地整理事業及農事試驗場、講習所ノ設置等ニシテ就中本縣ニ於ケル耕地整理ハ大ニ見ルヘキモノアルヲ以テ左ニ其概況ヲ記スヘシ

本縣ニ於ケル耕地整理事業ハ去ル三十四年度ニ於テ企業者ノ申出アリ既成反別ニ應シ縣費ヲ以テ補助金ヲ交付セシ以來頓ニ勃興シ三十九年十二月末日ニ於ケル工事完了ノモノ二百九十四町餘歩工事中ノモノ二千二百二十二町餘歩ニシテ測量設計ヲ了ヘ未タ起工セサルモノヲ合算スレハ八千六百六十二町一反六畝二十一步ノ多キニ達シ尙之レヲ企畫スルモノ續々増加スルノ傾向ヲ呈セリ

養蠶業ハ近年三河地方及尾張ノ一部ニ於テ著シク勃興シ三十九年ニ於ケル收購高ハ七百六十三萬七千餘圓ニ達シ五ヶ年前ニ比シ三百六十三萬餘圓ヲ増加セリ是レヲ以テ葉園反別ノ如キモ、逐年増大シ年々約一千町歩ノ増加ヲ示セリ即チ左ノ如シ

三十五年

九、四三五町

愛知縣

二百四十九

三十六年
三十七年
三十八年
三十九年

一〇、四一八町
一一、〇〇一町
一二、二四一町
一三、三五四町

前記桑園ノ増加ハ亦本縣養蠶業ノ激進ヲ證スルニ足ル然レトモ本業ハ最近ノ勃興ニ係ルヲ以テ養蠶者ノ多クハ斯業ニ關スル智識ニ乏シク蠶業ノ利ヲ全フシ能ハサルカ故ニ愛知縣ニ於テハ明治三十四年農事講習所ノ開設ト共ニ蠶業科ヲ設ケ又縣立農林學校ニ於テモ養蠶實習生ヲ募集シ以テ養蠶智識ノ普及ヲ圖リタル結果近時漸ク良好ノ成績ヲ舉クルニ至レリ

(三) 水産業

本縣ハ其南方一帯海ニ濱シ海岸線ノ延長八十四里ニ亘リ漁場ニ乏シカラス殊ニ伊勢灣及三河灣ハ鰯ノ漁獲多ク其他各種ノ漁獲物及水産製造物ニ富ム今最近五ヶ年ニ於ケル主要水産物及製造物ノ統計ヲ示セハ左ノ如シ

(イ) 漁獲物

種類	三十五年		三十六年		三十七年		三十八年		三十九年	
	價	數	價	數	價	數	價	數	價	數
鰯	四三三、七三五	四九四、四五六	一、四八六、三九九	二、六七四、四五	一、〇六八、七四三	一、八四二、六六	二、五二一、六六七	三、六六七、七三	九七七八、五二	二、〇九六、三四
鯛	九四九、八八	一〇八、〇七四	七三、六四二	六、七四七	五、五八四	五、七、六八	六、六八二	一、〇〇一、七	五、二、五四	六、七、四九八
鰯	二八〇、九〇	二八、〇九〇	八五、八七五	六、七、七	三三、六六六	二、五、四三六	二、五、四三六	二、〇〇一、八〇	一、六、九六六	一、七、二、四八五
鰯	六、七、六九六		四、六、一七三		二、五、〇四四					

種類	三十五年		三十六年		三十七年		三十八年		三十九年	
	價	數	價	數	價	數	價	數	價	數
鰻	四二、七〇	五五、二九	三〇、八三七	四、二、六八	六、九、九五九	二、二、九八	六、九、〇〇七	一、三、三〇七	一、八、二、四八七	八、二、四九、二九九
其他	二、八九、三五五	八三、四四二	二、四九、七七七	七、四、三三三	七、七、四、四五〇	九、九、九、一五	〇、九、九、四〇六	九、九、九、一五	八、二、四九、二九九	一、二、六、三、六三二

(ロ) 水産製造物

種類	三十五年		三十六年		三十七年		三十八年		三十九年	
	價	數	價	數	價	數	價	數	價	數
蒲鉾	七、二、六一	六、七、一〇	一、三、二、四〇	一、二、五、〇九	七、二、五八	一、三、二、四二	八、五、〇、六〇	一、九、八、七五	一、〇、四、八八	一、三、七、四八六
鱈	一、七、〇、二七	一、〇、七、九〇	二、〇、六、二八	四、一、〇、六一	九、〇、八、〇〇	四、一、四、四九	一、八、四、二、三九	四、一、三、三八	二、〇、七、五〇	五、六、五、六五
煮乾鰯	二、五、一、八七	二、六、三、三三	三、六、一、六二〇	一、三、七、七、九	九、四、九、四、五	四、七、三、八〇	二、五、九、六、〇九	九、七、六、〇九	一、六、〇、五、六〇	九、三、三、六五
魚煎餅	二、〇、二、一、三三	二、二、四、二二	八、三、八、〇、二、六、七	一、七、八、七、四	三、三、〇、一、〇	二、二、四、四六	九、三、〇、八	二、七、七、三三	二、一、七、七、六	二、一、七、七、六
乾蝦	二、〇、七、三五	二、七、三、三七	一、九、三、三三	二、八、四、六三	三、〇、八、〇	一、六、〇、二、四	二、八、一、七三	二、一、六、〇三	二、一、三、四〇	二、一、三、四〇
魚力煮	三、三、三、九	二、八、二、三	二、三、〇、一	八、五、五、二	三、一、七、一	二、一、四、四	四、一、〇、四	一、五、二、二六	四、一、六、五	一、五、四、八五

愛知縣

其他	數量	五〇〇一	五四二六	二四三三	三六八六	三八四〇三
其他	價格					

前表ノ示スカ如ク本縣ニ於ケル水産物價額ハ非常ノ多額ニ昇リ本縣産業上亦頗ル有利ノ地位ニアルヲ以テ縣其他ノ團體及個人ノ施設事項少ナカラス殊ニ愛知縣水産試驗場ノ如キハ其創設以來斯業ニ貢獻セル所尠ナカラス常ニ漁撈、養殖及製造ニ關スル各種ノ試驗ヲ行ヒ斯業ノ振作ヲ圖リツ、アリ鯊油漬罐詰製造事業ハ新興事業ニシテ注視ニ値ヒスルモノナリトス元來本縣ハ鯊ノ漁獲豊富ニシテ其油漬罐詰ノ製造ニ就テハ甚タ有利ノ地位ニアルヲ以テ水産試驗場ニ於テハ多年之レカ製造試驗ヲ行ヒ遂ニ良好ノ成績ヲ舉クルニ至リ廣ク見本ヲ海外ニ送り販路ノ開拓ニ努メタリシ結果漸ク歐、米ニ於ケル需要ヲ喚起セシヲ以テ先年之レヲ日本罐詰株式會社ニ移シテ此ノ事業ヲ經營セシムルニ至リ今ヤ甚タシキ不漁ニ非レハ年々約二百萬圓以上ノ生産ヲ見ルニ至レリ此ノ他遠洋漁業ノ近時益々盛ントナリ又遠ク朝鮮沿海ニ出漁スルモノ亦漸ク増加スルニ至レルノミナラス漁船、漁具ノ改良等將來益々發達ノ氣運ニ向ヘリ

(四) 林業

本縣ニ於ケル公私有及社寺有林野ノ總面積ハ十萬二千九百八十九町步ニシテ之ヲ區別シテ示セハ左ノ如シ

區別	山		林		原		野	
	箇所	面積	箇所	面積	箇所	面積	箇所	面積
公郡府縣有	七	一	三三六	一五				
社寺有								

公有社寺私有林野所有別 (三十九年三月現在)

市町村有	三、〇〇一	四、〇三一、三	一、二二二	七一六、四
其他團體有	一二、五六四	二〇、五九六、七	三、四〇〇	一、三八四、四
計	一五、五七三	二四、九六四、六	四、六一〇	二、一〇〇、八
寺社有	五、五八二	二、六三二、六	七二五	六九、一
私計	三四五、七〇一	六九、七八一、二	六三、四二二	三、四二一、六
合計	三六六、八五六	九七、三七八、四	六八、七五九	五、五九一、二

從來本縣ニ於ケル林業ハ其進步極メテ遅々タリシカ輒近營林上ノ智識一般ニ普及スルニ及ヒ著シク進步シ各地到ル處殖林ニ熱中セルノミナラス副産物ノ增收ニ一層ノ注意ヲ拂フニ至リ三十五年ニ於テ九十六萬九千餘圓ノ收益ヲ舉ケタルニ拘ハラス三十九年ニ在テハ著シク増加シテ百四十二萬六千餘圓ノ利益ヲ收ムルニ至レリ今三十九年前三ヶ年ニ於ケル林産物統計ヲ示セハ左ノ如シ

年次	三十一年	三十八年	三十九年
用材	二〇〇、二六八	二七六、〇〇八	二二五、九七九
薪材	一一三、三三三	一八七、九三三	一四一、九八三
竹類	二九、二二八	二八、六七五	二六、五〇二
木炭類	一〇三、〇五三	一〇三、九一九	一〇三、〇三〇
雜類	六六〇、八〇四	四七九、六七七	九二九、二一〇

方今縣下ニ於テ盛ンニ造林ノ行ハレツ、アルコト前既ニ記セシカ如シ就中縣有ノ紀念林ヲ始メ南北設樂郡及額田、東加茂ノ郡有林ノ如キハ特ニ見ルヘキモノニシテ多ク杉、扁、柏、松ヲ植栽セリ又矯林即チ主トシテ椎茸ヲ培養スルノ目的ヲ以テ椎、シテ栗、クヌギ、コナラ等ノ殖栽近時甚タ盛ントナリ年々六萬圓内外ノ椎茸ヲ産出ス薪炭材ノ植栽モ亦益々多キ

ヲ加へ木炭ノ如キ近時市價ノ騰貴ニヨリ將來益々其生産ヲ増加スルノ傾向ニアリ

(五) 畜産業

本縣ニ於ケル畜産業中其主ナルモノハ牧牛、牧馬ニシテ養豚業モ近時漸ク盛ントナレリ今三十九年十二月末日現在ニ於ケル牛馬及豚ノ頭數ヲ示セハ左ノ如シ

牛	六、四二二
馬	一〇、六〇二
豚	三、四二七

縣下三河ノ國ハ産馬ニ適スルノ地ナルヲ以テ縣ニ於テモ之ニ對スル奨勵一層厚キヲ加へ三河産馬組合ニ對シ年々補助金ヲ下付シテ専ラ馬種ノ改良ヲ計リツ、アルヲ以テ漸次良馬ヲ産スルニ至リ年々静岡、三重、岐阜等ノ各縣へ輸出スルモノ少ナカラス此他畜牛、養豚、養鶏ノ業皆概シテ益々進歩ノ趨勢ヲ示セリ

(六) 鑛業

本縣ノ鑛業ハ極メテ微々タルモノニシテ殆ント見ルニ足ラス只愛知及知多郡内ヨリ亞炭ノ稍々多量ニ採掘セラル、モノアルニ過キス陶土及磁土ハ東春日井及碧海郡ニ最モ豊富ニシテ愛知、額田郡地方ニモ亦多シ

重要工産品ノ狀況

(一) 蠶糸

年次	生糸		玉	
	數	價格	數	價格
三十五年	六九、三三三	四、二九八、六四六	一四、六三四	四一九、九九八
三十六年	八三、二二一	四、六六〇、七六七	二〇、四三七	六二八、四二二
三十七年	九〇、二二三	五、〇七八、四五〇	二一、一三一	六五五、〇六一
三十八年	九六、四九九	五、八三一、七二五	二三、八七〇	七九三、二〇〇
三十九年	一〇七、四三九	六、九五七、四五六	三五、二二三	一、四〇九、三二〇

(二) 主要産地

寶飯郡、渥美郡、額田郡、豊橋市、丹羽郡、西春日井郡、西加茂郡ノ各郡トス

(三) 製造場數

(三十九年)

器械	六二九
座織	一、四三〇

(四) 製産狀況

近年縣下ニ於ケル養蠶業ハ益々進歩發達シ繭産額ノ年々増加シ來レルノミナラス歐、米ニ於ケル本品ノ需要逐年増加スルニ伴ヒ本縣ニ於テモ斯業漸次盛大トナリ前記産額ノ項ニ示スルカ如ク年々其製産ヲ増進セリ殊ニ三十九年ノ如キハ輸出甚々好況ニシテ製糸業者ハ皆相當ノ利益ヲ得將來益々發達ノ傾向ヲ呈セリ

(五) 製産費及收益ノ比較

製産費及收益ノ比較ハ之ヲ詳細ニ知ルヲ得サルモ大約歩合ヲ以テ示セハ左ノ如シ

愛知縣

原料及製造費
收 益

賣價ノ九割
全 一 割

(六) 販出額及仕向地
産額ノ大部ヲ縣外へ販出スルモ其數額ハ之ヲ詳カニスルヲ得ス然レトモ三十九年前五ケ年ニ於ケル海外輸出額ヲ示セ
ハ左ノ如シ

年 次	生 糸		玉		糸	
	數	價	數	價	數	價
三十五年	五五、四六六	三、四三八、八九二	六三〇	二九、五〇〇		
三十六年	五二、六二三	二、九四六、八八八	四〇〇	一二九、六〇〇		
三十七年	六〇、三五五	三、四五八、〇九五	四〇〇	八八、〇〇〇		
三十八年	六八、九五九	四、二五六、二五三	一四四	三三、八四〇		
三十九年		五、一〇七、五〇〇	一八八	五六、一〇〇		

海外輸出品ハ總テ横濱港ヲ經テ米國ニ輸出セララル

(七) 販賣手續及取引慣習
横濱蠶糸賣込問屋ニ托シ居留外國商館ニ賣捌クヲ以テ普通トス然レトモ中ニハ横濱ニ於ケル即チ同伴株式會社、生糸
合名會社、三井物産合名會社等ニ委託シ海外需用地ニ直輸シ或ハ此等直輸會社ノ紐育、里昂等ノ得意先ヨリ注文ヲ
受ケ適應品ヲ製出スルモノアリ近來大ニ注文取引ヲ増加スルノ好趨勢ヲ呈シ來レリ

(八) 相 場
(イ) 生 糸

九貫目ニ付 機械糸並 五百七十九圓五十錢
全 全 上 六百十二圓
全 座繰糸上 五百五十四圓廿五錢

(ロ) 玉 糸
一等 四百五十圓 二等 四百三十圓 三等 四百圓
四等 三百七十圓 五等 三百五十圓 六等 三百二十圓
七等 三百圓

(九) 輸 出 狀 況
米國ニ於ケル絹織物ノ流行ハ年々盛ナルニ至リ輸出益々増進セリ最近二、三年間ニ於ケル本品輸出ノ狀況ヲ見ルニ
三十八年新春高値ヲ以テ生レシ以來相場ノ高低甚タシク前年ノ好成績ニ引替へ輸出業者ハ一般ニ取引上非常ノ困難ヲ
感シタリシト雖モ其輸出額ハ前年ニ比シ尙多クノ増加ヲナセリ三十九年ニ入りテハ概シテ取引圓滑ニ行ハレ輸出甚タ
好況ニシテ當業者ノ收利少ナカラリシト云フ

(十) 荷造法其費用並ニ運賃
三十捻ヲ以テ一括トシ青桐紙ヲ以テ其上ヲ包ミ之ニ商標ヲ貼付シ其上ヲ包紙ニテ包ミ更ニ其上ヲ澁紙及桐油紙ニテ包
装ス而シテ十五括又ハ二十括ヲ以テ一捆トシ縦又ハ杉ノ六分乃至八分板ニテ作りタル箱ニ納レ釘付トナシ更ニ之ヲ蓆
包トシ繩ヲ以テ縦横ニ緊縛ス其費用二圓七十錢乃至三圓七十錢玉糸ニ在リテハ約七八十錢ヲ要スト云フ而シテ運送ハ
總テ鐵道便ニヨリ横濱マテノ運賃約一圓四十錢ナリト云フ

(十一) 重ナル製造業者

愛知縣

(イ) 生糸

合資會社 三龍社	原 善一郎
帝國撚糸株式會社	勝 野 文 三
佐屋川製糸場	三 龍 社
岡崎製糸合資會社	三河製糸株式會社

(ロ) 玉糸

大林 宇吉	井上 文作	白井仙五郎
辻 平三郎	辻 源三郎	多米田仁平
小淵 志知	島崎 租 祿	

(二) 紡績綿糸

(一) 産 年 次	額 數 量	價 額
三十五年	三、六六八、八〇五	七、六二八、六〇九
三十六年	三、九六七、六四八	八、二六四、二八二
三十七年	三、八四一、一四八	六、六七八、〇八〇
三十八年	四、三五二、七四九	一一、三〇二、〇六二
三十九年	四、三四五、九五三	一二、二二八、四八五

(二) 主要産地

名古屋市最モ主ナルモノニシテ中島郡、海東郡、知田郡、額田郡之レニアリ

(三) 沿 革

本業ハ明治十七年三重紡績株式會社ノ分工場ヲ名古屋市ニ創設セシヲ以テ嚆矢トス以來名古屋市其他ノ各郡ニ於テモ工場ノ續出ヲ見ルニ及ビ産額漸ク増加シ以テ今日ニ至レリ蓋シ本業亦進運ノ趨勢ニアリ

(四) 製造場數及職工數

(イ) 製造場數

普通綿糸製造工場	六
「ガラ紡」綿糸製造工場	八八

(ロ) 職工數

普通綿糸製造工場	一、三四七人
男	六、一九九人
女	七、五四六人
計	一三、四六八人

「ガラ紡」綿糸製造工場

男	一二五人
女	六七〇人
計	七九五八

愛知縣

(イ) 生糸

合資會社三龍社	原善一郎
帝國撚糸株式會社	勝野文三
佐屋川製糸場	三龍社
岡崎製糸合資會社	三河製糸株式會社

(ロ) 玉糸

大林宇吉	井上文作	白井仙五郎
辻平三郎	辻源三郎	多米田仁平
小淵志知	島崎租祿	

(二) 紡績綿糸

(一) 産額	年次	數量	價額
	三十五年	三、六六八、八〇五	七、六二八、六〇九
	三十六年	三、九六七、六四八	八、二六四、二八二
	三十七年	三、八四一、二四八	六、六七八、〇八〇
	三十八年	四、三五二、七四九	一一、三〇二、〇六二
	三十九年	四、三四五、九五三	一二、二二八、四八五

(二) 主要産地

名古屋市最モ主ナルモノニシテ中島郡、海東郡、知田郡、額田郡之レニアリ

(三) 沿革

本業ハ明治十七年三重紡績株式會社ノ分工場ヲ名古屋市ニ創設セシヲ以テ嚆矢トス以來名古屋市其他ノ各郡ニ於テモ工場ノ續出ヲ見ルニ及ビ産額漸ク増加シ以テ今日ニ至レリ蓋シ本業亦進運ノ趨勢ニアリ

(四) 製造場數及職工數

(イ) 製造場數	六
普通綿糸製造工場	八八
「ガラ紡」綿糸製造工場	
(ロ) 職工數	
普通綿糸製造工場	

男	一、三四七人
女	六、一九九人
計	七、五四六人

男	一二五人
女	六七〇人
計	七九五八

愛知縣

備考 製造場數及普通綿糸製造工場ノ職工數ハ三十九年分ヲ掲ケシモ「ガラ紡」綿糸製造工場ノ職工數ハ三十九年分不明ノ爲メ三十八年分ヲ掲記セリ

(五) 製 産 状 況

本縣ニ於ケル紡績事業ハ製品ノ種類ニヨリ其工業組織ノ規模ニ著シキ差異アルヲ見ル即チ普通綿糸紡績ノ製造ヲナセルモノハ三重紡績株式會社ノ分工場三、及一宮、知多、津島紡績會社ノ三工場ニシテ孰レモ水力、電力ヲ用ヒ多數ノ職工ヲ使傭シ泰西文明ノ機械ヲ備ヘ規模大ナリト雖モ俗ニ「ガラ」紡ト稱シ本縣物産タル綿毛布ノ原料糸ヲ製造スルモノニ在テハ三河矢作川流域ニ其工場多數アリト雖モ何レモ水力ヲ利用シ和洋折衷ノ機械ヲ設置セル小規模ノモノニシテ從テ其産額モ前者ニ比シ甚々鮮少ナリ

本縣ニ於ケル綿糸ハ主トシテ内地向ニシテ輸出向ハ其數少ナシ而カモ日露戰爭開始シテヨリ内地機業界ノ一般ニ沈衰セシ結果製産不振トナリ爲ニ三十七年ニ於ケル産額ハ前年ニ比シ百五十餘萬圓ヲ減少セリ然レトモ三十八年ニ入りテ内地商況ノ一般ニ活氣ヲ呈シ綿織物ノ需用漸ク増加シタリシノミナラス時局ノ發展ニ伴ヒ軍用品ノ織立益々多キヲ加ヘ機業界ハ一般ニ活況ヲ呈シ來リタル結果本品ノ需用著シク増加シ海外輸出モ戰局ノ進ムニ連レ盛ニ行ハレ市場ハ常ニ荷薄ノ有様ニシテ製産甚々盛ントナレリ殊ニ平和克復以來機業界一増ノ盛況ヲ呈シタル結果本品ノ需用益々増大シテ未曾有ノ好況ヲ示シ前記六工場ノ如キハ極力作業ノ擴張ニ努メタリシモ尙需用ヲ充シ能ハサリシカ如キ狀況ニシテ爲ニ三十八年及三十九年ニ於ケル産額ハ非常ノ増加ヲ示セリ

(六) 原料ノ需要供給

原料ハ主トシテ清國及印度地方産綿花ニシテ「ガラ紡」ニアリテハ油綿其他紡績工場或ハ綿ネル工場ノ落綿ヲ使用スト云フ

(七) 販出額及仕向地

本品ハ縣外各地ニ販出スルモノ甚々多ク産額ノ大部分ヲ占ムルト雖モ其數詳カナラス海外輸出ニアリテハ主トシテ清、韓兩國ニ仕向ケラレ馬尼刺地方ヘモ年々十餘萬圓ノ輸出ヲナスト云フ即チ三十九年ニ於ケル輸出額ハ

數 量	一、八一八、二九三貫
價 額	四、三七三、四三四圓

ニシテ主トシテ神戸、大阪港ヲ經由ス

(八) 販賣手續及取引慣習

輸出品ハ凡テ先約定ヲ爲シ神戸又ハ大阪ニ於テ内地商人(例ヘハ三井物産會社、内外綿糸會社ノ如シ)ノ手ヲ經テ漸次輸出ス而シテ南清地方ニ向テハ年中間斷ナキモ北清地方ヘハ結氷ノ期ハ輸出ヲ見ス韓國ハ八月ヨリ舊正月迄ヲ最多ノ期間トス内地向ニアリテハ各地ノ綿糸問屋ニ販賣スルヲ普通トス

(九) 相 場

左 二十手	百貳拾圓
右 二十手	百貳拾貳圓
右 十六手	百拾五圓
細 三十手	百六拾圓

(十) 荷造法其費用

荷造ハ「ドンゴロス」ニ包ミ鐵卷ヲ爲シ或ハ菰包ニシテ繩ヲ掛ク而シテ「ドンゴロス」包ハ一捆ニ付(四十玉入)荷造費金壹圓ヲ菰包ノ方ハ一捆(二十玉入)ニ付貳拾五錢ヲ要ス

(十一) 重ナル製造業者

- 三重紡績株式會社名古屋分工場
- 全 尼 張 分 工 場
- 津 島 紡 績 株 式 會 社
- 深 津 佐 七
- 全 愛 知 分 工 場
- 一 宮 紡 績 株 式 會 社
- 城 殿 實 五 郎

(三) 織 物

織物ハ本縣工産物中ノ首位ヲ占メ最近ニ於ケル産額ハ千六百餘萬圓ニ達シ機業戸數四萬四百九十四戸、職工數六萬四千八百八十一人ノ多キヲ見ル左ニ最近五ヶ年間ニ於ケル産額統計及機業戸數職工數ヲ掲ケン

(一) 三十九年前五ヶ年間累年産額

- 三十五年 一一、〇六八、二九一
- 三十六年 九、三七六、八〇五
- 三十七年 一〇、九九八、七九〇
- 三十八年 一三、一三七、一七〇
- 三十九年 一六、六九六、四七七

(二) 三十九年機業戸數、機數及職工數

工 場	機業戸數	機 數		職 工 數	
		力 機 機	手 機 機	男	女
三六五	二、六二八	七、四三五	一〇、〇六三	八二三	七、八五七
					八、六七〇

家 内 工 業	機 業	機 數		職 工 數	
		力 機 機	手 機 機	男	女
三、二九三	九九九	八、〇三四	一、九九三	四五二	六、五六二
三、八三七	四〇、四九四	一、九三三	四八、三九五	一五一	一、二五二
計		二、六五七	六五、八五七	一、五三七	四七、六七三
					六三、三四四
					六四、八八一

備考

- 一、工場ハ十人以上ノ職工ヲ有スルモノヲ掲ケタルモノトス
- 一、職工ハ一日平均従事人員數ヲ擧ケタルモノトス

本縣織物ハ綿織物最モ多ク全産額ノ約八割ヲ占ム之ニ亞クモノハ絹綿交織物ニシテ絹織物ハ其製産甚タ少ナシ以下項ヲ分チ是等織物ノ狀況ヲ記述スヘシ

(イ) 綿 織 物

(二) 産 額	年 次	數 量	價 額
	三十五年	—	八、九七六、三三三
	三十六年	—	七、四八一、五七五
	三十七年	一九、二九六、九一三反 七二、六三五本	八、二四六、一五九
	三十八年	一八、八三五、四五二反 一一、一八本	八、〇八八、四八九
	三十九年	—	一一、二二六、一一六

(二) 種類

本縣ニ産スル綿織物中其大部分ヲ占ムルモノハ白木綿ニシテ二子綿其他ノ綿木綿之レニ次キ綿子ル、紺木綿、紺無地、袴地、帶地等多少ノ産出アリ就中世上ニ其名高キハ知多木綿、三河綿、岡木綿トス今是レヲ輸出向及内地向ニ大別シテ品種ヲ示セハ左ノ如シ

(イ) 輸出向

紫綿、蒲團綿、掛地、東洋膠布、寧波布、シヅラ、納戸色無地、小倉紺無地、白木綿

(ロ) 内地向

細物紺紺太物類、白木綿、木綿縞色、無地其他

(三) 主要産地

中島、知多ノ二郡ヲ最トシ丹羽、葉栗、海東及名古屋ノ一市三郡亦多ク之ヲ産ス

(四) 沿革

現今ニ於ケル主要織物ニツキ左ニ其梗概ヲ記述スヘシ

(イ) 知多白木綿

起源及其年代共ニ詳ナラサルモ慶長年間驛傳ヲ以テ初メテ江戸へ輸送セリト傳フ萬治、寛文年間ニ至リ稍隆盛トナリ天明ノ頃伊勢國ヨリ窃ニ晒製造法ヲ知得シ爾來専ラ晒木綿トナシテ販出スルニ至リ一層隆盛ヲ加ヘタリ天保年間ニ於テ在來ノ機具地機(一名イザ)ト稱スルモノヲ半掛ケナルモノニ改良シタル結果著シク産額ノ増加ヲ來シ大ニ市場ニ名聲ヲ博シ伊勢産晒木綿ヲ壓スルニ至レリト云フ降テ明治初年ノ頃原料ニ天竺糸ヲ使用セシタメ需用者ノ嫌厭スル所トナリシモ明治十五年頃三河國ニ産スル和製紡績糸(カラ紡ト通稱セシモノ)ヲ原料ニ使用シタルニ製品ノ廉價ナルト手撚製ヲ以テ織

製スルモノト類似セルヲ以テ需用者ノ嗜好ニ適シ需用額ニ増加セシカハ機業者ハ之ニ力ヲ得機臺、機具等ヲ改良シテ盛ンニ之レヲ製出シ以テ今日ニ至レリ

(ロ) 岡木綿

明治十九年名古屋市ニ於テ鳴海綏ノ仲買ヲ業トセル尾關清次郎ト稱スル者朽木縣ニ於テ有名ナル眞岡木綿ノ東京地方ニ於テ中形原料トシテ好評アルヲ認メ名古屋市ニ於テ谷徳次郎丹羽郡ニ於テ鈴木某等ニ其模織ヲナサシメタリ其後尾關ハ斯業發展ニツキ種々畫策スル所アリ當時此事業タル利潤最モ薄ク爲メニ他業ノ繁盛ニ壓倒サル、ノ狀況ニシテ容易ニ發達セサリシモ兩三年ヲ經ルニ及ヒ需用漸ク増進シテ縣外各地ヨリノ注文續々來リ本場タル眞岡ヲ壓セントスルノ盛況ニ達シ今ヤ岡木綿ハ市場ニ好評ヲ博スルニ至レリ

(ハ) 三河綿

古クヨリ白木綿ヲ産シ維新前ニ在テハ三河白木綿ノ名聲殆ント全國ニ傳ヘラレシカ明治十二、三年頃實飯郡三谷村ノ人小田時藏、水野六三郎等白木綿ヲ伊豆、安房地方ニ行商シツ、傍ラ各地織物ノ狀況ヲ觀察セシ所ニヨリ居村ニ於テ始メテ綿木綿ヲ織製セリ爾來斯業ノ發達ニ努メ村民ヲ勸誘シテ綿木綿ノ製織ヲナサシメ産額漸ク増大シ明治十八年頃ニ至リ製造者次第ニ増加シ製産頗ル盛トナリ販路逐次擴張シテ奥羽地方ニ及ヒ明治二十六年頃ハ三河綿ノ名聲市場ニ普キニ至レリ然ルニ製造家ハ此好況ニ乘シテ粗惡品ヲ製出シ奇利ヲ占メントシタルノ結果需用者間ノ信用ヲ失墜シ一時非常ノ不振ヲ招キタリシヲ以テ製造者等ハ大ニ悟ル所アリ同業組合ヲ組織シテ其弊害ヲ除キ益々製品ノ改良ニ努メタル結果近年ニ至リ再ヒ盛況ヲ見ルニ至レリ

(五) 製産狀況

知多木綿主産地方ニ於テハ當時蒸氣機織、石油發動機等ヲ備ヘタル工場數個アリト雖モ多クハ家内工業ニ屬シ三河綿

ノ如キハ農家婦女ノ賃織スルモノ尠ナカラスシテ斯業ノ製産組織ハ未タ一般幼稚ナリトス
 本縣ニ於ケル綿織物ハ主トシテ内國向ニシテ外國向ハ甚タ少シ而カモ日露戰爭中ニ在テハ多少其影響ヲ受ケ稍不振ナ
 リシト雖モ各同業組合ノ製品検査ヲ勵行セシ結果市場ニ其聲價ヲ高メ白木綿ヲ始メ各種綿織物ノ需用ヲシテ益々増大
 ナラシムルノ趨勢ヲ示シ以テ他地方ニ比シ戰爭ノ打撃ヲ受ケシコト甚タ少ナカリシカ如シ戰後一層ノ好況ニ遇ヒテ著
 シク其製産ヲ増シ三十九年ノ産額ハ一千二百餘萬圓ニ達シ前年ニ比シ四百萬圓以上ノ激増ヲ見ルニ至リ前途益々發達
 ノ傾向ヲ呈セリ

輸出向綿織物トシテ白木綿(金巾類似品)及紫縮ト稱シテ下等ナル縞木綿ノ製織近年漸ク盛ントナリ逐年産額増進ノ勢
 ヲ呈セシモ三十九年九月頃ヨリ製産稍々不況トナレリ是レ韓國ニ於ケル服制改正ノ結果ナルハシト云フ

(六) 原料ノ需要供給

原料綿絲ハ太糸ヲ三重、大阪、福島、泉州紡績會社ニ仰キ細糸ハ日本、一宮及富士瓦斯紡績會社ノ製品ヲ使用シ總テ
 地方糸商人ヨリ之ヲ購入スト云フ

(七) 製産費及收益ノ比較

縞木綿一反ニヨリ其大要ヲ示セハ左ノ如シ	
原料代	七十八錢
製造費	三十二錢
收益	七錢

(八) 販出額及仕向地

内國向トシテハ縣外ニ販出セシ數額詳カナラサルモ東京、大阪其他奥州ヨリ關西各地ニ涉リテ多少ノ販出アラサルナ

シト云フ

輸出向キニアリテハ韓國及清國ニ仕向ケラレ神戸及大阪港ヲ經由ス今三十九年前五ヶ年間ニ於ケル輸出額ヲ示セハ左
 ノ如シ

年次	數量	價額
三十五年	一五、五〇〇 _反	二九、一六九 _円
三十六年	三六、〇〇〇	二〇、八〇〇
三十七年	一〇〇、五八〇	八八、五二〇
三十八年	一四〇、二九〇	一〇三、九一〇
三十九年	—	二、二八六、五二〇

(九) 販賣手續及取引慣習

製品ヲ殆ント地方問屋ニ販賣シ是レヨリ東京、大阪其他各地問屋ニ移ルモノトシ掛賣或ハ現金取引ヲ例トシ手形取引
 ハ一般ニ行ハレサルカ如シ

(十) 相場

最近ニ於ケル相場ハ大約左ノ知シ

納戸	一疋ニ付	六圓七十錢
東洋膠布	一本ニ付	七圓
紺緋	一反ニ付	二圓
紺無地	全	一圓五十錢

愛知縣

白木綿
岡木綿

一反ニ付
全

三十錢
五六十錢

(十一) 荷造法其費用並ニ運賃諸費

反物ハ百二十反、疋物ハ六十疋ヲ一捆トシ布又ハ澁紙ヲ以テ下包ミヲナシ其上ヲ蓆ニテ包裝シ時トシテハ更ニ其上ニ縮板ヲ被ヒテ緊縛スルコトアリ其費用ハ蓆包ノ儘ナルモノ壹個ニ付壹圓内外縮板ニテ外部ヲ挾ミタルモノ壹圓二三十錢ニシテ輸送ハ多ク氣車便ニヨルト云フ

(十二) 競争品及之ニ對スル本縣品ノ長所欠點

栃木、埼玉地方ノ製品ハ本縣産織物ニ對スル頸敵ニシテ地質、配色共ニ巧妙ニシテ整理亦宜シク外觀美麗ナルコト本縣ノ及フ所ニアラサルモ價格低廉ニシテ染色ノ堅牢ナルハ彼地産ノ亦及フ所ニアラスト云フ白木綿ニアリテハ地質尙未タ粗雜ナリト雖モ比較的廉價ナルハ本縣品ノ長所ト認メラル

(十三) 重ナル製造業者及取扱商店

愛知織物合資會社
森 利三郎
村 瀬 嘉十郎

小收織布株式會社
山 内 善 松
渡 邊 與 三 郎

(十四) 事業ノ施設

各同業組合ハ製品検査其他斯業ノ發達ニ努ムル所アリ縣亦毎年之ニ補助金ヲ與ヘテ其實行ヲ助ケツ、アリ

(ロ) 絹綿交織物

(一) 産 年 次	額 數 量	價 額
三十五年	一、〇四二、六三七反 九、二三八本	一、四三三、〇〇〇
三十六年	七五六、九七四反 六、四五〇本	一、二五六、七二四
三十七年	八二〇、〇三反 八、七〇〇本	一、二〇六、五九二
三十八年	一、一五八、九一四反 三、八一六本	一、七二八、八五一
三十九年	九三七、〇二反 一、八、二〇〇本	一、七四一、〇〇一

(二) 種 類

輸出向トシテハ紋織物ヲ主トシ内地向品ニ在リテハ染色、無染色ノ各種織物ノ製産多シトス

(三) 主 要 産 地

縣下最モ多額ニ之ヲ産出スルハ中島郡ニシテ全産額ノ約六割ヲ織出ス其他名古屋市及葉栗郡、丹羽郡ニ産出スルモノ亦少ナカラス

(四) 沿 革

本業ハ遠ク徳川中世ノ創始ニ係リシト雖モ爾來年々僅少ノ産出アルニ過ギスシテ殆ント見ルニ足ラサリシカ明治二十四年震災ノ後ニ至リ非常ノ發展ヲナシ明治三十三年主産地中島郡ニ中島郡織物同業組合ノ創設セラレシ以來益々發達シ以テ今日ニ至レリ

(五) 製 産 狀 況

本品ハ主トシテ内地向ニシテ輸出向ノ如キハ近年僅カニ其途ノ啓ケタルニ過ギスシテ製産未タ甚タ僅少ナリ是ヲ以テ

先年日露戰役ニ際シテハ其影響ヲ受ケ製産爲メニ不況ヲ呈シタリシモ戰後需要ノ増進ト共ニ益々好況トナリ製産逐年増加ノ勢ヲ示セリ

(六) 原料ノ需要供給

原料ハ重ニ地方ノ生産品ニシテ機業家ハ地方商人ヨリ直接之ヲ購入スト云フ

(七) 製産費及收益ノ比較

現今米澤一疋、琥珀地一反ニ對スル製産費及收益概額ヲ示セハ左ノ如シ

區分	米澤 絨	琥珀地
原料代	五、一三〇	一、八八〇
絨賃	五〇〇	二二〇
絨物消費稅	五六〇	二〇〇
營業稅及問屋手数料	三六〇	一四〇
雜費	四〇〇	一五〇
收益	二五〇	一六〇

(八) 販出額及仕向地

内地向ハ主トシテ京、阪其他關西地方ニ販出シ東京之レニ亞ク其他東北地方ニモ多少ノ輸出ヲナスト云フ此等縣外輸出額ハ之レヲ詳ニ知ル能ハサルモ產額ノ大部分ハ縣外ニ販出セラルト云フ

海外輸出ハ清國ヲ主トシ布哇、朝鮮之ニ亞ク左ニ三十八年前四ヶ年間ニ於ケル輸出額及三十八年ニ於ケル國別輸出額ヲ示サン

(イ) 三十八年前四ヶ年間輸出額

年次	數量	價額
三十五年	一六、〇〇〇 _反	三二、〇〇〇 _円
三十六年	九、三二七	一四、八六五
三十七年	八、八三六	一三、二九五
三十八年	八、四八二	一二、七二三

(ロ) 三十八年國別輸出額

國別	數量	價額
清國	五、九三七 _反	八、九〇五 _円
布哇	一、六九六	二、五四四
朝鮮	八四九	一、二七四
計	八、四八二	一二、七二三

(九) 販賣手續及取引慣習

前記ノ内清國、朝鮮へ輸出セラル、モノハ大阪、神戸港ヲ經由シ布哇ニ仕向ケラル、モノハ横濱港ヲ經ルモノトス
製品ハ殆ント地方ノ問屋ニ賣渡サレ是レヨリ京、阪及東京、横濱其他各地へ販賣セラル、ヲ例トス海外輸出品ハ地方問屋ヨリ横濱及阪、神問屋ノ手ヲ經テ外國商館ニ販賣スト云フ而シテ機業家ト地方問屋トノ間ハ延取引又ハ現金取引ノ行ハル、モノ多シ

(十) 相場

愛知縣

本縣ニ於テ比較的多額ヲ産スル左記兩種ニ付キ最近ノ相場ヲ示セハ左ノ如シ

品名	最高	最低
米澤上等一疋	七、七〇〇 ^円	七、二〇〇 ^円
琥珀上等一反	三、〇〇〇	二、七五〇

(十一) 荷造法及其費用并ニ運賃諸費

反物ハ百二十反ヲ疋物ハ六十疋ヲ一個トシ布又ハ澁紙ニテ包ミ尙其上ヲ蓆ニテ包ム又時トシテハ澁紙及蓆包ミトナシタル上ニ縮板ヲ以テ挟ムコトアリ此レニ要スル費用ハ

布又ハ澁紙ニテ包ミタルモノ	一個ニ付	一圓内外
包ノ外部ヲ縮板ニテ挟ミタルモノ	全	一圓二三十錢
發着地	瀛車賃	仲仕賃
至白 大 一 噸ニ付	二、七八〇	一五〇
至白 神 一 月宮	三、三〇〇	一五〇
至白 神 一 月宮	三、三〇〇	一五〇
至白 横 一 濱宮	五、七〇〇	一五〇
運送店ノ手数料		二〇〇

ナリトス次ニ中島郡一宮町ヨリ大阪、神戸及横濱ニ至ル運賃及諸掛リヲ示セハ左ノ如シ

(十二) 販出先ニ於ケル競争品及其長所缺點

本品ノ競争品ハ關東地方即チ埼玉、栃木、群馬地方ニ産スルモノニシテ光澤、意匠共ニ本縣産ヲ凌駕シ常ニ約一割以上ノ高値ニ販賣セラレツ、アルモ本縣産ハ前記競争品ニ比シ丈尺及巾ニ於テ優レル所アリト云フ

(十三) 重ナル製造業者及取扱商店

尾州織染株式會社	鈴木 鎌次郎
小 鹽 喜三郎	渡 邊 市次郎
山 本 直右衛門	田 中 利右衛門

(十四) 事業上ノ施設

尾西織物同業組合及丹羽、葉栗郡織物同業組合ニ於テハ組合製品ニ對シ每品ニ検査ヲ行ヒ特ニ原料品ノ検査ヲ勵行シ不正品アルトキハ假借スル所ナク之ニ制裁ヲ加ヘ又職工雇入ニ關スル取締ヲナシ或ハ縣立工業學校教諭ヲ聘シテ技術上ノ講話會ヲ開キ或ハ組合員ヲシテ著名ノ機業地ヲ視察セシムル等事業ノ發達ニ努ムル所尠ナカラス縣ハ之ニ對シテ毎年補助金ヲ交付シテ其目的遂行ヲ援助セリ

(八) 絹 織 物

(一) 産 額	年 次	數 量	價 額
(二) 種 類	三十五年	六四、五五三反	五二二、七二一 ^円
	三十六年	三四、一九四本	四八三、三七六
	三十七年	五〇、八九六反	五五八、六〇二
	三十八年	二七、三一九本	五一四、一七四
(三) 種 類	三十九年	七五、九五九反	九二三、二九九
	愛知縣	六九、八〇五反	
		四、二八四本	
		一〇、四七三反	
		一〇、七七二本	

(イ) 輸 出 向

平地羽二重、紋羽二重、無地壁、紋壁

(ロ) 内 地 向

紋織類、縮緬類、斜子類、糸織類、紬太織類、平絹類、絹類、透綾類、海氣類、傘地類、男女帶地類其他

(三) 主 要 産 地

丹羽郡葉栗郡最モ多ク之ヲ産シ名古屋市及知多、碧海、額田、幡豆ノ各郡亦多少ノ産出アリ

(四) 製 産 状 況

本縣ニ於テハ主トシテ本品ノ製織ヲ業トスル者少ナク多クハ綿織物及絹綿交織物織製ノ傍ラ之ヲ製産スルニ過キスシテ概シテ幼稚ノ域ニアリト云フヲ憚ラス然レトモ近時一般工業ノ進歩ト共ニ本品ノ製産モ亦漸ク發達ニ向ヒツ、アルノミナラス輸出向羽二重及壁織ノ如キハ漸次需要ヲ進メ來リシ結果逐年其製産ヲ増進スルノ大勢ヲ示セリ而シテ三十七、八年ノ戰役ニ際シテハ内地向織物ハ甚タシキ打撃ヲ蒙リ製産頗ル不振ナリシカ輸出向ニ在テハ幸ニ其影響ヲ受ケシコト少ナク爲ニ内地向品ノ不況ヲ幾分カ補フヲ得タルカ如シ而シテ戰後一般ニ需要激増シ市況盛ンナリシヲ以テ三十九年ニ於テハ著シク産額ノ増加ヲ示セリ要スルニ本縣ニ於ケル絹織物工業ハ漸次發達ノ趨勢ニアルヲ以テ前途ニ於テモ亦有以ナリト認ムルコトヲ得ヘシ

(五) 原 料 ノ 需 要 供 給

原料生絲及玉絲ハ殆ント縣内ニ産スルモノヲ用ヒ僅カニ静岡、三重、岐阜縣ヨリ産スルモノヲ使用シ總テ地方絲商ヨリ之ヲ購入ス

(六) 製 産 費 及 收 益 ノ 比 較

詳細ニ之レヲ知ルコト能ハサルモ大略生米十貫目ニ要スル製産費ハ約百三十圓ニシテ收益ハ製産費ノ約二割ナリト云フ

(七) 販 出 額 及 仕 向 地

縣外販出額ハ其數額詳カナラスト雖モ最近五ヶ年間ニ於ケル海外輸出額ハ

年 次	數 量	價 額
三十五年	?	一三八、二三一 ^円
三十六年	二、四六〇 ^匁	七七、四九〇
三十七年	六、八一六	一四八、五八〇
三十八年	五七、九六六 ^匁	一六九、八〇二
三十九年	?	一九四、〇〇〇

ニシテ是等ハ多ク横濱在留外國商ノ手ヲ經テ米國及印度方面ニ輸出セララル今三十八年ニ於ケル國別輸出額ヲ表示スレハ左ノ如シ

國 別	數 量	價 額
米 國	五六、六二九	一四一、三三七 ^円
印 度 諸 島	一、三三七	二八、四六五
計	五七、九六六	一六九、八〇二

(八) 販 賣 手 續 及 取 引 慣 習

海外輸出品ハ地方及横濱問屋ノ手ヲ經テ外商ニ販賣スルヲ普通トスルモ注文品ニアリテハ直接ニ外商ニ送付スルモハ

愛知縣

トス而シテ送荷ハ荷爲替ニ附スルヲ例トス

(九) 輸出狀況

縣外及海外輸出共ニ近年概シテ好況ニシテ殊ニ歐、米ニ於ケル絹織物ノ流行近時益々盛ナルニ至リ羽二重ノ需要著シク増進スルノ趨勢ナルノミナラス縣下製産品ニ於テモ漸次改良ヲ加ヘラレタルヲ以テ益々弊價ヲ高メ逐年盛況ニ向ヒ前途益々多望ナリト認メラル

(十) 荷造法及其費用并ニ運賃諸費

荷造方法ハ内部ハ紙文庫ニテ包括シ油紙ヲ以テ二重包トシ外部ハ松板(六分板)ヲ以テ製シタル長方形ノ箱ニ納メ繩ヲ以テ縱横三ヶ所ヲ結束ス其費用壹圓ニ付壹圓ヲ要ス
氣車便ヲ以テ横濱ニ送致ス其運賃壹圓(七貫)ニ付壹圓七十五錢ヲ要ス

(十一) 重ナル製造業者及取扱商店

國產合資會社	寺澤芳太郎
寺澤源一郎	安達猶太郎
古池小一郎	長谷彌七

(四) 綿毛布

(二) 產額	年次	數量	價額
	三十五年	二二八、四〇〇 ^以	一八一、九七〇 ^円

(二) 種類	輸出向	寢蓑掛及敷物
	清國向	三百目乃至四百目
	韓國向	四百目乃至六百目
	内地向	三百五十目(中判)
	肩掛、膝掛	巾三尺四寸 長四尺五寸
	主要產地	巾三尺四寸 長四尺八寸
	殆ント名古屋市ニ産出シ全産額ノ約九割五分ニ達シ幡豆郡、碧海郡、葉栗郡等僅ニ之ヲ産ス	巾三尺七寸 長五尺五寸

(四) 沿革
本品製造ノ起源ヲ釋スルニ名古屋市玉屋町吉村富三郎ナル者維新以來年々多額ノ毛布カ本邦ニ輸入セラレ而モ尙我カ文運ノ進歩ト共ニ需要益々増進セントスルヲ見テ之ヲ本邦ニ於テ模造スルヲ得ハ極メテ有利ノ事業ナルヘキヲ認メ種々研究ノ結果綿糸ヲ以テ之ヲ製スルコトヲ案出シ明治十六年普通機械職工ヲシテ始メテ綿毛布ヲ製セシメタリ然ルニ

愛知縣

當時之ニ使用セシ織機ハ普通ノモノニ多少ノ變更ヲ加ハタルニ過キスシテ毛布製織上極メテ不適當ナリシノミナラス職工亦無經驗ナルカ故ニ其製品ハ甚ク拙劣ニシテ見ルニ足ラサリシカ爾來種々研究シテ之レカ改良ニ努メタル結果需用益々開ケ明治十八年ニハ海外ニ之ヲ輸出スルニ至リシヲ以テ本品ノ製造ヲナスモノ漸ク増加シ事業益々盛大トナレリ然レトモ當時毛布ニ施サル、模様ハ總テ染付ニシテ其起毛亦手工ニ依リシヲ以テ斯業未タ甚ク幼稚ナリシヲ免レツリシカ其後「メカニク」及「綿」ニ起毛器械ノ毛布ノ製織及起毛ニ應用セラレ、ニ及ヒ漸ク良好ノ製品ヲ出シ以テ本業ノ面目ヲ一新スルニ至リ内外ノ需要ハ一層増加シテ頗ル盛大トナリ以テ今日ニ至レリ

(五) 製造戸數及職工數 (三十九年十二月末日現在)

職業別	戸數	職工數		機關動力
		十四才以上	十四才未満	
機業	三五	一、〇五五	四八二	蒸汽力
起毛業	五五	一五〇	九〇	蒸汽力
捺染業	九	一五	九〇	蒸汽力
綠取業	五四	一、二二〇	五七二	蒸汽力
計				

(六) 製産狀況

本品ノ製産機關ハ各分業トナレル機織、起毛、捺染及綠取りノ四業者ヨリ成リ各業者ノ作業規模ハ概シテ小ナルヲ見ル只起毛業ニアリテハ器械ノ設備及運用上ニ於テ比較的資金ヲ要スルコト多キヲ以テ其組織ノ稍大ナルモノアリ機織業ニアリテハ十臺以上ノ機臺ヲ備フルモノ甚ク稀少ニシテ多クハ數臺ヲ設置セル家内的小工業家ノ營業ニ係レリ捺染及綠取り業ニ至リテハ機織業ノ一小附帶事業ニシテ機織家ノ製織セル織布ヲ自宅ニ持チ來リ手工ヲ以テ作業スルニ過

キスシテ規模甚ク小ナリ本品ハ前項沿革ニ於テ記述シタルカ如ク明治十六年以來ノ製造ニ係リ毛布ノ代用品トシテ内外ノ需要激増セシヲ以テ著シク發達シ益々盛大ナラントセシニ粗製濫造ヲナセシ結果ニヤ一時非常ノ不振ヲ招キタリシカ明治三十三年愛知縣綿毛布同業組合成立シテ大ニ製造販賣ノ改善ニ努ムルアルニ至リ三十五年頃ヨリ漸ク回復ノ氣運ヲ開キ三十六年ノ如キハ非常ノ好況ヲ呈セリ其後日露戰爭ニ際シ益々活況ヲ現ハシ殊ニ三十九年ノ上半期ニ在テハ輸出向注文品ノ製織ニ逐ハレ内地向ノモノヲ製出シ得サルカ如キ狀況ヲ示セリ同年下半年期ヨリ四十年ニ亘リテハ輸出向キノ漸ク不況トナリシト雖モ内地ニ於ケル需用ハ從來ト異ナル處ナク盛況ヲ呈シ相當ノ製産アルヲ見タリ

(七) 原料ノ需要供給

綿毛布ノ原料トシテ緊糸ハ重ニ三重紡績會社製品赤三ヲ用ヒ横糸ハ普通三河地方ニテ製出セル「ガラ紡」(水車ヲ原動力トシテ製シタル一種ノ綿糸)ヲ用ヒ上等品ニアリテハ横糸ニモ赤三等ヲ使用ス

(八) 製産費及收益ノ比較

國別	製糸			横糸			手間賃			費計			收益		
	支那	朝鮮	内地	支那	朝鮮	内地	支那	朝鮮	内地	支那	朝鮮	内地	支那	朝鮮	内地
	至十一	至十四	至十	至三	至五	至十	至二	至十	至五	至七	至十	至十	至十	至十	至十
	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢
	至十一	至十四	至十	至三	至五	至十	至二	至十	至五	至七	至十	至十	至十	至十	至十
	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢
	至十一	至十四	至十	至三	至五	至十	至二	至十	至五	至七	至十	至十	至十	至十	至十
	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢

(九) 販出額及仕向地

本品ハ産額ノ殆ント全部ヲ縣外ニ販出シ縣内ニ止マルモノハ其數極メテ少シ其内國向販出額ニ至リテハ詳カナラスト雖モ海外輸出ノ數額ヲ示セハ左ノ如シ

愛知縣

年次	數量	價額
三十五年	二四三、〇〇〇 ^枚	一九一、九七〇 ^円
三十六年	四八六、七九〇	三四八、四八〇
三十七年	三六八、七八〇	三二九、八〇七
三十八年	四七七、二二一	三六二、四三三
三十九年	四三八、七六五	三〇七、一三七

備考 三十五年ノ輸出額カ同年ノ産額ヲ超過セルハ前年ノ持越品ノ輸出アリシニ因ル

輸出先ハ清國ヲ主トシ韓國及露領亞細亞之ニ次ク而シテ是等輸出品ハ主トシテ神戸、大阪港ヲ經由スト云フ

(十) 販賣手續及取引慣習

輸出向製品ハ主トシテ名古屋市ニ於ケル製造者及販賣者ヨリ大阪、神戸ノ問屋ヲ經テ在内地居留清商ニ販賣セラル、所ニ係リ其取引多キ期節ハ毎年二、三、四、八、九、十、十一、七ヶ月ニシテ最モ盛ナルハ三、八、九月ナリトス内地向製品ニ在リテハ主トシテ東京、大阪ノ商人ト取引スルノ外各地方ノ商人ニ直接賣渡スコトアリ

(十一) 相場

支那向	一枚ニ付	九拾錢
朝鮮向	全	壹圓貳拾錢
内地向	全	壹圓

(十二) 輸出狀況

本品ノ輸出ハ明治十八年始メテ清、韓地方ニ開始セラレシ以來逐年發達シ殊ニ清國ニ在テハ地質厚ク色合、模様ノ一見

華美ニシテ而カモ價格ノ比較的低廉ナル結果北清地方ニ於ケル下流社會ノ間ニ盛ニ之ヲ需要セラル、ニ至リ著シク輸出額ヲ増加セリ殊ニ日露戰爭ノ當時ニ於テハ我軍夫ノ滿州ニ在リテ之ヲ需要スルコト多ク爲ニ此ノ地方ニ於ケル清人ノ需要ヲ大ニ誘發シタリシヲ以テ三十七年以降營口、芝罘等へ向ツテノ輸出甚タ盛況ヲ呈シ大連、天津、安東縣等へノ輸出額モ亦漸ク増加セルヲ見ル殊ニ韓國ニ在テハ其輸出開ケテ以來彼ノ地ノ氣候ト生活狀態トハ本品ノ需要ヲシテ逐年増進セシメ輸出漸ク盛大トナルニ至リシカ染色甚タ不完全ニシテ彼等ノ白衣ヲ汚染スルコト甚タシク爲ニ大ニ嫌厭ヒラル、所トナリ弊價頓ニ墜落シテ輸出頗ル不振トナリシヲ以テ爾後褪色ノ患少ナキ茶色ノモノヲ輸出スルニ及ヒ漸ク其不況ヲ挽回シテ彼等ノ間ニ再ヒ本品ノ需要ヲ盛ンナラシムルニ至リシノミナラス日露戰爭以來邦人ノ彼ノ地ニ移住スルモノ漸ク多ク白毛布其他上等品需要大ニ増進シテ輸出一層盛ントナレリ浦鹽方面へノ輸出ハ日露戰爭以前ニ於テ漸ク盛大ニ向ヒシモ開戦ト共ニ輸出全ク杜絶スルニ至レリ其後兩國ノ平和克復シ交通ノ復舊スルニ及ヒ非常ノ盛況ヲ以テ輸出セラレタリト云フ

(十三) 荷造法其費用並ニ運賃及ヒ保險料

箱入ト爲スモノハ四周ニ鐵帶ヲ圍ラシ之ヲ釘打トス
菰包ト爲スモノハ厚キ洋紙ヲ以テ綿毛布ヲ纏ヒ之ヲ菰ニテ包ミ繩ヲ以テ緊束ス
棚板材ヲ以テ製箱スルトキハ百枚入壹個ニ付壹圓七拾八錢
菰包トナスモノハ百枚入壹個ニ付五、六拾錢
運賃ハ市内製造者ヨリ名古屋停車場迄百枚入壹個ニ付八錢ニシテ又汽車運賃ハ大阪迄箱入六十五錢菰包五十五錢神戸迄ハ箱入壹圓貳、叁拾錢菰包ハ壹圓ナリ而シテ右保險料ハ百圓ニ付三拾錢乃至三拾五錢ノ割ナリト云フ

(十四) 輸出先ニ於ケル競争品ト之ニ對スル長所欠點並ニ改良スヘキ要點

本品ノ競争品トシテ支那市場ニ其勢力ノ強大ナルハ獨逸製品ニシテ其品質ニ於テ遙カニ我カ製品ヲ凌駕シ只價格ノ點ニ於テ我ニ一籌ヲ輸スルノミナリト云フ左ニ掲クル諸項ハ獨逸品ノ長所タル所ニシテ我カ製品ノ宜シク改良ヲ要スヘキ點ナリトス

一、原料ノ精撰セラレタルコト

一、模様、色彩ノ嶄新ニシテ支那人ノ嗜好ニ適應シ且ツ甚タ鮮明ナルコト

一、染色ノ堅牢ナルコト

一、起毛整正ニシテ光澤ヲ有スルコト

(十五) 重ナル製造者及内外國ニ於ケル重ナル取扱商店

名古屋市ニ於ケル重ナル製造家ハ左ノ如シ

機業家

南久屋町

大 阪 市

同

南 園 町

起毛業

南 鷹 匠 町

前 津 小 林

重ナル販賣者

田 中 德 三 郎

酒 井 萬 太 郎

廣 瀬 圓 五 郎

鈴 木 良 右 工 門

日 本 起 毛 合 資 會 社

永 盛 起 毛 合 名 會 社

名 古 屋 市

玉 屋 町

南 大 津 町

本 町

大 阪

吉 村 富 三 郎

勅 使 河 原 久 吉

堀 み す

糸 平 洋 行

綿 布 商 行

中 原 滿 助 輸 出 部

清 國

營 口

鐵 嶺

韓 國

釜 山

仁 川

平 壤

糸 平 洋 行 營 口 支 店

穗 積 洋 行

田 中 善 支 店

赤 松 吉 藏

齋 藤 洋 行

(十六) 事業上ノ施設

愛知綿毛布同業組合ニ在テハ検査員ヲ置キ製品ニ對シ每品ニ検査ヲナシ又染色技手ヲシテ染色技術ノ實地指導ヲナシシメル等事業ノ發達ヲ圖レリ縣ニ於テ三十九年度ヨリ三百圓ヲ交付シテ組合ノ施設ヲ補助シ居レリ

(五) 染物 (綾)

(一) 産額	年次	數量	價額
	三十五年	一、六二五、七五五 _元	一、〇一八、八八二 _円
	三十六年	一、三八二、一五七	八五九、七〇九
	三十七年	六五五、三五〇	四五一、四四八
	三十七年	一、一五八、四一九	八三四、五一九
	三十九年	一、一八三、八六九	八六〇、〇六四

(二) 主要産地
名古屋市ハ最も主ナル産地ニシテ愛知、知多、西春日井郡亦産出多シ

(三) 沿革
本品製造ノ起源ハ甚ク遠クシテ詳カナラスト雖モ今ヲ距ル三百餘年前即チ慶長ノ末年尾張ノ國主徳川義直公入國ノ際有松綾ノ手綱ヲ獻シタルコトアリト傳フ爾來著シク盛大トナリ有松綾ノ名稱ハ大ニ世上ニ流布セラル、ニ至レリ明治維新以來時勢ノ變遷ニヨリ一時頽廢ノ兆ヲ呈シタルコトアリシモ有志者大ニ力ヲ之カ振興ニ盡シ竟ニ組合ヲ組織シ専ラ斯業ノ擴張ヲ圖リタル結果再ヒ盛進ニ向ヒ製品價格ノ割合ニ低廉ナルヲ以テ需要者間ニ好評ヲ博シ今ヤ縣下特産品トシテ八十萬圓ノ巨額ヲ生産スルニ至レリ

(四) 製造戸數及職工數 (三十九年)

戸數	職工數	
	男	女
四三戸	四二二人	七二人
計	四九四人	

(五) 製産狀況

本品ハ手拭地、浴衣地、兵兒帶地等多ク主トシテ内地ノ需要ニ應スルモノニシテ從前ニアリテハ海外ニ輸出セラル、モノ稍多カリシカ三十七年以來ハ大阪製品ニ壓セラレテ甚ク僅少トナレリ三十七年日露開戦ノ結果需要ノ減退セルノミナラス織物課稅行ハレ納稅上非常ノ手數ヲ要スル等ニヨリ自然製造ヲ手控ヘタリシヲ以テ製産甚ク不況ヲ呈シ其産額著シク減少セリ三十八年以降需要漸ク回復スルニ至リ相當ノ製産ヲ見タリシト雖モ三十九年ニ於テハ原料綿糸ノ高價ニ加ヘテ勞銀ノ騰貴セシ結果直段ノ不引合ヲ來シ製産漸ク困難トナリ中ニハ休業スルモノアルニ至レリト云フ元來本品ノ製産ハ手工的作業ニヨルモノ多ク近時勞銀ノ昇騰著シキニ比シ市價ノ之レニ伴ハサルノミナラス中形染ハ遂日本品需要ノ範圍ヲ浸蝕シツ、アルヲ以テ本業ノ前途ハ甚クシク囑望スルニ足ラサルカ如シ

(六) 原料ノ需要供給

原料布ハ主トシテ三河地方及知多郡、中島郡等ヨリ之ヲ仰ク

(七) 製産費及收益ノ比較

製産費及原料費	七十二錢
收益	三錢

愛知縣

(八) 販出額及仕向地

其縣外販出數額ハ詳カナラスト雖モ縣下ニ需要セラル、モノ尠ナカラス而シテ縣外仕向地ハ主トシテ近縣ナリト云フ
海外輸出ニ在リテハ神戸港ヲ經テ香港、新嘉坡、仙頭、廣東地方ニ仕向ケラル、モノニシテ三十九年前五ケ年ノ輸出
額ヲ示セハ左ノ如シ

年次	數量	價額
三十五年	七八、五六〇	四八、三〇五
三十六年	一五一、四一九	五〇、四三二
三十七年	?	一八、〇〇〇
三十八年	二〇、〇〇〇	六、〇〇〇
三十九年	一〇、〇〇〇	三、〇〇〇

(九) 販賣手續及取引慣習

内地向ニアリテハ地方商人若シクハ需要地商人ニ直接販賣シ輸出向ハ在留清商ニ賣込ミ或ハ直接輸出ヲナス而シテ取
引ノ盛ナルハ三月ヨリ七月ニ至ル五ケ月及十、十一ノ二ケ月間ナリト云フ

(十) 相場

→ 反ニ付

自五十錢至一圓

(十一) 輸出狀況

輸出品ハ主トシテ清、韓在留本邦人ノ需要スル所ニ係リ南清地方ニ於ケル支那人ノ僅カニ之ヲ使用スルモノアルノ外
外人間ニ需要セラル、モノ皆無ナルヲ以テ見ルニ足ラス殊ニ近時大阪製品ニ壓倒セラレ輸出額ハ年々減退ノ傾向ヲ呈

セリ

(十二) 荷造法其費用並ニ運賃

二十反ヲ以テ一梱トシ「ドンゴロス」ニテ外包ヲナシ之ニ鐵帶ヲ施ス然ラサレハ箱入トナスヲ例トス其費用前者六十錢
後者壹圓五十錢ヲ要ス而シテ名古屋市ヨリ神戸ニ至ル一梱ノ運賃ハ約壹圓ナリト云フ

(十三) 販出先ニ於ケル代用品及本品ノ長所缺點

本品ノ代用品トシテ最モ優勢ナルハ中形染トス是レ中形染ハ一見綾ノ如ク齊美ニシテ手工ヲ要スル甚タ少ク任意ノ
模様ヲ染出シ得ルヲ以テ價格比較的廉ナルニ由ルモノニシテ綾ハ之レニ比シ比較的模様ニ變化乏シク且ツ其製造ニ手
工ヲ要スルコト多キノミナラス之ヲ衣服ニ仕立ツル際縮ヲ引キ延ハスカ如キ煩雜ハ本品ノ缺點トスル所ナリ只中形
染ニ比シ特殊ノ趣味ヲ有スルヲ以テ世人ノ嗜好ニ投スルアルノミ

(十四) 事業上ノ施設

有松絞商工同業組合及名古屋國産絞商工同業組合アリテ製産販賣上ノ弊害ヲ防過シ染色意匠ノ改良ニ努メ居レリ

(六) 陶磁器

(一) 産額

年次

産額

三十五年	二、三〇〇、二三八
三十六年	二、〇九三、八六六
三十七年	二、三五二、七九一

愛知縣

三十八年
三十九年

二、三三三、七九一
五、五四八、三一四

(二) 種類

本縣陶磁器ノ主ナルモノハ瀬戸焼、常滑焼ニシテ此ノ外富士見焼、夜寒焼、日ノ本焼及大山焼アリ而シテ其品種ノ主ナルモノハ珈琲茶碗及其他ノ飲食器ニシテ花瓶、置物其他ノ裝飾用品及家具等尠ナカラス

(三) 主要産地

縣下到ル處多少ノ産出ヲ見サルナシト雖モ就中重ナル産地ハ東春日井郡、知多郡及名古屋市ニシテ丹羽郡、碧海郡、西加茂郡等又其産額多シ

(四) 沿革

本業ノ起源ハ頗ル遠ク嵯峨天皇ノ時始メテ本品ヲ製造セリト傳フ抑モ本縣ハ製陶ニ適スル原土極メテ豊富ナルヲ以テ創業以來年ト共ニ非常ノ發達ヲナシ古ヨリ瀬戸焼、常滑焼ノ名聲ハ海内到ル所ニ喧傳セラレ製陶ノ繁盛ナル全國ニ冠絶スルニ至レリ明治維新ノ後水陸交通ノ便益々發達スルニ伴ヒ内地需要ノ日ニ月ニ増進セシノミナラス海外輸出亦漸ク盛ナルニ從ヒ一層ノ進歩ヲナシ以テ今日ニ至レリ

(五) 製造戸數及職工數 (三十九年)

製造戸數	一、三二五戸
職工數	七、八二九人
男	一、五六四人
女	九、三九三人
計	

(六) 製産狀況

本縣ニ於ケル陶磁器業ハ未タ概シテ小規模ノモノ多シト雖モ近年漸ク發達シ來リ日本陶器合名會社其他大規模ノ新進工場ノ起レルヲ見ルニ至リ石炭窯ノ設置亦漸ク増加セントスルノミナラス工業用各種機械器具ノ如キモ漸次歐、米ノ式ニ改良セラレントシ今ヤ此ノ製造工業ハ漸ク舊態ヲ脱シテ文明ノ域ニ入り大規模ノ工場作業ニ移ラントスルノ趨勢ヲ呈シ製産逐年盛大ニ向ヒツ、アリ特ニ最近二、三年間ノ狀況ハ甚タ良好ニシテ日露戰爭ノ當時ノ如キ本品ノ主タル海外輸出頗ル好況ナリシヲ以テ内地需要ノ多少減退セシニ拘ハラズ製産甚タ盛ンナリキ殊ニ平和克復セシ以來内地向ノ好況トナリシノミナラス輸出向キニ在テモ一層ノ盛況ヲ呈シ注文續々來リ三十九年下半期ノ如キハ殆ント注文品ノ製造ニ忙殺セラレシ有様ニシテ爲ニ同年ニ於ケル産額ハ前年ニ比シ三百餘萬圓ヲ激増シテ五百五十餘萬圓ノ巨額ヲ示セリ四十年ニ入りテハ稍々不況ヲ呈シ前年ノ如キ産額ヲ見ル能ハサルヘキモ大勢ハ將來益々發達ノ機運ニアルカ如シ

(七) 原料ノ需要供給

原土ハ主トシテ縣下東春日井郡地方ヨリ採掘スルモノニシテ甚タ豊富ナリト云フ

(八) 製産費及收益ノ比較

瀬戸組合三十九年ニ於ケル製産額ヲ記載スレハ左ノ如シ

生産額	一、五五七、〇七四
松制木原料	一、三八五、七九六
職工賃雜費	一七二、二七八
收益	

(九) 販出額及仕向地

内地向販出額ハ其額詳カナラサルモ三十九年ニ於ケル海外輸出額ヲ輸出國別ニ示セハ左ノ如シ

愛知縣

國別	數量	噸數	價額
和蘭	三、五六〇	一、六二〇	二三、一〇〇
濠太利	二、五四〇	一、一五四	一六、五〇〇
加太利	六、〇九〇	二、七七一	三九、五〇〇
亞米利加	三〇、〇〇〇	一一、〇五三	一、六五〇、〇〇〇
佛蘭西	二、一一〇	九二三	一三、二〇〇
英吉利	六、八二〇	二、九六九	三九、六〇〇
獨逸	二、六五〇	一、一五三	一六、五〇〇
伊太利	一、〇五〇	四六一	六六、〇〇〇
諸國	一、五五〇	七〇五	九一、〇〇〇
計	五六、三七〇	二二、八〇九	三、二九一、〇〇〇

而シテ前記輸出品ハ横濱及神戸港ヲ經由ス

(十) 販賣手續及取引慣習

海外輸出ニアリテハ直接又ハ在本邦外國商人ノ手ヲ經ルモノニシテ亞米利加ニ輸出スルモノハ主トシテ森村組ノ手ニ依リ清、韓向ニ在テハ概シテ在神戸清商ノ手ヲ經ルト云フ而シテ代金ハ各港着又ハ船積後支拂ヲ受クルヲ常トス

(十一) 輸出狀況

海外ニ於ケル本品ノ需要ハ近來秩序的ニ進歩シ來リ逐年輸出額ヲ増加シ前途益々有望ナリ而シテ輸出最モ盛ナル時期ハ毎年四月ヨリ八月マテニシテ十一月ヨリ翌年三月ニ至ルノ間ハ取引少ナシト云フ

(十二) 荷造法其費用

本品ノ荷造ハ其品種各仕向地ニヨリ多少其方法ヲ異ニス即チ米國向ハ箱入トシ概テ十六才ナリ其費用(箱代共)二圓六十錢ヲ要ス、歐洲向ニ在リテハ凡ソ二十才ニシテ(箱代共)三圓四十錢、韓國向ハ十三才ニシテ(箱代共)壹圓六十錢ヲ要ス此ノ外菰包ヲ以テ荷造スルコトアリ其費用一捆平均三十五錢ナリト云フ

(十三) 輸出先ニ於ケル競争品

海外市場ニ於テ優勢ナル競争品ハ英國、和蘭及獨逸製品ニシテ就中獨逸品ハ堅牢且比較的廉價ナルヲ以テ其勢力最モ強烈ナリト云フ

(十四) 長所缺點并ニ改良スヘキ要點

本品ハ價格甚タ廉ナルヲ以テ前項各競争品ノ間ニ立テ一勢力ヲナスト雖モ是等ニ比シ品質脆弱ナレバ此點ヲ改良シテ堅牢ノモノヲ製出スルコト最モ必要ノコトニ屬ス

(十五) 主ナル製造業者

日本陶器合名會社
森村組
田代商店
愛知磁器製造合資會社
大山燒陶器株式會社

(十六) 事業上ノ施設

瀬戸陶磁工商同業組合及常滑陶器同業組合アリテ斯業ノ改良發達ニ努メツ、アリ而シテ縣ニ於テハ毎年瀬戸陶磁工商同業組合へ五百圓常滑陶器同業組合へ四百圓ヲ交付シ其施設事業ヲ補助シ居レリ

(七) 寶

(二) 産 額

年 次	産 額
三十五年	五四〇、八一六
三十六年	三五五、四七八
三十七年	三二九、七四〇
三十八年	三六五、八三〇
三十九年	二三五、三五〇

(三) 主要産地

名古屋市及海東郡遠島村ヲ以テ最モ主ナル地方トシ愛知郡、知多郡内ニモ多少ノ産出アリ

(四) 沿 革

本品ノ製造ハ古クヨリ行ハレ享保年間ニ於テハ技術甚タ巧妙ヲ加ヘタリシト雖モ徳川幕府ノ末葉ニ及ヒ漸ク衰頽セリ
 文政年間名工輩出スルニ及ヒ斯業復興シ漸次盛大トナレリ當時ノ七寶ハ白玉(俗ニガラス粉ト稱セシモ現今ノガラス
 製造原料トハ異ナレリ)ト稱スル陶器用ノ釉藥ヲ以テ製セルモノニシテ之ヲ泥七寶ト呼ヒ未タ甚タ拙劣ノモノナリシ
 カ明治十年ノ頃現今用ヒラレツ、アル處ノ硝子釉藥ヲ以テ製成スルニ至リ斯業ノ一革新ヲナセリ其後製法大ニ進歩シ
 銅生地有線七寶ヨリ漸進シテ無線七寶、省線七寶、伏線七寶等ヲ製出セラル、ニ至リ近年ニ於テハ一層發達シテ銀生地
 ニ透明釉藥ヲ施シタル銀七寶及其模造品ヲ産出シ其技甚タ精巧ヲ加ヘ需要益々増進シ殊ニ海外輸出ノ年々増加スルニ
 伴ヒ斯業甚タ盛大トナリ以テ今日ニ及ヘリ

(五) 製造戸數及職工數 (三十九年)

製造戸數	九五
職工數	三四三

(六) 製 産 狀 況

本品ノ製造ハ皆家内工業ニシテ多數ノ職工徒弟ヲ使用セルモノナシト雖モ名古屋市及海東郡ニ於ケル製造者ハ甚タ多
 數ニシテ就中海東郡遠島村ノ如キハ全村毎戸本品ノ製造ヲナシ一ニ七寶村ノ名稱ヲ有スルノ狀況ナリ而シテ其製品ハ
 京都産ノ如ク上等ノモノニアラスト雖モ其産額ハ遙カニ京都産ヲ凌駕セリ外國貿易ノ開ケシ以來大ニ歐、米人ノ嗜好
 スル所トナリ輸出ノ甚タ好況トナルニ伴ヒ逐年盛大トナリ三十八年ノ如キハ製産其極盛ヲ呈シ當業者ノ語ル所ニヨレ
 ハ名古屋市及遠島村ヲ合シ製造家百六十戸職工六百十八名ノ多キニ及ヒ一ケ年ノ産額亦七十餘萬圓ニ上レリト云フ其
 後粗製濫造ノ結果海外輸出漸ク減退シ製産漸次不振トナリ製造者ハ一般ニ甚タシキ困難ヲ感シ四十年ニ入り他業ニ轉
 スルモノ續出スルニ至リ前途漸ク衰退ノ傾向ヲ呈セリ

(七) 原料ノ需要供給

原料ハ地方ノ商人ヨリ購求ス

(八) 販出額及仕向地

本品ハ大部分神戸、横濱港ヲ經テ英、米、佛、獨其他海外諸國ニ輸出セラル今縣ノ調査ニ係ル最近五ケ年間ノ輸出額
 フ示セハ左ノ如シ

三十五年	三一一、七八〇
三十六年	三五八、五四八
三十七年	二七三、二四九

愛知縣

三十八年
三十九年

二八五、〇〇〇
四〇〇、〇〇〇

(八) 販賣手續及取引慣習

神戸及横濱ニ代理店アリテ製品ハ隨時送付ス代金ハ現品引替ヲ例トス

(九) 製産費及收益ノ比較

三十九年中最も多數ヲ輸出シタルモノニ付之ヲ示セハ左ノ如シ

三寸銀張小輪立一個ニ付

金八十五錢

賣價

金八十一錢

原價

内

金三十九錢

原料代

金四十二錢

製造費

差引

金四錢

利益

(十二) 輸出狀況

輸出品中最も多數ヲ占ムルモノハ花瓶ニシテ皿、小函、香爐、蓋物等室内裝飾品ナリ抑モ本品ハ海外貿易開始セシ以來
歐、米人ノ嗜好ニ投シ次第ニ隆運ニ向ヒ往年巴里大博覽會以來ハ販路一層擴張シテ甚々盛ナルニ至リシカ去ル三十
八年ノ米國「セントルイ」博覽會ニ際シ巴里博覽會ニ味ヲ占メタル當業者ハ競フテ多數ノ出品ヲナサントシ製品ヲ精撰

セサルノミナラス甚々シキハ屑物ヲスラ出品シタリシ結果大ニ弊價ヲ失墜シ賣行甚々少ク全出品ノ十分ノ八ヲ殘存
セシヲ以テ閉會後遂ニ之ヲ投賣スルニ至レリ然レトモ此又失敗ニ歸シ容易ニ賣捌ケサルノミナラス元來本品ハ貴重品
ナルカ故ニ價格ノ廉ナラサルモノト思惟セシ一般顧客ハ此ノ投賣價格ノ非常ナル低價ナルヲ見テ從來價値ナキ本品ヲ
高價ニテ購ヒシハ名古屋商人ノ爲メニ欺カレタリトナシ大ニ顧客ノ惡感情ヲ招キ爾來米國人ハ本品ニ對シテハ殆ント
一瞥ダモ與ヘサルニ至レリ加フルニ其後以太利美蘭博覽會ニ出品シテ又モ同様ノ失敗ヲ繰返シ遂ニ歐米ニ於ケル信用
地ニ墜チ最近ニ在テハ注文殆ト絶ヘ輸出甚々不振トナレリ

(十一) 輸出先ニ於ケル嗜好

米國向ハ概シテ模様其他鮮麗ナルモノ多ク英國向ニ在リテハ「ジミ」ナルモノ多シト云フ

(十二) 荷造法其費用並ニ運賃諸費

其形ニ適セル「サツク」ヘ入レ之ヲ一寸板ニテ造レル半噸或ハ一噸入ノ木箱ニ入レ周圍及箱板ノ繼キ目ニ鐵板ヲ釘付ス
其費用左ノ如シ

金七圓貳拾錢

木箱代

金壹圓拾錢

鐵板代

金參圓貳拾錢餘

荷造諸費

(十三) 販出先ニ於ケル競争品

海外ニ於ケル競争品ハ獨逸品ニシテ器械製ナルカ故ニ價格甚々廉ナリト云フ

(十四) 重ナル製造業者

服部唯三郎

太田善四郎

安藤重兵衛

愛知縣

川口 文左衛門
太田 甚兵衛
糸野 締太郎
兒玉 清三郎

林 小傳治

(十五) 事業上ノ施設

同業組合アリテ斯業ノ改善ヲ圖ルト雖モ其實蹟ノ見ルヘキモノナシ

(八) セメント

(一) 産 額	年 次	數 量	價 額
	三十五年	一〇九、三六五	四〇二、八二八
	三十六年	一一二、三四五	四二四、三八六
	三十七年	九二、四一二	三〇九、五四二
	三十八年	一三三、五〇〇	四九〇、〇〇〇
	三十九年	一三三、〇〇〇	五六四、五〇〇

(二) 主要産地

愛知郡ヨリノ産出多ク渥美郡ニ於テモ之レヲ産ス

(三) 製造場數及職工數 (三十九年)

製造場數	職工數
二	五七三

(四) 製産狀況

本業ハ明治二十三年五月愛知郡ニ愛知「セメント」株式會社ノ起リテ創業セシ所ニ係リ爾來我カ文運ノ進歩ト共ニ本品ノ需要日ヲ逐フテ増進シ漸次進歩發達シ三十一年三河「セメント」會社ノ設立セラル、ニ至リ益々盛大トナリ明治三十五年ニハ海外輸出ヲ開始スルニ至レリ其後日露戰爭開始ノ結果内地ニ於ケル各種土木事業ノ繰延等ニヨリ本品ノ需要著シク減少セシニ加ヘ清國ヘノ輸出亦一時不振ニ陥リタリシヲ以テ三十七年ハ斯業甚ダ不況ヲ呈シタリシモ戰後内外ノ需要回復セシヲ以テ再ヒ盛況トナリ前途益々隆盛ニ向ヘリ

(五) 原料ノ需要供給

原料ハ岐阜縣不破郡赤松町附近ヨリ求ム甚タ豊富ナリト云フ

(六) 製産費及收益比較

壹樽ニ對スル概要ヲ示セハ左ノ如シ

原料及製造費	參閱五十錢
收 益	五十錢

(七) 販出額及仕向地

外國向ハ皆神戸ヲ經テ輸出ス其三十九年ニ於ケル輸出額ハ三萬樽此價格壹萬五百圓ニシテ上海、天津方面及英領古倫母等ヘ仕向ケラル而シテ内地向ニアリテモ各地方ニ販出セラル、モノ鮮カラサレトモ其數明カナラス

(八) 販賣手續及取引慣習

外國向ハ三井物産會社名古屋支店ニ於テ各地ノ製品ヲ買收シ同會社ヨリ海外需要地ヘ輸出ス

(九) 相 場

愛知縣

壹樽ニ付

四圓

二百九十八

(十) 荷造法其費用

樽詰トナス其費用壹個ニ付五十錢ヲ要スト云フ

(十一) 重ナル製造業者

愛知セメント株式会社

三河セメント株式会社

(九) 時計

(二) 産額	年次	數量	價額
	三十五年	一八〇、〇〇〇 ^圓	四五〇、〇〇〇 ^圓
	三十六年	二二六、六五六	五一、八五〇
	三十七年	二一四、八九七	五一五、七五三
	三十八年	二四〇、〇一九	五四〇、〇四一
	三十九年	三八五、三四一	九三六、九一二

(三) 種類

置時計、掛時計ノ二種トス

(三) 主要産地

總テ名古屋市ニ産ス

(四) 沿革

本品ノ製造ハ明治十七年名古屋市ノ林市兵衛ナル者輸入防止ノ目的ニテ創メテ之ヲ製造セルヲ以テ嚆矢トナス當時其製造方法極メテ幼稚ニシテ殆ント手工ニヨリシカ爾來種々苦心ヲ重ネ機械ヲ發明設備シ漸次業務ノ發展ニ努メタルヲ以テ逐年隆盛ニ向ヒ明治二十三、四年ノ頃ヨリ本業ヲ營ム者アルニ至リ日清戰後ヨリ二十一年迄最モ隆盛ヲ極メ東京、大阪等ニモ數多ノ同業者ヲ生スルニ至レリ而シテ其販路ニアリテハ當初ハ僅カニ内地需用ヲ目的トセルニ過キサリシカ三十六年同業組合ノ設立以來同業者大ニ増加シテ産額亦著シク増大シ管ニ輸入ヲ防遏シテ内地需要ニ應スルノ外清國ニ輸出セラル、モノ漸ク増進シ今ヤ産額ノ大部ハ之レヲ海外ニ輸出スルノ盛況ヲ見ルニ至レリ

(五) 製造場數及職工數 (三十八年)

製造場數	拾四ヶ所
職工數	千二百五人

備考 職工數ハ製造所ニ通勤スルモノ、ミヲ掲ケタルモノニシテ時計製造ニ從フ全部ノ職工即チ分業タル外面製造ノ職工ヲ加フルトキハ其數約三倍ニ當ル

(六) 製産狀況

本品ノ製造ハ殆ント電気、石油等ノ動力機ヲ設置セル比較的大規模ノ製造所ニヨリテセラレ只外面函ノミハ分業トシテ多數ノ家内工業者ノ製作スル所ニ係レリ

本業ハ創業以來著シク發達シ殊ニ海外輸出ハ近年急速ノ進歩ヲナシ其製産ノ大部ハ舉ケテ輸出スルノ狀況ニシテ今ヤ斯業ハ頗ル盛況ヲ呈シ居レリ彼ノ三十七、八年戰爭ニ際シテモ其影響ヲ受ケタルコト甚タ少ナク輸出向及内地向トモニ好況ニシテ頗ル繁忙ヲ告ケ三十九年ニ入りテハ一層ノ盛況ヲ呈シ一月ヨリ九月ニ至ルノ間ハ實ニ近年ニ見サルノ好

愛知縣

二百九十九

況ニシテ常ニ注文ニ迫ハレ顧客ノ意ヲ充タシ能ハサルノ有様ナリキ十月以後ニ北清地方ヘノ輸出ノ減少ヲ見タリシモ南清向ハ依然好況ヲ持續シタリシヲ以テ産額前年ニ比シ著シク増加セリ四十年ニ入り此ノ好況ノ稍衰ヘタルカ如キモ是レ一時的ノ變化ニ過キスシテ斯業ノ前途ハ尙益々有望ナリ

(七) 原料ノ需要供給

器械材料タル真鍮及鐵ハ主トシテ大阪ヨリ輸入シ外國用木材枋ノ木ハ北海道ヨリ購入ス

(八) 販出額及仕向地

産額ノ九割以上ハ神戸、大阪及横濱港ヲ經テ海外ニ輸出ス其最近五ケ年間ニ於ケル數額ヲ示セハ左ノ如シ

年次	數量	價額
三十五年	八四、五三三	一九四、九五八
三十六年	一三〇、六二七	三六七、九二九
三十七年	一八二、六六三	四三八、三九一
三十八年	一八五、八九〇	四一八、二五二
三十九年	二七二、〇九三	七四一、五四九

而シテ主ナル輸出先ハ清國ニシテ其他香港、韓國、印度方面ヘ輸出スルモノ亦少ナカラス今三十九年ニ於ケル國別輸出額ヲ示セハ左ノ如シ

國別	數量	價額
支那	一四一、八一〇	三九三、九一一
韓國	一一、三四一	二八、六二五

香港	四八、五八七	一二四、九四二
印度	二、〇四一	六、五四一
海峽殖民地	二八、八六一	七六、八五四
其他	三八、四五〇	一一〇、六七六
計	二七二、〇九三	七四一、五四九

(九) 販賣手續及取引慣習

神戸、横濱 大阪等ニ在留スル清商其他外商ヨリノ注文ヲ受ケテ販賣スルヲ例トシ直接海外ニ輸出スルコトナシト云フ

(十) 相場

中等品一打ニ對スル最近ノ相場ハ左ノ如シ

(イ) 掛時計計	數量	價額
十二吋ノモノ	四十五	四十五圓
十吋ノモノ	三十五	三十五圓
八吋ノモノ	二十八	二十八圓
六吋ノモノ	二十六	二十六圓
(ロ) 置時計計		
二重丸ノモノ	二十八	二十八圓
並丸ノモノ	二十六	二十六圓五十錢

愛知縣

(十一) 輸出狀況

三十五年以來ハ海外ノ需要頗ニ増加シ年々甚ク好況ヲ呈セリ殊ニ日露戰爭當時ヨリ三十九年ニ亘リテハ一層ノ盛況ヲ致セリ只三十九年十月ニ入り北清地方水害ノ爲メ同方面ヘノ輸出ハ頗ニ減少シ引續キ結氷期ニ入りシヲ以テ年内ニ其恢復ヲ見ル能ハサリキ

現今清國ニ於テ最モ好評ヲ博セルハ置時計ニシテ圓頭及角頭ノ二種トシ次テ掛時計トス共ニ時ヲ計ルコト勿論ナリト雖モ中流以上ニ於ケル室内裝飾品トシテ亦缺クベカラサルモノニ屬シ本品ノ價格低廉ニシテ外觀ノ亦比較的美麗ナル點ヨリ彼等ノ嗜好ニ適シ年々其需要ヲ増進シツ、アリ其他韓國及印度方面ヘノ輸出モ亦世ノ進運ニ伴ヒ逐年増加ノ傾向ヲ呈セリト云フ

(十二) 荷造法其費用並ニ運賃諸費

掛時計ハ普通品ニアリテハ一個ノ箱ニ六個ヲ置時計ハ一個毎ニ小箱ニ入レ六個ヲ以テ一梱トナシ釘付シテ更ニ掛繩ヲ施ス輸送ハ大阪神戸ヘハ汽車横濱ヘハ汽船使ニヨル左ニ一打(二梱)ニ對スル荷造費用及運賃ヲ掲ケン

(イ) 荷造費

外箱(荷箱二個)

壹圓參拾五錢

包裝紙及繩代

拾壹錢

荷造諸雜費

拾貳錢

計

壹圓五拾八錢

(ロ) 運賃

大阪マテ

四拾貳錢

神戸マテ

六拾錢

横濱マテ

七拾貳錢

(十三) 販出先ニ於ケル競争品

米國品及獨逸品トス米國品ハ高價ナルモ機械堅牢ニシテ使用久シキニ耐ヘ最モ信用アリ獨逸品ハ價格廉ナルヲ以テ相當需用アルカ如ク共ニ本品ノ勁敵タリト云フ

(十四) 長所缺點及改良スヘキ要點

近時漸ク良品ヲ出スニ至リシモ尙意匠等ニ於テ外國品ニ劣ル所アリ尙塗リ方ニ意ヲ用ヒ下部硝子板ノ繪模様ヲ美麗ナランメ時報鈴音ヲ一層清朗ナラシムルヲ要ス

(十五) 重ナル製造業者

林時計製造所

愛知時計製造株式會社

尾張時計株式會社

ハアトエツチ精工所

水野時計製造所

明治時計株式會社

神谷時計製造所

水谷時計製造所

(十六) 事業上ノ施設

明治三十六年同業組合設立以來組合ハ検査員ヲ常置シテ製品ハ一品毎ニ之ヲ檢シ常ニ改良發達ヲ圖リ居レリ縣ハ三十九年度ニ於テ三百圓ヲ交付シテ其施設ヲ補助セリ

(十) 燐寸

(一) 産額	年次	數量	價額
	三十五年	四二、〇二二、七二三	九七一、二〇八
	三十六年	三、八一九、六六五	七七四、〇一四
	三十七年	八、五六〇 <small>噸</small> 五、九〇六、一六六 <small>打</small>	一、二九八、八〇五
	三十八年	七一、〇〇〇 <small>打</small> 五九四、〇四一 <small>打</small>	一、〇二八、九八三
	三十九年	六一、八二一 <small>噸</small>	七九二、〇三四

(二) 主要産地
名古屋市最モ主ナル産地ニシテ愛知、西春井及海東郡ヨリ産出ス

(三) 沿革

本業ハ明治十二年名古屋市ニ於テ始メテ之ヲ開始セリ當時ハ一日僅カニ一噸未滿ノ製造ヲナスニ過キサリシカ漸次盛大トナリ明治二十年ノ頃ハ同業者九名ヲ出シ二十五年ニ至リ十四五名ノ斯業者アルニ至レリ此頃ヨリ軸木並削用獨逸式器械ヲ使用シタリシヲ以テ著シク進歩シ三十一年ニ於テハ三十二名ノ同業者ヲ出シ益々發達シテ今日ニ至レリ

(四) 製造戸數及職工數 (三十九年)

製造戸數	三五戸
職工數	四三六人
男	一、一〇〇人
女	一、五三六人
計	

(五) 製産狀況

近年諸原料及職工賃銀ノ騰貴甚タシク事業ノ經營漸ク困難トナリ是ヲ以テ先年日本燐寸業ノ合同説起リ三十八年ノ如キハ是レカ爲メ一時甚タ活氣ヲ添ヘタリシモ其後合同ノ困難ニシテ容易ニ實行セラレサルヲ以テ再ヒ不況ニ陥リ殊ニ戦後物價ノ昂騰一層甚シク原料及工賃亦著シク昇騰セルニ拘ハラハ製品ノ價格ハ之レニ伴ハサルヲ以テ三十九年以降ハ内地向及外國向共ニ一般ニ不況ヲ呈セリ

(六) 原料ノ需要供給

原料中藥品ハ外國品ヲ用ヒ神戸、大阪ヨリ之ヲ輸入ス其他ノ原料即チ木地、軸木、用紙等ハ總テ内國品ヲ用フ

(七) 販出額及仕向地

本品ノ縣外販出額ハ詳カナラサレハ三十九年前五ヶ年間ニ於ケル海外輸出額ヲ示セハ左ノ如シ

年次	數量	價額
三十五年	一、二五〇 <small>噸</small>	五三、二五六
三十六年	一、八〇〇	三八、七〇〇
三十七年	五、四〇〇	一一一、一〇〇
三十八年	四、九〇〇	一〇七、八〇〇
三十九年	三、六〇〇	七七、四〇〇

輸出品ハ殆ント大阪港ヲ經テ清國ニ仕向ケラレ時トシテハ四日市港ヨリ輸出セラル、コトアリ而シテ清國ニ於テハ天津、上海、青島、芝罘等ニシテ三十九年ニ於ケル其地方別輸入額ヲ示セハ左ノ如シ

地方別	數量	價額
天津	九〇〇 <small>噸</small>	一九、三五〇 <small>圓</small>

愛知縣

上 海	七二〇	一五、四八〇
青 島	一、〇八〇	二二、二二〇
芝 罘	九〇〇	一九、三五〇
計	三、六〇〇	七七、四〇〇

内地向品ハ縣外各地ニ販出セラル、モ其額及仕向先等詳カナラス

(八) 販賣手續及取引慣習

輸出品ハ總テ大阪又ハ神戸在留ノ清商ニ賣却ス而シテ其代金授受ハ現品ト引替ニ行ハル、ヲ普通トス

(九) 輸 出 狀 況

輸出品ハ主トシテ黃燐製小ボスト稱スルモノナルモ其一ケ年ニ於ケル輸出額ハ甚ク少ナク全産額ノ一割ニ達セス去ル三十七年及三十八年ノ兩年ニ在テハ注文多ク相當ノ好況ヲ呈シ價格ノ如キモ一函(千二百打入)二十三、四圓ヲ唱ヘ産額ニ對シ一割以上ノ輸出ヲ見タリシモ三十八年北清地方ノ解氷後ヨリ次第ニ不振ニ陥リ三十九年ニ入リテハ不況更ニ甚クシク遂ニ同年ニ於ケル輸出額ハ前年ニ比シ著シク減少セリ要スルニ本品ノ海外輸出ハ既往ニ於ケル進歩甚ク遅緩ナルノミナラス現今ニ於ケル狀況ヨリ察スルニ將來格別ノ發達ヲ見ル能ハサルヘシ

(十) 荷造法其費用並ニ運賃

二百打ヲ詰メタル亞鉛罐六個ヲ木箱ニ入レ一函トナス木箱ノ外部ハ鐵帶ニテ卷付クルヲ例トス今一函ニ對スル荷造費用及運賃ヲ示セハ左ノ如シ

(イ) 荷 造 費 用

亞鉛罐代

二圓三四十錢

木箱代

一圓三十錢内外

(ロ) 運 賃

大阪マテ

六十五錢

大阪ヨリ青島へ

二圓十五錢

全天津へ

二圓三十錢

全芝罘へ

三圓十五錢

全上海へ

一圓八十錢

(十一) 重ナル製造業者

前 榮 合 資 會 社

愛知燐寸合資會社

杉浦燐寸合資會社

渡邊燐寸製造會社

(十二) 事業上ノ施設

縣下一圓ヲ地區トセル同業組合アリテ事業ノ發展ヲ圖ルアリ縣ニ於テモ亦之レカ監督獎勵ニ努メ居レリ

(十二) 麥稈及經木眞田

(一) 産 額	年 次	數 量	價 額
	三十五年	一、五八九、〇二五 _卅	五五三、三一〇 _卅
	三十六年	一、九〇六、六一九	五九七、三〇〇

愛知縣

三百七

三十七年 一、三三三、五〇〇 四四三、三七三
 三十八年 一、〇四六、八七〇 三五三、六三六
 三十九年 一、五二六、三八〇 三二五、二五九

(二) 主要産地

愛知郡ヲ第一トシ名古屋市及海東、知多ノ諸郡トス

(三) 沿革

本業ノ創始ハ明治十六年ニシテ爾來年々遂テ盛大トナリ當業者年々増加シテ二十年ノ頃ハ一ヶ年約二三萬圓ヲ生産スルニ至レリ其後粗製濫造漸ク甚クシテ斯業大ニ衰頽セリ二十九年組合ヲ組織シテ粗製濫造ノ弊ヲ矯正スルノ途ヲ講シタル以來漸次市場ニ信用ヲ高メ海外ヨリノ注文年々増加シ三十一年同業組合ヲ組織シ製品検査ヲ勵行セシ以來著シク盛ントナリ以テ今日ニ及ヘリ

(四) 製造戸數及職工數(三十九年)

製造戸數 三、四〇九戸
 職工數(男) 三一四人
 (女) 一〇、一六四人
 計 一〇、四七八人

(五) 製産狀況

本業ハ近來衰退ノ兆ヲ呈シ産額年々減少セリ殊ニ三十八年以後ニ於テ更ニ甚シキヲ見ル即チ三十八年ニ於ケル産額ハ近年ニ見サルノ數ヲ示シテ三十餘萬圓ニ降レリ是レ麥稈真田ノ著シキ減産ニ基キシモノナリ同年ハ新稈刈入レ時期ニ際シ霖雨ノタメ麥稈ノ過半ハ腐敗シ且其腐敗ヲ免レタリシモノモ野晒法ノ行ハレサリシカタメ製品ニ光澤ヲ缺キタル

カ如キ特別ノ事由アリシニ因レリ然レトモ尙一方粗製濫造ノ弊モ亦盛ンニ行ハル、ノミナラス同業者ノ競争烈シキヲ以テ市價ハ益々低落シ海外輸出ハ取引危険ノ爲メ次第ニ不振ニ陥リ製造者ニ在テモ收益乏シキカ爲メ漸次製造ヲ減少スルニ至レルカ如キ慢性的原因ノ存スルカ故ニ三十九年ノ新稈採收ノ時期晴天打續キ優良ノ原料ヲ得タルニ拘ハラズ輸出尙引續キ不振ニシテ斯業ハ益々不況ヲ呈シ前年ニ比シ尙其産額ヲ減少セリ加フルニ近時經木真田ノ衰退ハ一層甚シク本業ノ前途ハ望ミ甚タ少ナキカ如シ

(六) 原料ノ需要供給

麥稈ハ主トシテ縣下ニ産スルモノヲ用ヒ尙滋賀、神奈川、長野ノ三縣下ヨリ買入レ使用ス經木ニアリテハ東京、神奈川、兵庫地方ヨリ適宜買入ル、モノトス

(七) 製造費及收益ノ比較

原料	原料代	工賃	賣買價格
五 角	一〇〇	一〇〇	二四〇
大 七 角	一〇〇	〇九〇	二一〇
九 四 菱	〇八〇	〇八〇	一八〇

(八) 販出額及仕向地

本品ノ海外輸出額ハ左ノ如シ

年 次 數 量 價 額
 三十五年 一、五七七、七六〇_元 五〇四、八八三_円
 三十六年 一、八二七、八九五 五八五、八八〇

愛知縣

三十七年 一、六九六、〇〇〇
 三十八年 九三八、八〇〇
 三十九年 一、三〇五、六九〇

海外輸出港ハ神戸、横濱ノ兩港ニシテ其輸出高ノ割合ハ神戸九分横濱一分トス而シテ輸出先ハ英、米、獨、佛及濠州、白耳義、埃太利、伊太利、清國、香港、比律賓、瑞西、加奈陀、韓國等トス
 内地向販出額及仕向地ハ詳カナラス

(九) 販賣手續及取引慣習

普通神戸、横濱兩港ニ於ケル外國商館ヨリ地方開屋業ニ注文シ更ニ仲買業者ノ手ヲ經テ製造家ニ製作セシメ製品ヲ問屋ニ纏メテ外商ニ販賣ス

(十) 相場

最近神戸ニ於ケル取引相場ヲ示セハ左ノ如シ
 五 角 反ニ付 貳拾五錢
 大 七 角 全 貳拾貳錢
 九 四 菱 全 拾八錢

(十一) 輸出先ニ於ケル嗜好並ニ其變遷

三十七年ニ於ケル製品ハ經木真田、麥稈真田共總シテ巾廣キモノ流行シ就中經木、麥稈ノ交打物大ニ輸出セラレタルモ其後巾狹キモノ流行シ經木、麥稈ノ交打真田ハ注文僅少トナレリ

(十二) 輸出先ニ於ケル用途

經木真田ハ種々ノ色ニ染色シ婦人帽子ニ製造セラレ麥稈真田モ亦男女用帽子ニ製セラルモノナリ

(十三) 荷造法其費用並ニ運賃諸費

荷造ハ内部ヲ新聞紙ニテ包ミ上ヲ莖包トナシ凡ソ百五十反ヲ以テ一捆ト爲ス其荷造費ハ約參拾五錢ヲ要スト云フ輸送ハ概テ熱田驛ヨリ汽車便ニヨリ神戸、横濱ノ兩港ニ搬出セラル、モノニシテ其運賃ヲ舉クレハ左ノ如シ

熱田停車場ヨリ神戸迄真田尺立方(七折)ニ付金五錢

熱田停車場ヨリ横濱停車場迄全上金七錢

但真田ノ一捆ハ凡ソ重量百九十九斤ナリ

(十四) 販出先ニ於ケル競争品

伊太利産經木真田及支那産麥稈真田ハ共ニ我カ競争品ナリ伊太利産經木真田ハ我ニ比シ價格高キモ品質意匠共ニ卓越セリ支那産麥稈真田ハ價格廉ナルモ重量重クシテ我カ製品ニ及ハス

(十五) 事業上ノ施設

重要物産同業組合法ニヨル組合アリテ製品ハ每反之ヲ検査シ粗製濫造ノ弊ヲ矯正シ製品ノ改良ヲ計レリ縣ニ於テモ之ニ年々五百圓ヲ交付シテ其施設ヲ補助セリ

(三) 扇子

(一) 産額

年次

數量

價額

三十五年

四〇〇、〇三五

二五五、〇二一

愛知縣

三十六年	四、〇〇〇、〇四〇	二〇〇、〇五二
三十七年	一、七七九、八〇〇	一三〇、六五七
三十八年	—	三二五、八〇〇
三十九年	九、八二三、〇〇〇	三二五、〇四五

(二) 主要産地
名古屋市ヲ第一トシ海東郡之ニ亞ク

(三) 沿革

本縣ニ於ケル扇子ノ製造ハ遠ク寶曆年間ノ創業ニ係リ年ト共ニ發達シ今ヤ縣下特産物ノ一トシテ數ヘラル、ニ至レリ

(四) 製造戸數及職工數(三十九年分)

製造戸數	一五五戸
職工數	一、一〇八人

(五) 製造狀況

本業ハ明治三十二、三年頃ヨリ一層ノ發達ヲナシ海外ノ需要ハ益々増進シテ年々産額ノ大部ヲ輸出シ逐年盛大ニ向ヘリ即チ明治三十二年ニ於テハ二十一萬餘圓ヲ産セシニ三十九年ニアテハ三十二萬餘圓ヲ生産シ僅ニ五六ヶ年間ニ十餘萬圓ノ激増ヲナシ今ヤ京都ニ次クノ盛況ヲ呈セリ而シテ去ル三十七八年日露戰役ニ際シテモ海外輸出ノ相應ニ行ハレタルニ加ヘ内地向扇子ハ恤兵部ニ需要セラタル所多ク甚々繁忙ヲ告ケタリ戰後内外ノ需要益々多ク殊ニ清國向注文續々來リ引續好況ヲ呈セシカ三十九年下半期ニ於テ工賃原料騰貴ノタメ注文約定後相場ノ變動シタル故ニ當業者ハ一般ニ困難ヲ感シ多少生産ヲ減セリ近時同業者間ニ競争起リ漸次價格ヲ低廉スルノ傾キアルハ斯業ノ前途ニ對シ甚々憂フ

(キ) 現象ナリトス

(六) 原料ノ需要供給

原料ハ總テ地方産ノモノヲ用フ

(七) 製造費及收益ノ比較

一本貳錢ノモノニ付記載スレハ左ノ如シ

原料	七厘貳毛
製造費	壹錢八毛
收益	貳厘

(八) 販出額及仕向地

三十九年前五ヶ年間ニ於ケル海外輸出額ヲ示セハ左ノ如シ

年次	數量	價額
三十五年	一〇、〇九〇、一〇〇 _本	二一八、七〇七 _町
三十六年	八、四二三、五〇〇	二〇〇、六〇五
三十七年	八、五六〇、〇〇〇	二〇三、三〇〇
三十八年	八、七八〇、〇〇〇	二〇四、三〇〇
三十九年	八、二二三、〇〇〇	二二三、〇〇〇

外國向ハ神戸及横濱港ヲ經由シ主トシテ米國ニ輸出セラル左ニ三十九年ニ於ケル國別輸出額ヲ掲ケン

國別	輸出額
米	一五六、一〇〇 _町

愛知縣

支那	一二一、三〇〇
佛國	一二一、三〇〇
其他	一二一、三〇〇
計	二二三、〇〇〇

内地向ハ全國各地方ニ販出セラルレトモ其額詳ナカラス

(九) 販賣手續及慣習

外國向ハ概テ在神戸外國商館ヲ經テ輸出スルモノニシテ現品及代金ノ授受ハ凡テ神戸ニ於テ行フヲ例トス

(十) 相場

平均一本貳錢内外

(十二) 輸出先ニ於ケル嗜好並ニ其變遷

米國ニアリテハ三十五年ハ大形花模様ヲ付セルモノ多ク賣行キシカ翌年ニ於テハ扇面各所ニ切抜ヲ設ケ絹又ハ「レ」ス」ヲ張リタル所謂透シ模様物多カリシ此ノ外三十五年ニハ八寸物多カリシニ三十六年ハ七寸五分物ノ賣行宜カリシカ如シ要スルニ海外需要地ニ於ケル嗜好ハ多ク裝飾品ニ供セラレ單ニ採涼ノ具トシテ使用スルモノハ甚タ僅少ナリ骨數ハ二十本ヨリ三十本位寸法ハ六七寸ノモノヲ好メリ紙ハ概シテ洋紙ニシテ畫ハ概ネ花鳥ヲ好ム

(十二) 輸出先ニ於ケル用途並ニ需要程度

海外需要地ニ於テハ採涼ノ具ヨリモ寧ロ裝飾品ニ供セラルル而シテ清國人ハ扇子ヲ愛スルコト殊ニ甚シク夏季ハ一般ニ之ヲ用フルノ習慣ナルカ故ニ下流社會ニ於テモ高價ノ物ヲ携帯スルノ風習アリ

(十三) 荷造法其費用並ニ運賃諸費

十二本ヲ小箱ニ入レ十本ヲ大箱ニ詰メ鐵帶ヲ附ス其費用九十五錢ヲ要ス而シテ神戸行配達及運賃ハ(一才六錢五厘)横濱行ハ普通大貨物運賃(五十才四錢五厘)ニシテ神戸運送ハ特約借切汽車ヲ以テス

(十四) 販出先ニ於ケル競争品

西班牙品、獨逸品アリ孰レモ上等品ニシテ價格頗ル高シト云フ

(十五) 重ナル製造業者

高橋合名會社	中村扇子合名會社
水野彦吉	井上茂兵衛
吉川安次郎	幸丸宣雄

(三) 提灯

(一) 産額	年次	數量	價額
(二) 主要産地	三十五年	二二六、三九四	一七四、五一九
	三十六年	二三八、六五二	一六四、二二九
	三十七年	二、一九五、三四九	二一九、四九三
	三十八年	?	二五〇、四六三
	三十九年	六、三八九、七五三	二七七、五九五

愛知縣

名古屋市最モ主ナルモノトシ愛知、額田、海東、寶飯、幡豆、丹羽ノ諸郡之ニ次キ其他ノ諸郡ニ於テモ多少ノ産出アリ

(三) 製造戸數及職工數 (三十九年)

製造戸數 二六一戸
職工數 一、六五一八

(四) 製産狀況

本品ハ古ヨリ製造セラレ相當ノ産額アリシト雖モ岐阜産ニ壓セラレ其名未タ世ニ顯ハレス然レトモ近來製品ノ益々改良セラレル、ニ至リ三十五年ノ頃ヨリ海外ノ需要漸ク増加シ益々盛大トナレリ其後三十六年上半期ニ於テハ輸出不振ニ加ヘ内地モ初夏ノ候降雨多ク爲メニ賣行甚ク宜シカラサリシカ下半年期ニ入り米作豊穰ナリシヲ以テ内地需要多ク歐、米向亦相當ノ商況ナリシヲ以テ産額ノ著シキ減少ヲ見サリキ三十七及三十八ノ兩年ハ日露戰爭中ナリシニモ拘ハラス輸出向相應ノ賣行キアリシノミナラス戰勝祝賀ノタメ内地需要著シク増加シタリシヲ以テ頗ル盛況ヲ呈セリ爾來引續キ好況ニシテ前途亦益々發展ノ趨勢ニアリ

(五) 原料ノ需要供給

原料品ハ總テ地方産ニシテ當業者ハ隨時地方商人ヨリ之ヲ購入ス

(六) 製産費及收益ノ比較

一個ニ付
賣價 拾五錢
原料及製産費 拾四錢

差引收益

壹錢

(七) 販出額及仕向地

外國向ハ大阪、神戸及横濱港ヨリ輸出セラルル今三十九年前五ヶ年間ニ於ケル輸出額ヲ表示スレハ左ノ如シ

年次	數量	價額
三十五年	六〇〇、〇〇〇 ^噸	三〇、〇〇〇
三十六年	九九五、〇〇〇	四五、〇〇〇
三十七年	八五〇、五〇〇	四二、五二六
三十八年	八九三、〇二五	四四、六五〇
三十九年	?	四五、八〇〇

輸出先ハ米、英、佛及清國等主ナルモノトス左ニ三十八年ニ於ケル輸出國別表ヲ掲ケン

仕向地	數量	價額
英國	一七八、六〇〇 ^噸	八、九三〇
米國	一九三、四八九	九、六七四
佛國	一七八、六〇〇	八、九三〇
清國	一一九、〇七〇	五、九五四
新嘉坡	七四、四二〇	三、七二〇
其他	一四八、八四四	七、四四二
計	八九三、〇二五	四四、六五〇

(八) 販賣手續及取引慣習

愛知縣

輸出品ハ阪、神及横濱ノ外國商館ニ豫メ見本ヲ示シテ注文ヲ待ツ商館ハ本國ニ照會シ五、六ヶ月ノ後注文シ來ルヲ例ト
ス代金ハ各港着荷ノ後數日ニシテ支拂ヲ受クルモノトス

- (九) 相場場
 - 内地向ハ 一個 壹錢五厘乃至拾參錢
 - 外國向ハ 一個 參錢乃至拾五錢

(十) 輸出先ニ於ケル嗜好並ニ其變遷
内地向ハ數年以前迄ハ人物ノ襟ヲ好ミシカ現今ハ花鳥ニシテ美麗ナルヲ好ムノ風アリ外國向ニアリテモ花鳥繪ノ廉價ナルモノヲ好ムト云フ

(十一) 輸出先ニ於ケル用途並ニ需用程度
海外ニ於テハ主トシテ祝宴、祭典等ノ時夜間裝飾用ニ供セラル而シテ價格低廉ニシテ外觀美麗ナル爲メ需用漸次増進セルカ如シ

(十二) 荷造法其費用並ニ運賃諸費
品種ニヨリ大小ノ差アレトモ普通二百個小六百個(十才内外)ヲ一箱入トナス箱ハ釘付ノ上繩掛トス其費用一箱ニ付金壹圓ヲ要シ産地ヨリ輸出港ニ至ル運賃ハ左ノ如シ

横濱	汽車賃	一才ニ付	七錢五厘
神戸	全	全	五錢
大阪	全	全	三錢

(十三) 重ナル製造業者

中村合名會社
鈴木寅松
中善合資會社

(四) 刺繡

(一) 産額	年次	産額
(二) 種類	三十五年	二六九、〇三六
	三十六年	四二五、七九〇
	三十七年	四四一、五〇四
	三十八年	四九三、三四〇
	三十九年	四九五、二九六

(三) 主要産地
ストロップ掛、椅子掛、テーブル掛、ハンカチーフ等トス
名古屋市ハ最モ主ナル産地ニシテ丹羽、海東、南設樂、西春日井ノ諸郡亦多少ノ産出アリ

(四) 製造戸數及職工數 (三十九年)
製造戸數 六一戸
職工數 八三九人
愛知縣

(五) 製産狀況

本業ハ明治十四年始メテ起リシカ以來非常ノ速力ヲ以テ發達シ製産漸次増大ニ赴キ日露戦争後ニ及ヒ一層ノ好況ヲ呈シタリ而シテ三十九年二、三、四ノ三ヶ月間ノ如キハ露國向無稅ナリシカタメ非常ノ盛況ヲ見タリシト雖モ其後ニ至リ稍々沈靜ノ姿ニ陥リタリ且ツ又近時一般ニ粗製濫造ノ弊ヲ生シ前途衰退ノ傾向ヲ示シ來リタルヲ以テ此弊風ヲ矯正シ斯業ノ振興ヲ圖ラント欲シ今ヤ刺繡同業組合ノ設立手續中ナリト云フ

(六) 原料ノ需要供給

本品ノ原料ハ多ク羽二重及縹子ヲ用フ

(七) 製産費及收益ノ比較

歩合ヲ以テ示セハ大要左ノ如シ	
原料費	五割五分
製産費	四割
收益	五分

(八) 販出額及仕向地

本品ハ大部分海外ニ輸出スルモノニシテ總テ神戸、横濱港ヲ經由ス今三十九年前五ヶ年間ノ輸出額ヲ示セハ左ノ如シ

年次	輸出額
三十五年	二四三、〇〇〇 ^円
三十六年	一六〇、〇〇〇
三十七年	一七〇、〇〇〇

三十八年	四二五、〇〇〇
三十九年	三二〇、〇〇〇

輸出先ハ米國ヲ以テ其主ナルモノトシ露西亞、印度、濠洲、英國其他ヘモ多少ノ輸出アリ左ニ三十九年ニ於ケル國別輸出額ヲ掲クレハ

國別	輸出額
米國	一一〇、〇〇〇 ^円
露國	一〇〇、〇〇〇
印度	三〇、〇〇〇
濠洲、英國、支那、其他	七〇、〇〇〇

(九) 販賣手續及取引慣習

全輸出額ノ約十分ノ二ハ在留外國人ヨリ注文ヲ受ケテ販賣スルモノニシテ其他ハ在横濱又ハ神戸ノ外國商館ノ依頼ニヨリ加工スルモノナリ而シテ是等ハ直接商館ヨリ受クルモノト仲買商人ノ手ヲ經ルモノトアリ

(十) 相場

手巾一打ニ付	參圓乃至五圓
上等	貳參拾錢
下等	
テーブル掛一打ニ付	壹圓乃至四圓
上等	

愛知縣

下等

貳拾錢

(十一) 輸出狀況

輸出ハ毎年大差ナク概シテ好況ト稱スルヲ得ス而シテ其種類ハ手巾ヲ第一トシ煖爐掛之ニ亞ク今試ニ其割合ヲ示セハ手巾四分、煖爐掛三分、テーブル掛、枕掛、雜種各一分位ナラン

(十二) 輸出先ニ於ケル嗜好並ニ其變遷

手巾、煖爐掛、テーブル掛、ウエスト、日本形衣服、羽二重等ハ別段變化ヲ生セサルモ、リンチン生地、ハ増加セルカ如シ此ノ他意匠又ハ圖案等ニ至リテハ著シキ變化ナシ

(十三) 荷造法其費用並ニ運賃

油紙包トシ更ニ其上ヲ澁紙ニ包ミ繩掛トナス大小一定セサルモ平均凡ソ一包ニ付五拾錢ヲ要ス
運送積車積ニシテ速達便トス目方五十斤ニ付百哩迄金四錢、百哩以上ハ五十哩若クハ五十哩未滿ヲ増ス毎ニ五錢ヲ増ス

(十四) 重ナル製造者

鶴	飼	清	吉	高	木	幾	次	郎	
佐	出	桂	次	郎	上	田	源	治	
杉	山	竹	次	郎	山	本	賢	次	郎

(十五) 漆器

(イ) 普通漆器

(一) 産額

年次	産額
三十五年	二五七、四〇五
三十六年	二〇六、七六七
三十七年	二二六、〇五〇
三十八年	二〇三、四五〇
三十九年	一六一、一六〇

(二) 種類

輸向ノ主ナル品種ハ盆類、小箱類、額及寫真椽、鏡臺、箱類等ニシテ内地向ハ膳、碗、重箱等多シ

(三) 主要産地

名古屋市最モ多ク之ヲ産ス其他額田、北設樂郡等亦産額少カラス

(四) 製造戸數及職工數 (三十九年)

製造戸數	二二五戸
職工數	四五五人
男	一二人
女	四六七人

(五) 製産狀況

本品ハ古來名古屋市ノ特産ナリシカ近來郡部ニ於テモ亦之ヲ製造スルモノ漸ク多キニ至レリ而シテ製品ハ多ク内地向ナルカ故ニ三十六年ヨリ三十七年上半年ニ亘ルノ間ハ内地經濟界ノ不振ナリシ結果斯業亦頗ル悲境ニアリシカ三十七

年下半期ニ入り漸次景氣ヲ挽回シ來リ三十八年ニ在テハ概シテ好況ヲ見タリシガ三十九年ニ入り再ヒ賣行宜シカラサ
リシ爲メ前年ニ比シ稍々製産ヲ減スルニ至レリ

(六) 製産費及收益ノ比較

重箱一組ニ付	貳圓
賣價	壹圓八拾錢
原料及製造諸費	貳拾錢
差引收益	拾五錢
益一個ニ付	拾參錢五厘
賣價	壹錢五厘
原料及製造諸費	
差引收益	

(七) 販出額及仕向地

内地各地方ニ販出セラル、モノ少ナカラサレトモ其數明カナラス

外國向ハ横濱、神戸及大阪港ヲ經テ歐、米及清韓地方ニ輸出セラル其三十九年前五ヶ年間ニ於ケル輸出額ハ左ノ如シ	産額
年次	
三十五年	三五、〇〇〇圓
三十六年	二九、〇〇〇
三十七年	四〇、〇〇〇

三十八年
三十九年

四八、〇〇〇
一五、〇〇〇

(八) 販賣手續及取引慣習

海外輸出ニアリテハ總テ横濱、神戸等在留外商ヨリ直接ニ或ハ地方商人ヲ經テ注文ヲ受ケ之ヲ販賣スルモノトシ未タ
直輸出ヲナスモノナシ代金ハ荷着ノ上送金ヲ受クルヲ普通トス

(九) 相場

主ナルモノ一、二ニ付之ヲ示セハ左ノ如シ	
重箱一組ニ付平均	約貳圓
盆類一個ニ付平均	約拾五錢

(十) 輸出先ニ於ケル嗜好

歐、米ニ於テハ概シテ花鳥模様ノモノヲ好ミ清國ニ在テハ山水花鳥ヲ好愛シ人物繪ノ如キハ一般ニ嗜好ニ投セサルカ
如シ

(十一) 荷造法其費用並ニ運賃諸費

品種ニヨリテ大小一定セサルモ六分或ハ八分ノ縦板ヲ以テ堅固ナル外國ニ入レ釘付ケトナシ更ニ繩掛又ハ鐵帶ヲ施ス
其費用一捆ニツキ概畧貳圓貳拾錢内外ヲ要スト云フ而シテ名古屋ヨリ各輸出港ニ至ル運賃諸費ハ大略左ノ如シ

一 捆(約十貫目)

大阪マテ	三十三錢
神戸マテ	四十三錢

愛知縣

横濱マテ

六十錢

(十二) 重ナル製造業者

黒田 茂助	黒田 忠讓	成田 久助
水谷 重兵衛	宮地 太兵衛	

(一) 産額

年次	數量	價額
三十五年	九六五、一〇二	一一〇、九八七
三十六年	九八三、四六三	一〇八、一八〇
三十七年	七三六、六〇二	七七、三四三
三十八年	九七三、七八〇	一一一、九九七
三十九年	八七六、一五〇	一〇四、五二〇

(二) 主要産地

名古屋市

(三) 沿革

本業ノ濫觴ハ今ヲ去ル百三十餘年前安永年中尾張藩敷寄屋係葉某ノ平利休色黒頭丸銀ボカシヲ發明製造セシニアリ
 其後同藩中小鍛家族ノ内職トシテ盛ンニ製出セラレ商人之レカ販路ノ擴張ニ努メタリシヲ以テ漸次其産額ヲ増加シ明
 治初年ノ頃ハ甚タ盛大トナリシカ其後粗製ニ流レタル結果漸ク衰退ニ赴カントセシヲ以テ同業者相集リテ組合ヲ組織

シ是等ノ弊風ヲ矯正シ熱心販路ノ擴張ヲ圖リタレハ再ヒ盛運ニ向フヲ得タリ今ヤ内地各地ニ需要セラル、ノミナラス
 布哇、韓國、北清等ノ各地方ヘモ輸出セラル、ニ至レリ

(四) 製造戸數及職工數 (二十九年)

製造戸數	一八戸
職工數	六九人
男	一六人
女	八五人
計	八五人

(五) 製産狀況

既往二、三年間ノ狀況ヲ見ルニ三十七年ハ日露戦争ノ爲メ斯業大ニ不振ニ陥リ製造者ハ申合セテ製産ヲ制限シタルカ
 故ニ著シク産額ヲ減セリ三十八年ニ入り市況漸次回復シ二月同業者ハ製造限定ノ協約ヲ解クニ至リ製産漸ク殷盛ニ向
 ヒ同年下半年期ヨリ三十九年上半年期ニ亘ルノ間ハ賣行宜シク甚タ好況ヲ呈セシカ三十九年下半年期ニ入り漸次不況ニ陥リ
 シヲ以テ前年ニ比シ稍々其産額ヲ減少セリ

(六) 原料ノ需要供給

竹ハ苦竹ヲ上等品ニ眞竹ヲ下等品ニ用フ共ニ美濃、三河、尾張、遠江、豊前、豊後、伊豫、土佐ヨリ仰ク
 漆ハ上朱合、上花漆ヲ上等トシ中朱合、中花漆ヲ下等トス三河、奥羽地方及越前ヨリ輸入ス
 繪具ハ三興朱、大興朱(南清地方産)、石黄(越後産)、青漆(名古屋産)、紅殻(中國産)、松煙(紀伊、大和、伊勢、土
 佐産)、梨地粉(京都産)ヲ用フ

(七) 製産費及收益比較

愛知縣

百袋ニ對スル大要ヲ示セハ左ノ如シ

内地向	賣 價	十六圓
	原料及製造諸費	十三圓
	差引 收益	三圓
輸出向	賣 價	十七圓
	原料及製造費	十三圓五十錢
	差引 收益	三圓五十錢

(八) 販出額及仕向地

産額ノ大部ハ縣外ニ販出セラル、ト雖モ其額明カナラス左ニ只海外輸出額ノミヲ掲ケン

年 次	數 量	價 額
三十五年	一三二、三四七	一九、四三二
三十六年	一三七、六九〇	二四、五〇九
三十七年	一二三、九一七	二一、九三三
三十八年	一三三、四八三	二三、八五八
三十九年	一二一、八〇〇	二一、五五八

外國向ノモノハ神戸、大阪及横濱港ヲ經テ清、韓及布哇ニ輸出セラル、モノニシテ三十九年ニ於ケル是等諸國ヘノ輸

出額ヲ示セハ左ノ如シ

國 別	數 量	價 額
韓 國	七八、三〇〇	一三、八五九
布 哇	三四、八〇〇	六、一五九
清 國	八、七〇〇	一、五四〇
計	一一一、八〇〇	二一、五五八

(九) 販賣手續及取引慣習

本品ノ輸出取引ハ毎年五、六、七及十一、十二月最モ盛ンニ行ハレ普通神戸、大阪、横濱ニ於ケル本邦雜貨商ノ手ヲ經テ輸出セラル、モノニシテ多クハ是等商人ヨリ注文ニ來ルモ時トシテ見本ヲ送リテ其注文ヲ待ツコトアリ而シテ韓國向ニアリテハ同地商人ヨリ直接注文ヲ受クルコトアリト云フ代金ハ大抵六十日以内ニ受取ルモノニシテ韓國へ直接輸出スル場合ハ荷爲替トナスヲ例トス

(十) 相 場

内地 向	百袋ニ付	金 十六圓
輸出 向	全	金 十七圓

(十一) 輸出 狀況

近來韓國ニ於ケル在留邦人ノ數漸次増加シ隨テ本品ノ需要亦益々増進セントスルノミナラス布哇及清國方面ニ向ツテノ輸出モ亦漸次發達ノ趨勢ニアリト云フ

(十二) 荷造法其費用

愛知縣

(イ) 朝鮮及北清ニ仕向クルモノハ普通九十袋ヲ麥酒箱(四打入)ニ入レ(一個凡ソ四才)其箱ノ兩端ニ棧ヲ打付ケ繩掛トナス其費用三十五錢ヲ要ス

(ロ) 布哇行ニアリテハ百袋入レヲ以テ一箱トナス箱ハ樅八分板製ニシテ費用八十錢ヲ要ス

(十三) 重ナル製造業者

林 義 次	篠 岡 斧 太 郎	永 岡 彌 兵 衛
後 藤 善 兵 衛	阪 野 藤 兵 衛	後 藤 半 七
柴 田 榮 太 郎		

(十四) 事業上ノ施設

愛知漆業同業組合アリテ製品ノ検査ヲ行ヒ證紙ヲ貼付シ製品ノ改良並ニ販路ノ擴張ニ努メツ、アリ

(六) 清 酒

(一) 産 額	年 次	數 量	價 額
	三 十 六 年	一 一 六、七 四 六 _石	三、七 二 三、一 〇 四 _円
	三 十 七 年	一 二 八、九 〇 一	三、九 一 〇、二 六 一
	三 十 八 年	九 一、三 六 五	三、二 九 四、九 二 四
	三 十 九 年	一 四 一、二 八 六	五、一 五 〇、一 五 〇
(二) 主 要 産 地			

知多郡ヲ以テ最トシ丹羽郡、名古屋市、中島郡、海東郡、幡豆郡之レニ亞キ此ノ他管下到ル處ニ産出ス

(三) 製 産 状 況

本品ハ主トシテ地方ノ需要ニ供セラル、モノニシテ三十七、八年ハ戦役ノ爲メ一般ニ消費ヲ減セシ結果三十八年ニ於テハ著シク製産ヲ減セリ三十九年ハ軍隊ノ凱旋其他ニヨリ需要激増シ多額ノ生産ヲ見タリ、

(四) 原 料 ノ 需 要 供 給

原料米ハ地方産ヲ用フ

(五) 販 出 額 及 仕 向 地

三十九年ニ於ケル海外輸出額ハ千八石、價額五萬五千四百四十圓ニシテ其主ナル仕向地ハ清、韓及布哇トシ何レモ神戸港ヨリ輸出セラル

(六) 販 買 手 續 及 取 引 慣 習

委託販賣ニシテ販賣手数料ハ壹樽壹圓トス

(七) 相 場

縣外輸出壹石平均三拾七圓

外國ニ於ケル相場ハ大要左ノ如シ

一 樽(四斗二升入) 貳拾五圓(壹石五十五圓ノ割)

(八) 荷 造 法 其 費 用 並 ニ 運 賃 諸 費

伊丹樽(四斗二升入)ニ詰メ菰包トシ尙外部ヲ莖ニテ包ム龜崎町ヨリ清國大連マテノ運賃及諸費其他保險料共一樽金壹圓拾五錢トス

(九) 重ナル製造業者

間瀬昇太郎
中國酒造合資會社
丸石合資會社

盛田久左衛門
伊東彌左衛門

(七) 麥酒

(一) 產額	年次	數量	價額
	三十五年	四、一二三	二二八、六七四
	三十六年	五、六〇三	三三三、八五五
	三十七年	五、一二七	二八一、六〇〇
	三十八年	七、九六〇	五一七、四〇〇
	三十九年	九、一五〇	七〇七、八二五

(二) 主要產地

知多郡ニ於テノミ之ヲ産ス

(三) 製造場數及職工數 (三十九年)

製造場數	職工數
一ヶ所	男 四八人
	女 二八人

計

七六八

(四) 製産狀況

本縣ニ於テハ去ル明治二十九年十一月知多郡半田町ニ日本第一麥酒株式會社半田工場ノ設置セラレシ以來本品ヲ生産スルニ至リ年々盛大ニ向ヒツ、アリシカ日露戰爭ニ際シ三十七年ハ内外ノ需要ヲ減シタリシモ三十八年ニ入り内地ニ於ケル賣行良好ナリシニ加ヘ北清方面ヘノ輸出頗ル旺盛ナリシヲ以テ著シク産額ヲ増加シタリ而シテ三十九年ハ軍隊ノ凱旋等ニヨリ内地ノ消費益々多ク輸出亦前年ニ劣ラサルノ好況ナリシヲ以テ一層ノ盛況ヲ見タリ

(五) 販出額及仕向地

内地向ハ販出額明カナラサルモ海外輸出額ヲ示セハ左ノ如シ

年次	數量	價額
三十五年	一六三 _五	八、〇四一 _四
三十六年	三、三四三	二八、四一五
三十七年	?	?
三十八年	?	一〇〇、五〇〇
三十九年	二、一〇〇	一一六、二二〇

而シテ是等輸出ハ神戸、横濱及大阪港ヲ經テ清、韓及浦鹽方面ヘ仕向ケラル内地向トシテハ附近各縣ニ販出セラル、モノ多シ

(六) 販賣手續及取引慣習

輸出取引ハ海外商人ト直接取引ヲ爲スモノト本邦商人ノ手ヲ經テ間接ニ取引ヲ爲スモノトアリ孰レモ常ニ先方ノ注文

愛知縣

ニ依リ荷造リスルモノニシテ其代金ハ現金拂又ハ手形拂ナリ又時トシテ荷爲替ト爲ス場合ナキニアラスト云フ

(七) 相場

標準價格ハ大塚四打入一箱金拾圓、小塚八打入一箱金拾貳圓ニシテ割引等ノ關係ヨリ普通左ノ如キ相場ヲ示セリ

地方別	大塚四打入一箱	小塚八打入一箱
愛知縣下	九圓五十錢	十一圓五十錢
縣外	九圓四十錢	十一圓四十錢

(八) 輸出狀況

本品ノ海外輸出ハ近來年々増進シツ、アルコト第五項ノ示スカ如シ今過去二、三年間ノ狀況ヲ見ルニ日露戰役中ハ北清方面ノ需要頗ル旺盛ナリシカ平和克復後駐屯軍隊ノ減少セシ結果其需用亦減退セリ然レトモ戰爭ノ爲メ殆ント中絶ノ地位ニアリタル露領浦沙ニ對シ戰後再ヒ販路ヲ開キタルニ因リ輸出總額ノ上ニ於テハ尙多少ノ増加ヲ示シ將來尙發達ノ傾向ヲ認ムルヲ得ヘシ

(九) 荷造法其費用及運賃

蝦蛄トナシ輸出先ニ依リ塚口ニ「キャブ」ヲ冠セシメ或ハ針金ヲ卷キ而シテ之ヲ麥藁ニテ包ミ四打ヲ一箱ニ詰メ堅固ニ釘裝シタル上鐵帶又ハ大繩ヲ以テ要部ヲ緊縛スルモノトス此費用一箱ニ付約八拾五錢ヲ要ス

半田ヨリ阪、神兩地ニ至ル運賃ハ左ノ如シ

汽車賃	
大阪へ	一箱 貳拾參錢
神戸へ	全 貳拾四錢

汽船賃

阪、神間一箱拾七錢乃至貳拾五錢

(十) 販出先ニ於ケル競争品

内地ニ於テハ惠比須、札幌、朝日、麒麟等ニシテ海外ニ在テハ獨逸品ナリ獨逸品ハ同國政府ノ獎勵頗ル周到ニシテ御用船ヲ以テ特ニ無賃輸送ヲ爲シ且ツ輸出先ニ於ケル取引上ニ迄種々ノ便利ヲ與フルカ故ニ甚タ優勢ナリ

(十一) 重ナル製造業者

日本第一麥酒株式會社半田支店

(六) 醬油

(一) 産額	年次	數量	價額
(二) 主要産地	三十五年	一〇四、一〇七	一、六三三、九一五
	三十六年	一〇四、一七〇	一、五六八、二〇九
	三十七年	一〇七、〇四〇	一、六〇五、五四六
	三十八年	一〇九、三九〇	二、一八四、三〇三
	三十九年	一一九、一〇四	二、四八二、四四六

知多郡最モ盛ニシテ名古屋市及渥美郡之ニ次ク

愛知縣

(三) 製造場數及職工數

製造場數	四三九戶
職工數	一、二五四人
	九〇九人
計	二、三六三人

(四) 製產狀況

従前ハ溜ノ製産盛ナリシカ近來一般ニ本品ヲ需要スルニ至リシヲ以テ斯業漸次盛ントナリ逐年産額ヲ増加セリ

(五) 原料ノ需要供給

原料大豆ハ概シテ支那、朝鮮及北海道産ニシテ鹽ハ臺灣産及内地鹽ヲ使用ス

(六) 製産費及收益ノ比較

醬油十二石ヲ製成スル收支計算(三十九年)ヲ示セハ左ノ如シ

收	入金二百圓	醬油十二石賣價
	一金七圓三十三錢	搾粕二百二十二貫賣價
計	計金二百七圓三十三錢	
支	一金五十圓	大豆五石代
	一金五十圓	小麦五石代
	一金十四圓五十六錢	鹽五百二十斤

製	造	費
造	石	稅
營	業	稅
計	金	百九十四圓五十六錢

差引

金	十二圓七十七錢	利	益
---	---------	---	---

(七) 販出額及仕向地

本品ハ全産ノ大部縣内ニ於テ需要セラル、モノニシテ其縣外及海外ヘノ輸出額ハ甚タ少シ三十九年ニ於ケル海外輸出額ハ四百五十一石價額九千三百三十圓ニシテ韓國ヘノ輸出最モ多ク清國布哇之ニ亞ク

(八) 相場

醬	油	平均一升ニ付	貳拾錢
溜	全		貳拾參錢
ニ	一	ラ溜	拾四錢

(九) 荷造法其費用並ニ運賃諸費及保險料

輸出品ノ荷造ハ普通内地ニ行ハル、方法ト略ホ同一ナレトモ堅牢ヲ旨トシ蓋底ニ釘ヲ打チ掛繩ノ數ヲ増シ蓋ノ上ニ棧ヲ打ツヲ以テ此費用普通ノ場合ヨリ一樽ニ付金拾錢方高シ

運賃ハ半田港ヨリ大阪迄

汽	車	貨	一噸	金	三圓十錢
---	---	---	----	---	------

愛知縣

汽船私

一噸

金二圓八十錢

三百三十八

保險料元價百圓ニ付全損七錢分損拾錢ナリト云フ

(九) 重ナル製造業者

盛田久左衛門
伊藤孫左衛門

江崎興右衛門
山田庄藏

丸豊合資會社

(五) 罐詰

(二) 産額

年次	數量	價額
三十五年	九九五、〇〇〇 <small>圓</small>	一二七、〇四八 <small>圓</small>
三十六年	一、六一〇、九七九 <small>圓</small>	七六、八八八
三十七年	二五、〇〇〇 <small>圓</small>	三六二、六九六
三十八年	二、二四二、九七三 <small>圓</small>	四三三、四四五
三十九年	一、三一七、二八五	二〇二、〇九四

(三) 種類別

輸出向
鮫油漬罐詰
内地向

魚介、蔬菜、菌茸、果實等

(三) 主要産地

名古屋市、知多郡、愛知郡、寶飯郡等トス

(四) 製造戸數及職工數(三十九年)

種類	製造戸數	職		計
		男	女	
魚介	三〇 <small>戸</small>	一一三	一一五	二二八
蔬菜	四	六	四	一〇
菌茸	五	六	七	一三
果實	一	一	一	一
其他	一	一	一	一
計	四〇	一三六	一三六	二六二

(五) 製産狀況

本業ハ近年長足ノ進歩ヲナシ殊ニ戰役當時ハ軍需品ノ製造甚ク盛ンナリシカ平和克復ト共ニ牛肉罐詰ノ如キハ全ク其業ヲ中止シタルト又軍隊ヨリ諸種ノ不用罐詰ヲ民間ニ拂下ケラレタルニヨリ三十九年ニ於テハ前年ニ比シ著シク其生産ヲ減セリ然レトモ豫テ試賣中ナリシ鮫油漬罐詰ノ海外ニ販路ヲ開キ年々其需要ヲ増進セントスルヲ以テ將來亦益々有望ノ事業タリ

(六) 原料ノ需要供給

原料ノ重ナルモノハ鮫、阿列布油、鐵葉板ニシテ鮫ハ三河灣及伊勢灣ニ於テ漁獲セラル、モノヲ用ヒ阿列布油ハ神戸横濱ノ内外輸入商ノ手ヲ經テ購入スルモノト直接佛國又ハ埃及等ヨリ購入スルモノトアリ又鐵葉板ハ重ニ大阪又ハ神

愛知縣

三百三十九

戸ノ輸入商ヨリ購入ス

(七) 製産費及収益ノ比較

原料タル鰯ノ價格ハ其年ノ漁獲ノ豊凶及地方需用ノ關係ヨリ高低常ナク生産費及収益ニ付テ一定ノ標準ヲ得ル能ハス

(八) 販出額及仕向地

海外輸出品ハ横濱、神戸港ヲ經由スルモノニシテ三十九年ニ於ケル輸出額ハ左ノ如シ

國別	數量	價額
米	四九〇、三八四	六五、〇〇〇
獨逸	二九四、二三一	三三、五〇〇
伊太利	一九六、一五五	二九、〇〇〇
英太利		
濠洲		
清國		
計	九八〇、七六九	一二七、五〇〇

(九) 販賣手續及取引慣習

輸出品ハ東京、横濱、神戸等ニアル輸出商ノ手ヲ經テ或ハ直接ニ歐、米ニ見本ヲ送り注文ヲ受ケ之ヲ販賣ス

(十) 輸出狀況

從來本品ノ輸出ハ主トシテ在外本邦人ノ外時々各港ニ寄泊スル本邦商人及漁夫等ノ需要ヲ目當ニ行ハレ外人ハ試食タニ爲サス三十四、五年ヨリ魚介罐詰清國向トシテ輸出ヲ見タルモ僅少ニシテ擧クルニ足ラス其後種々ノ罐詰ヲ海外各地へ輸送シ試賣ヲナセシニ幸ニ鰯油漬罐詰ノ歐、米人ニ需要セラ、所トナリ年々多クノ輸出ヲ見ルニ至レリ

(十一) 荷造法其費用並ニ運賃諸費

百個ヲ一箱ニ詰メ各個毎ニボール紙ヲ以テ離隔ス外兩ハ之ヲ釘付トナシ其上ヲ鐵帶ニテ卷ク其費用約四拾錢ヲ要ス輸港へノ輸送ハ總テ汽船便ニ依リ一箱ニ對スル運賃約一圓ナリト云フ

(十二) 輸出先ニ於ケル競争品

鰯罐詰ノ競争品トシテ重ナルモノハ佛國産及葡萄牙産ニシテ其品質ニ於テ本品ノ上ニアリ

(十三) 重ナル製造者及取扱商店

- 製造者 日本罐詰株式會社
- 取扱商店 横濱 明治 屋
- 神戸 三井物産神戸支店

(三) 車輛類

(一) 産額

年次	數量	價額
三十五年	二一、二三六	二二七、五六三
三十六年	一七、二二四	二五〇、七五六
三十七年	一七、五八九	三九九、三〇〇

愛知縣

三十八年	一八、四二九	一、〇四八、二二二
三十九年	一八、一二八	七九八、二〇二

(二) 種 類
輸出向ハ人力車ニシテ内地向ハ鐵道用貨車ヲ主トシ鐵道及電鐵用客車、乳母車、馬車等トス左ニ三十九年ニ於ケル種類

別産額ヲ掲ク

種 類	數 量	價 額
鐵道用貨車	五八三	五七一、五一五
鐵道及電鐵用客車	三〇	五一、九〇〇
荷 車	一一、七七四	一〇一、〇五六
人 力 車	一、四五二	五〇、二四六
乳 母 車	四、一四〇	一七、二〇一
馬 車	一四九	六、二九〇

(三) 主要産地

名古屋市、愛知郡及中島郡トス

(四) 沿 革

人力車ハ明治三十四年名古屋市加藤周三郎等ノ始メテ之ヲ製造セシ所ニ依リ爾來大ニ發達シテ今ヤ大阪及東京ニ次クノ産額アルニ至レリ鐵道用客車及貨車ハ明治二十九年愛知郡熱田町ニ日本車輛製造株式會社ノ起リテ之ヲ創製セシモノニシテ爾來同會社ノ事業ハ年々發達シテ今日ニ至レリ

(五) 製造戸數及職工數(三十九年)

製造戸數	二七三戸
職 工 數	一、〇三七人

(六) 製 産 狀 況

日本車輛製造株式會社ノ外ハ孰レモ小規模ノ製造家ニシテ前項製造戸數ノ内ニ百二十三戸ハ普通ノ荷車ヲ製造スルモノナリ

鐵道用客車及貨車ハ日本車輛製造株式會社ノ専ラ製造スル所ニ係リ總テ内地向ナリ近時我文連ノ進歩ニ伴ヒ運輸交通ノ漸ク頻繁トナリ本品ノ需要亦益々多キヲ加ヘ殊ニ戰後ニ於テ一層盛大トナレリ
人力車ハ内地ニ於テ需要セラル、外馬來半島彼南地方へ輸出セラル、モノ亦尠ナカラスシテ年々盛大トナレリ而シテ本品ハ大阪及東京ニ於テ製造セラル、モノ多キモ大阪品ハ杉板ヲ用ヒ粗製ナルモノ多ク東京品亦樅板ヲ使用セラル、ヲ以テ檜板製ノ本縣産ハ市場ニ信用厚ク漸次其需要ヲ進メツ、アリ加フルニ本縣ハ材料ニ富ミ且工賃ノ低廉ナル關係ヨリ前記兩產品トノ競争ニ於テ將來優勝ノ地位ヲ占ムルニ至ルヘキコト甚タシキ難事ニハアラサルヘク前途益々有望ナリ

(七) 原料ノ需要供給

原料ハ總テ縣下ニ産スルモノヲ用ヒ又甚タ豊富ナリ

(八) 製産費及收益ノ比較

賣價ヲ一トシ其歩合ヲ示セハ左ノ如シ

原料代及製造費

八割五分

愛知縣

收 益

一割五分

(九) 販賣手續及取引慣習

輸出品ハ横濱ニ於ケル外國商館ヨリノ注文ニヨリ之ヲ販賣シ其代金ハ着荷ノ上現金ヲ以テ取引セラル

(十) 相 場

人力車一輛ノ最近相場ハ約三十二圓ナリ

(十一) 荷造法其費用並ニ運賃諸費

輸出人力車ニ在テハ車體ヲ菰包トナシ粗雜ナル箱ニ入レ繩掛ヲ施シ車輪ハ菰包トナシ繩ニテ細カニ巻ヲ例トス此費用
一輛ニ付金一圓五十錢ヲ要ス輸送ハ汽船便ニヨリ其横濱ニ至ルノ運賃諸費左ノ如シ

汽 船 賃 一輛ニ付 一 圓

船積及陸揚ケ其他ノ諸費 一輛ニ付 三 十 錢

計 一圓三十錢

(十二) 重ナル製造業者

鐵道用客車貨車 日本車輛製造株式會社
人 力 車 國 枝 鐵 吉

岐阜縣

産業概況

岐阜縣ハ美濃、飛驒ノ二國ヲ管シ其廣袤八百三十三方里ニ亘ルト雖モ管内概ネ峰嶺起伏シテ平野ニ乏シク美濃ノ西南部ニ濃尾平野ノ稍展開セルモノアルニ過キス殊ニ本縣ハ四面濱海ノ地ナク只延長五十五哩ニ過キサル東海道鐵道及中央西線ノ一部カ一地方ヲ貫通スルニ止マリ交通、運輸ノ便水陸共ニ極メテ惡シク爲ニ産業發達ヲ沮碍スル所尠ナカラス

三十九年統計ノ示ス所ニヨレハ本縣各産業ノ總生産額ハ五千有餘萬圓ニシテ農業ハ其過半ヲ生産シ各産業ノ首位ヲ占ム之ニ亞クモノハ工業ニシテ林業、畜産業、礦産業順次相次キ水産業ハ其生産極メテ少ナク殆ント見ルニ足ラス左ニ最近五ヶ年間ニ於ケル是等産業ノ各生産額ヲ掲ケン

種別	年次	三十五年	三十六年	三十七年	三十八年	三十九年
農産		二〇〇,九二七	二五,二〇,七五四	三三,〇一六,〇〇一	二二,一九八,八七四	二五,八九三,〇九五
工業		一三,二六九,九七〇	一三,四八一,五六	一五,二四九,九七	一八,二六〇,九九	二〇,一三三,二六九
林産		四,五三三,六三七	一八四九,七四三	一六九八,九四七	三,一五七,五五五	三,〇四六,二五
畜産		一四六,九八八	一七五九,五〇〇	一五,三三,七五八	一四四,三三三	一六七,〇七八
礦産		四〇三,三三七	二六九,三五二	八九五,七九〇	一〇三,〇八五	一,一七〇,二九六
水産		一〇四,五七三	九三,五四七	一〇三,四六四	一五三,〇〇九	一六七,九二四
計		三九八,九七七	四一三,一〇,六一	四二五,一八五七	四五,二四七,七〇三	五二,〇四八,九九七

以下各種産業ニツキ其概況ヲ記述スヘシ

(一) 農業

美濃ノ西南部ハ地勢概ネ平坦ニシテ木曾、長良、揖斐ノ三大川ハ其間ヲ貫流シ地味肥沃ナルノミナラス氣候亦溫和ニシテ耕耘ノ業ニ適シ田圃能ク啓ケタルヲ見ル然レトモ其他ノ地方殊ニ飛驒地方ニアリテハ山岳ノ間僅カニ田畑ノ介在スルニ過キスシテ農作地域ハ甚タ狭小ナリ今三十九年ノ統計ニヨリ耕地反別ヲ見ルニ田六萬二千九百七町九反步、畑四萬八千六百二十九町四反步、合計十一萬五千三百三十七町三反步ニシテ之ヲ美濃西南部地方、同東北部地方及飛驒ノ三部ニ大別シテ示セハ左ノ如シ

地 方	總 面 積		畑 面 積		一 方 里 二 對 比
	數 量	價 額	數 量	價 額	
美濃西南部地方 (岐阜、福井、石川、富山、山梨、長野、岐阜、不破、安八ノ一市六郡)	四、八〇八、〇〇〇	九、八四九、三〇〇	二、四〇八、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	七、五六九、三〇〇
美濃東北部地方 (揖斐、本巢、山縣、武儀、郡上、加茂、可兒、土岐、惠那ノ九郡)	二、七〇六、〇〇〇	二、五三二、〇〇〇	一、七二四、九〇〇	一、五三二、〇〇〇	一、九四八、〇〇〇
飛驒	五〇九、〇〇〇	六、五八四、〇〇〇	一、七二四、九〇〇	一、五三二、〇〇〇	四、八三三、〇〇〇
合 計	八、〇一三、〇〇〇	一、二九、〇〇〇	六、二九七、九〇〇	一、二九、〇〇〇	一、二九、〇〇〇

前掲ノ如ク美濃ノ西南部ハ一方里(一方里ノ反別ハ一、五五五町二反步)ニ對スル耕地ハ七百六町九反步ニシテ總面積ノ約二分ノ一ヲ占メ農業ノ最モ發達セル地方ニ屬シ本縣農業ノ生産力ハ主トシテ此ノ地方ヲ中心トセル附近一帯ノ地ニ存スルコト明カナリ
次ニ最近五年間ニ於ケル農産統計ヲ掲ケ主要農産物ノ概況ヲ記スヘシ

種 別	三十五年		三十六年		三十七年		三十八年		三十九年	
	數 量	價 額	數 量	價 額	數 量	價 額	數 量	價 額	數 量	價 額
米	八、三三三、〇〇〇	八、七〇七、〇〇〇	八、九七五、〇〇〇	九、三三三、〇〇〇	一〇、八二二、〇〇〇	一〇、八二二、〇〇〇	八、〇二二、〇〇〇	八、〇二二、〇〇〇	九、九八八、〇〇〇	九、九八八、〇〇〇
麥	四、五八〇、〇〇〇	二、七〇七、〇〇〇	三、五八〇、〇〇〇	二、五〇四、〇〇〇	四、〇二二、〇〇〇	三、四〇一、〇〇〇	三、九六四、〇〇〇	二、六四四、〇〇〇	四、七二七、〇〇〇	二、四四四、〇〇〇
茶	三、〇五〇、〇〇〇	三、〇七四、〇〇〇	二、七八八、〇〇〇	三、五七九、〇〇〇	二、八九九、〇〇〇	三、〇九七、〇〇〇	三、〇九七、〇〇〇	三、〇九七、〇〇〇	三、〇九七、〇〇〇	三、〇九七、〇〇〇
紫雲英種子	三、〇九二、〇〇〇	三、〇九二、〇〇〇	二、七二二、〇〇〇	二、六〇八、〇〇〇	二、四三三、〇〇〇	二、五五五、〇〇〇	二、四〇二、〇〇〇	二、五二二、〇〇〇	二、八三三、〇〇〇	二、九七五、〇〇〇
大豆	三、〇九二、〇〇〇	三、〇九二、〇〇〇	二、七二二、〇〇〇	二、六〇八、〇〇〇	二、四三三、〇〇〇	二、五五五、〇〇〇	二、四〇二、〇〇〇	二、五二二、〇〇〇	二、八三三、〇〇〇	二、九七五、〇〇〇
甘藷	五、二六六、〇〇〇	二、六四四、〇〇〇	四、一八九、〇〇〇	二、七二九、〇〇〇	三、四五一、〇〇〇	三、二七〇、〇〇〇	三、二七〇、〇〇〇	二、六二〇、〇〇〇	三、八〇〇、〇〇〇	一、五二一、〇〇〇
里芋	五、五五九、〇〇〇	二、六四四、〇〇〇	四、一八九、〇〇〇	二、七二九、〇〇〇	三、四五一、〇〇〇	三、二七〇、〇〇〇	三、二七〇、〇〇〇	二、六二〇、〇〇〇	三、八〇〇、〇〇〇	一、五二一、〇〇〇
午菰	八、六四七、〇〇〇	三、〇二二、〇〇〇	六、七六八、〇〇〇	二、〇二二、〇〇〇	七、八四五、〇〇〇	二、五五五、〇〇〇	三、八五九、〇〇〇	四、一四二、〇〇〇	五、〇三三、〇〇〇	四、六八三、〇〇〇
蘿蔔	二、〇七二、〇〇〇	一、九六六、〇〇〇	二、五五九、〇〇〇	二、四三三、〇〇〇	二、〇八〇、〇〇〇	二、一八八、〇〇〇	二、一八八、〇〇〇	二、一八八、〇〇〇	二、一八八、〇〇〇	二、一八八、〇〇〇
菜實	二、〇七二、〇〇〇	一、九六六、〇〇〇	二、五五九、〇〇〇	二、四三三、〇〇〇	二、〇八〇、〇〇〇	二、一八八、〇〇〇	二、一八八、〇〇〇	二、一八八、〇〇〇	二、一八八、〇〇〇	二、一八八、〇〇〇
果實	六、四四五、〇〇〇	二、四三三、〇〇〇	一、七八一、〇〇〇	七、五三四、〇〇〇	七、五三四、〇〇〇	七、五三四、〇〇〇	七、五三四、〇〇〇	七、五三四、〇〇〇	七、五三四、〇〇〇	七、五三四、〇〇〇
繭	三、一三六、〇〇〇	九、五九三、〇〇〇	二、四〇三、〇〇〇	七、五八五、〇〇〇	二、九七三、〇〇〇	二、九七三、〇〇〇	二、九七三、〇〇〇	二、九七三、〇〇〇	二、九七三、〇〇〇	二、九七三、〇〇〇
繭(秋)	二、四〇三、〇〇〇	七、五八五、〇〇〇	二、四〇三、〇〇〇	七、五八五、〇〇〇	二、四〇三、〇〇〇	七、五八五、〇〇〇	二、四〇三、〇〇〇	七、五八五、〇〇〇	二、四〇三、〇〇〇	七、五八五、〇〇〇
繭(春)	六、〇三三、〇〇〇	二、〇〇八、〇〇〇	一、一八二、〇〇〇	一、一八二、〇〇〇	一、一八二、〇〇〇	一、一八二、〇〇〇	一、一八二、〇〇〇	一、一八二、〇〇〇	一、一八二、〇〇〇	一、一八二、〇〇〇
蠶	八、三三三、〇〇〇	一、四九〇、〇〇〇	一、三三八、〇〇〇	二、〇二二、〇〇〇	一、九七三、〇〇〇	一、九七三、〇〇〇	一、九七三、〇〇〇	一、九七三、〇〇〇	一、九七三、〇〇〇	一、九七三、〇〇〇

(一) 米

米ハ其大部分美濃ノ生産スル所ニ係リ三十九年ニ於ケル作付反別ハ六四、〇七七町步ニシテ最近七ヶ年中豊凶ノ二ヶ年ヲ除キ五ヶ年ノ平均收穫高ハ八八九、二四二石ニシテ内年々三四十萬石ヲ東京、横濱ヲ始メトシ大阪、名古屋地方へ販

出ス美濃ハ往時文珠米地田米等ノ名米ヲ出シ世ニ知ラレタリシカ維新以後貢米制度ノ弛廢ニ伴ヒ乾燥不充分ニシテ俵裝粗糲トナリシタメ市場ニ際價ヲ墜シ價格低下スルニ至リ亦昔日ノ如クナラス是レヲ以テ去ル三十八年縣ハ告諭訓令ヲ發シ特ニ收穫期、乾燥、調製、俵裝等ニ就キ改善指導スル所アリ郡、町、村亦夫々規約ヲ設ケ之カ實行ニ努メツ、アルヲ以テ近時稍見ルヘキモノアルニ至レリ

(二) 麥

麥モ亦殆ント美濃ニ生産シ飛驒ニ於テハ全産額ノ約百分ノ四ヲ産スルニ過キス三十九年ニ於ケル作付反別ハ三七、七七五町歩ニシテ平年作四四九、一〇二石ナリ名古屋、静岡地方ニ多少輸出セラル、モ大部ハ農家ノ食料及馬糧トシテ縣内ニ消費セラル

(三) 果 實

本縣ニ生産スル果實ノ内最モ主ナルモノハ柿ニシテ蜜柑、梨之レニ亞ク三十九年ニ於ケル柿ノ産額ハ十二萬五千餘圓ニ上リ蜜柑亦六萬三千餘圓梨四萬一千餘圓ヲ産セリ柿ハ安八郡、本巢郡ヨリ多ク産出シ蜜柑ハ海津、羽島郡梨ハ安八、本巢不破郡ヲ主産地トス近來一般ニ果實ノ嗜好増進ニ伴ヒ需要益々多ク年々愛知、三重其他ヘ向ケ柿約五萬圓、蜜柑約二萬餘圓、梨約三萬餘圓ヲ輸出スルノ狀況ナリ斯ノ如ク果實ノ需要年々増進スルヲ以テ縣農事試驗場ニ於テハ果樹ノ無償配付ヲナシ種類及栽培法ノ改良ヲ圖リツ、アリ

(四) 茶

茶ハ掛斐、武儀、郡上、加茂郡ニ於テ主トシテ栽培セラレ三十九年ニ於ケル茶園反別ハ一、七三〇町歩ニシテ既往數年間ニ於テ年々多少ノ増加ヲナセリ而シテ三十九年ノ製茶産額ハ二八二、四七〇貫ニシテ縣外輸出額ハ約十九萬貫ニ達ス内静岡、神戸等ニ於テ再製セラレ米國ニ輸出セラル、モノ少ナカラス從來ノ製茶ハ一般ニ粗惡ナリシカ爲メ弊價ヲ失墜セ

リ
ントシタリシカ縣茶業組合聯合會議所等ニ於テ改良ノ途ヲ講シ之レカ挽回ヲ圖リタルタメ近時頓ニ好況ヲ呈スルニ至レ

(五) 紫 雲 英

紫雲英ハ本巢、養老、不破郡ニ於テ最モ多ク栽培セラル、所ニシテ三十九年ニ於ケル作付反別ハ八五〇町歩ニ亙リ種子九萬七千餘圓ヲ生産ス内約六割ハ福島、茨城、静岡、滋賀、大阪、和歌山、兵庫、岡山、廣島、山口及四國地方ニ輸出ス近來農家ノ肥料ニ關スル智識一般ニ普及シ經濟的ニシテ且ツ肥料成分ニ富メル紫雲英ノ栽培ハ益々盛ントナリ荷モ之ニ適スルノ地ハ殆ント之ヲ栽培セサルナキノ盛況ナリ

(六) 蠶

養蠶ノ業ハ農家ノ副業トシテ羽島、稻葉、武儀、郡上、加茂、惠那、益田、大野、吉城、可兒ノ諸郡ニ於テ最モ盛ンニ行ハレ近來桑園反別、飼養戸數、産額共ニ年々多少ノ増加ヲ示セリ即三十九年ニ於ケル桑園反別ハ一五、〇七二町歩、飼養戸數ハ春蠶六五、八八七戸、夏蠶四二、四四三戸、秋蠶五一、九八一戸ニシテ繭産額ハ一五四、三七二石、價額六、九四六、七四〇圓ナリ而シテ産繭ハ主トシテ縣下ニ於テ製糸セラル、モ年々約五千石ヲ愛知、三重地方ヘ輸出セリ縣ニ於テハ年々蠶業ノ改良發達ヲ圖ルカ爲メ補助金ヲ支出シ且ツ専門技師ヲ派シテ各地ニ短期ノ講習ヲ開催シ居レリ此他稻葉、武儀、郡上、惠那、益田、吉城等ノ諸郡ニアリテハ専門ノ技手ヲ置キ養蠶ノ時期ニ及ヘハ養蠶家ニ就キ實地指導ヲナス又大野郡ニ於テハ郡立蠶業講習所ヲ設置シ蠶業教育ニ努ムルノ外優良ノ蠶種ヲ製造シ之ヲ當業者ニ配付シ又桑苗ヲモ培養シテ之ヲ給付スル等蠶業ノ改良進歩ニ資スル所頗ル多シ其他各郡ニ於テモ一般斯業ノ獎勵ヲナサ、ルモノナク農會、同業組合等亦改良の施設少ナカラス

以上概説セシモノ、外大豆其他ノ豆類、粟、黍、甘藷、馬鈴薯及蔬菜類等ノ食用農作物ハ作付反別産額共ニ年々格別ノ

異動ナキモ特用農作物中杞柳ノ栽培ハ近年柳行李製造事業ノ發達ニ伴ヒ益々増加ノ傾向ヲ呈スレトモ楮、三椏ノ如キハ近時蠶業ノ進歩ト共ニ著シク其作付反別及産額ヲ減少スルニ至レリ葉藍ノ培養亦洋藍ノ爲メニ壓セラレ逐年減退セルノミナラス茶種、大麻、苧麻等ノ生産モ年々減少ノ趨勢ニアルカ如シ

(二) 工業

工業ハ地勢ノ關係及交通ノ不便等ヨリ自カラ其發達ヲ遲緩ナラシメ三十九年ニ於テ漸ク二千餘萬圓ノ生産ヲ見タルニ過キス而シテ其生産品ニ於テモ生糸、織物、陶磁器、紙及紙製品ヲ除キテハ殆ント見ルニ足ルモノナシ試ミニ三十九年ニ於ケル統計ノ示ス所ニヨリ五萬圓以上ノ工産品ヲ數フレハ十六種ニシテ内百萬圓以上ノモノニ在リテハ僅々六種アルノミ左ニ最近五ヶ年間ニ於ケル各種工産物ノ統計ヲ掲ケ主要工産品ノ概況ヲ記述スヘシ

種別	三十五年		三十六年		三十七年		三十八年		三十九年	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
生糸	七五、三九	四〇、九〇九、六六	七九、〇一	四四、〇三三、一一	六八、六九	四三、二〇七、四四	八九、六九	五、〇五、一八〇	一〇四、一六九	六一、五五、四五八
清酒及酒類	七、〇四〇	二、二六三、九七	六四、〇一一	一、九三、五〇〇	六四、一六九	一、九〇九、六四二	四九、〇一六	一、五九四、〇三三	五七、七六九	一、九五九、二四八
綿織物及絹織物	一、四二、七九一	一、六七、〇〇一	一、六六、〇二五	一、八九四、七九一	一、四九七、三三八	一、四八八、〇九〇	一、三六三、一九〇	一、五四七、三七三	二、二八三、三九七	二、四四〇、〇一四
絹織物	一九、一四四	一、四〇五、〇三五	一四、八七〇	九三九、四七四	一四、二〇三	一、四三三、五五四	一、二四三、五五四	一九〇、四八	二、四四八、三六六	二、七三、五五四
陶磁器	—	九、六六、二五	—	八、九六、六二	—	八、五七、〇〇〇	—	一、二九七、三七三	—	二、七三、五五四
紙製品	四、六九七、七一一	九四〇、七二七	五、四四六、二九九	一、〇七三、六三三	—	一、〇三七、三三二	—	一、〇三三、八四一	—	一、〇〇〇、〇〇〇
紙子	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
灰	二、八九九、三六七	三、三三九、二二〇	二、一〇〇、五〇六	二、八六、〇七二	二、五九、六七〇	四、三七八、八〇〇	二、七八八、四〇〇	四、三六、一五八	四、三六、一五八	一、〇三〇、〇九五
石油及溜	一七、四九五	二五、四四四	一七、九六八	三三、三六八	一九、〇〇四	二四、五二九	二四、五二九	三三、七七一	三三、七七一	三六、八四四

(一) 生糸

種別	三十五年		三十六年		三十七年		三十八年		三十九年	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
粗製品、刺繡	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
履物類	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
味粉	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
製粉	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
漆及手籠	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
打物	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
製藍	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
柳行李	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
漆器類	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
漆器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大理石細工	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
荷車	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
鐘錶	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
度量衡器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
竹製品	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
莫大箱	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
茶箱	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
櫟細工	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
櫟寸	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
經木眞田	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
炭圓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
石炭	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

岐阜縣

生糸ハ縣下到ル所生産スト雖モ就中惠那、武儀、郡上、加茂、大野郡等其主ナルモノナリ本縣ニ於テモ近年改良ノ氣運
頓ニ興リ産額年々増加スルニ至レリ尙三十九年以來縣ニ於テハ技師及技術員十九名ヲ置キ専ラ實地指導ヲナシ斯業ノ發
展ヲ圖レリ

(二) 織物

機業ノ盛ナルハ羽島、稻葉郡ニシテ絹織物ノ中主ナルモノハ縮緬ニシテ羽二重斜子、絹、鹽瀬等多少ノ生産アリ綿織
物及絹綿交織物ニアリテハ美濃縞、白木綿及被而布ノ産出多シ縮緬ハ近年況ク世人ニ愛用セラレ産額甚タ増加セリ殊ニ
紋縮緬ハ本縣ノ特色ニシテ全國此ノ右ニ出ツルモノナシト云フ一ケ年ノ産額約百二十萬圓ニシテ海外ハモ多少ノ輸出ア
リ羽二重、紋織斜子、絹、鹽瀬其他ノ絹織物ハ殆ント内地向ニシテ羽二重ニ於テハ極メテ僅少ノ輸出品ヲ生産ス美濃縞
ハ古來附近ニ名聲ヲ博シ生産少ナカラス三十九年ニ於ケル産額ハ綿織品、絹綿交織品ヲ合セ七百四十萬圓ニシテ主トシテ
内地ノ需要ニ供セラル被而布ハ清國ニ於テ蒲團地ニ需要セラル、モノニシテ三十七年以來輸出劇増シ一ケ年ノ産額六十
萬圓ニ達セントスルノ好況ヲ呈セシカ染色ノ堅牢ナラサリシカ爲メ需要減退シ俄カニ不振トナルニ至レリ現今縣ニ於テ
ハ染色専任技師ヲ置キ時々巡回シテ實地指導ヲナサシメ以テ改良發達ヲ圖レリ

(三) 陶磁器

本縣ノ陶磁器ニハ四種アリ美濃燒、澁草燒、温古燒、金華山燒即チ之レナリ美濃燒ハ土岐、惠那、可兒ノ三郡ヨリ産出
シ澁草燒ハ大野郡高山町、温古燒ハ不破郡、赤坂町、金華山燒ハ岐阜市ニ産ス内美濃燒ハ産額最モ多ク本品總産額ノ約
百分ノ九十九ニ達ス三十八年以來米國ヘノ輸出劇増シ内地向亦好況ニシテ製品ハ常ニ拂底ノ狀況ナリ其三十九年ニ於ケ
ル産額ハ二百七十一萬餘圓ニシテ内約六割ハ米國ニ餘ハ清、韓地方ニ輸出セラレタリ本縣ノ陶磁器製造業者ハ未タ愛知
縣ニ於ケルカ如ク改良ノ機運ニ達セズ今尙總テ舊慣ヲ套襲シ居レリ是ヲ以テ土岐郡ニ於テハ郡費ヲ以テ陶器學校ヲ設置

スル等専ラ陶磁器製造ニ關スル智識ノ普及ヲ圖レリ

(四) 和紙

本縣ニ産スル和紙ハ美濃紙ト稱セラレ古來其名海内ニ高シ三十九年ニ於ケル産額ハ百二十萬圓ニシテ武儀郡ヨリ最モ多
ク産出シ山縣郡、揖斐郡、惠那郡之ニ亞ク本品ハ主トシテ内地ニ於テ需要セラル、モ近時「ユツビー」紙、東洋紙、典具
帳ノ海外ニ輸出セラル、モノ亦少ナカラスシテ三十九年ノ如キハ四十三萬六千餘圓ヲ輸出セリト云フ近來本縣ニ於テハ
製紙原料ニ不足ヲ告クルニ至リシヲ以テ當業者ハ一般ニ困難ヲ感シ書院紙ノ如キハ年々其生産ヲ減少スルノ傾向ヲ呈セ
リ是ヲ以テ縣ニ於テハ之レカ救済ノ方法トシテ代用紙料ノ試験ヲ行ヒ夏秋蠶時ノ桑樹皮ノ好適セルヲ認メ今ヤ其經濟的
試験ノ施行中ナリト聞ケリ尙縣ニテハ技師ヲ置キ抄紙法實地指導ヲナサシメ美濃紙同業組合ニ於テハ十餘名ノ検査員ヲ
常置シテ製品ノ検査ヲナシ又抄紙試驗場ヲ設置シ縣技師指導ノ下ニ各種ノ試験ヲ行ヒ斯業ノ改良發達ニ資セリ

(五) 紙製品

紙製品トシテ主ナルモノハ雨傘、繪日傘、團扇、「ナブキン」、岐阜提灯ニシテ三十九年ニ於ケル産額ハ百三萬餘圓ナリ雨
傘ハ稻葉郡ヨリ産出スルモノ最モ多ク岐阜市之レニ亞ケリ全部内地向トス繪日傘ハ岐阜市ニ多ク産シ専ラ歐、米ニ輸出
セラル團扇又殆ント岐阜市ニ生産シ世ニ岐阜團扇ノ名アリ其髹漆ノモノハ内地用ト清、韓輸出用トノ二種アリ其内地用
トシテハ普通商品ノ外近來商號ヲ刷リ入レタル商店ノ進物用品ノ注文多シ清國向キノモノハ多少南洋諸島ニモ輸出スト
云フ「ナブキン」ハ本縣特産タル典具帳紙ヲ用ヒテ作りタルモノニシテ主トシテ岐阜ニ産ス殆ント歐、米ニ輸出セラレ上
等品トシテ中流以上ニ賣用セラレ漸次需要ヲ増加セリト云フ岐阜提灯モ亦典具帳紙ヲ貼用シタルモノニシテ岐阜市ノ特
産タリ多ク内地向ナリト雖モ歐、米ヘ輸出スル數亦少ナカラス近來來遊外人ノ購買歸國スルモノ甚タ増加セリト云フ
以上ノ外打及物、大理石細工、柳行李、漆器等ハ其産額多カラサルモ皆本縣ノ名産ナリ是等諸品ノ狀況及前記各品ニ對ス
ル詳細ノ事項ニ就テハ後項ニ記述スヘキヲ以テ茲ニ之レヲ贅セス

(三) 林業

本縣ハ美濃ノ西南部ヲ除クノ外ハ殆ト山岳ナラサルナク其山林、原野ノ總反別百十四萬五千五百六十八町步ニシテ本縣全面積ノ約八分七厘餘ヲ占メ本邦中實ニ長野、秋田ニ亞ク山林國トス今縣下ノ山林、原野ノ面積ヲ所有別ニスレハ左ノ如シ

所有別	山林		原野		合計
	山	林	原	野	
國有	三四五、〇四七	二二一、九六六	一一一	三三	三四五、〇四九
御料	五五七、〇一三	三〇〇、六九一	二、七九四	三三三	二一、九九七
公有	二、九四七	二七四、二二四	六、一四八	一一〇	五五七、〇四六
社寺	五七七、八六二	二七四、二二四	九、〇六二	六、一四八	三〇三、四八五
私有	一、二三四、八七五	五七七、八六二	一九、〇九五	一、一四三、九七〇	三〇三、〇六七
合計	一、二三四、八七五	五七七、八六二	一九、〇九五	一、一四三、九七〇	三〇三、〇六七

前表ニ示ス處ニ依レハ國有、御料ヲ除キ民有ニ屬スル面積ハ縣下山林、原野ノ過半ヲ占ム往時是等ノ林野ハ一般ニ繁茂セシカ維新以來一時林政ノ廢弛ニ伴ヒ亂伐シタル結果山林ノ荒廢ヲ來シタル所多ク殊ニ木曾、長良、揖斐ノ三川ハ其流域極メテ長ク木材搬出ニ便ナルヲ以テ亂伐一會甚クシク一時ハ將ニ其極ニ達シ河水ノ汎濫山岳ノ崩壞年々相踵テ起リ其慘禍殆ント測ルヘカラサルノ狀況ヲ呈シタリ是ニ於テ苦心アル者大ニ植林ノ必要ヲ覺リ漸次造林ノ計畫ヲ立ツル者ヲ生スルニ至レリ縣亦明治二十八年以來山林ノ經營ニ努ムル所少ナカラサリシヲ以テ漸ク此ノ弊ヲ防止シテ若々營林ノ成績ヲ擧グルニ至リタリ此ノ故ニ本縣ハ廣大ナル林野ヲ有スルト雖モ比較的尙其收入ヲ上クルニ至ラサル所以ナリ今最近五ケ年間ニ於ケル林産統計ヲ左ニ掲ク

森林伐採 (公有社寺私有)

種別	三十五年		三十六年		三十七年		三十八年		三十九年	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
用材	一、二六四、九〇四	三、四七五、五二二	七〇〇、七〇八	八、五〇四、九四四	九、五九六、七〇〇	一〇、〇四八、八二二	二、九九六、〇三三	四、〇〇〇、八三六	二、六〇〇、二八	五、九七五、七六
薪炭	三、七三、三六六	五、七四八、七三三	三、五九八、一〇〇	五、四〇〇、〇〇五	四、九五四、四四四	四、四九二、九五	五、一〇四、七	九、九四八、三四	四、七、三三	六、〇〇、七六
竹	一、〇〇、〇〇一	九、九八八	一〇〇、九八八	八〇、八八一	九、六、六三三	六、九、〇七三	八、七、七六六	五、三、六六七	八、二、六五五	五、八、四八

林産物雜

種別	三十五年		三十六年		三十七年		三十八年		三十九年	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
丸及角材							三七九、〇九五	三、九六六、五三	三、九六六、五三	六、二、四〇七
挽道枕木							二、五四、六五二	一、四三、六二〇	三、九八、五三	二、五、四三
鐵道枕木							三、二、五〇	一〇、五二五	二、八、九五〇	六、六、〇五
櫛木							六、三、九九	六、三、七九	八、六、二八	一〇、三、八六
曲輪							二、五〇、八	一、八、二五	一、九、九	一、五、七四
包裝箱用材							三、三、〇	二、八二	三、八〇	一、七、七
車輛用材							一、四、〇五	三、〇一六	一、七、五七	二、五、九八
下駄材							三〇、二九〇	三、五、二四	一九、二七七	三、七、七八
經木							四、六、一八〇	三、三、二	二、八、五五	一、七、五
製紙原料木片							四、四、七〇	八、八〇	三、七、三五	三、七、三
竹							七、九、八二四	四、九、九七	九、三、一〇二	七、四、二
皮	一、五、三、九二	二、四、五〇	一、四、一、六八	二、六、三三	二、五、〇四	七、九、八二四	四、九、九七	九、三、一〇二	七、四、二	

芝	炭	下	自然	土	石	隙	諸	松	椎	木	松	木	染	五	樹	樹	種	苗	蔓	竹	皮	樹
粉	草	菜	類	類	皮	類	茸	茸	精	烟	炭	皮	子	脂	質	子	木	莖	皮	他	皮	其
三,四六八,八七〇	七〇	五,八〇〇,四四〇						八八二	三六,六六三	八九			四六〇,六四二	一,一〇〇	五〇	一五,四九〇		五,〇〇〇		五二,六五〇	五九四	
四三,三七三	一,七五〇	二一〇,三三三						三,〇〇六	一八〇,四〇〇	七七一			二四六,六	五三	三〇	三九,九七五		一三〇		一〇,八九六	一四〇	
四,六二四,四八四	三五	二,一〇七,三〇四						一四,四八三	三,八三七	一,三三七			四九,九〇七	三〇	三〇	三,〇六七		三,〇〇〇		四〇,三七七	四二〇	
二〇,八七六	八〇五	二九,〇〇四						三,四二〇	三,三三三	八八五			三六,五五三	一八	一八	一一,四〇五		七		一一,〇三三	一六八	
八〇〇	四五	二〇,二〇四						一四,一二七	三,一八二	七四六			二七,五〇六	九	九	一〇,七四四		三,〇〇〇		三〇,八四四	一,七五四	
六八	八〇	二〇,六四三						三,三三九	二〇,四九九	一,〇四二			二〇,七五〇	五	五	三,三三三		七五		七,六五〇	一九三	
二九	二九	五,八八八						六三六	二九,一二五	五,八〇二			九,五四三	三〇	三〇	二,三〇〇		二,二八八		六五,五九二	一,九三	
五,一四五	一九二	一一九,一〇三						一,三三九	二〇,三三七	三,一七七			二四七,二四五	一〇〇	一〇〇	九,四〇三		四,四三三		九八,二七	六五,一九	
四三〇〇	一九二	一一四,二五八						二,九五五	二〇,三三〇	二,六〇〇			四三,六三六	五	五	六,八七〇		四,四三三		九〇,八	五,三三	

三百五十六

柴	干	干	合
炭	ゼン	マイ	計
			四三,三五三
			四九,三三三
			四七,七七三
			一,六九一,九
			一五,八〇七,七五三
			一六六,二八四

前表伐採ニ係ル用材中主ナルモノハ松ニシテ杉之ニ次キ扁柏、樅、栗、梅之ニ亞ク薪炭材トシテハ松其他雜木ニシテ竹材ハ苦竹最モ多ク淡竹之ニ亞ケリ而シテ是等ノ林産物中年々四、五十萬圓ハ縣外ニ輸出セラル今三十八年前四ケ年間ノ輸出統計ヲ示セハ左ノ如シ

林産物 輸出

種類	三十五年		三十六年		三十七年		三十八年		仕向先
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	
松用材	三三,六三八	四二,一五三	三五,一九六	五五,二七二	三三,三六一	四三,六八九	三七,〇八六	四八,八六四	愛知縣
	六,七七八	六,〇五〇	七,〇八八	一〇,四六〇	五,五七〇	七,八四五	二,八一〇	二,九七〇	
檜用材	五,九四四	二,三三六	二,九九	一,〇四六	八五	三,四〇〇	三,四三三	一,三七一	滋賀縣
	六,〇五六	四,二九〇	一〇,一二八	三,五二二	八,九七五	二,六二二	二,三五〇	二,三三一	
檜用材	一七,八五一	四,一五二	一八,一六三	四三,九四二	一八,二七九	三六,七六七	一八,四八七	四九,四九〇	愛知縣
	一,〇〇〇	一,五〇〇	五〇〇	五七〇	四〇〇	六〇〇	三〇〇	四五〇	
檜用材	四二七	一,五三八	一〇九	一,〇〇〇	一七五	六,六四〇	三,〇二五	三,八五四	富山縣
	一,〇〇〇	四,〇〇〇	一,一〇〇	四,四一〇	一九〇	三,三三〇	二,〇〇〇	三,六〇〇	
檜用材	三〇〇	三,〇〇〇							大阪府

岐阜縣

三百五十七

其他用材	枕木類	曲輪材	マツチ材	板類	竹類	薪材	木炭	桶材	框材
一八〇〇	五、一六〇	六、〇〇〇	九、〇〇〇	七、〇〇〇	二、二〇〇	四、〇〇〇	一、〇〇〇	八、〇〇〇	一、五〇〇
二、八〇〇	三、六〇〇	二、一〇〇	二、五〇〇	一、〇七〇	一、四六七	七、七四〇	一、三〇〇	二、四〇〇	四、五〇〇
二、一〇〇	五、〇〇〇	二、五〇〇	七、三五六	七、一八〇	一、九七九	二、八四〇	一、〇〇〇	一、九〇〇	一、五五〇
三、〇〇〇	二、九一〇	三、五〇二	五、一九九	一、〇五五	一、三八三	八、九四〇	三、四八〇	五、八九〇	四、八〇五
二、七〇〇	二、九一〇	八、〇〇〇	九、九四五	七、四〇三	二、〇一四	一、七五五	七、一五〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
三、四〇〇	三、〇〇〇	一、七四五	一、六四五	九、六二五	一、三〇九	五、五二七	二、四八九	三、三六〇	二、八〇〇
三、〇〇〇	五、〇〇〇	三、三三五	一、六四五	一、六四五	一、九五二	八、九二〇	九、二八八	七、〇〇〇	一、四〇〇
三、七二〇	一、五〇〇	四、〇五〇	二、八〇〇	二、八〇〇	三、八〇〇	一、二〇〇	二、四八八	三、〇〇〇	五、四〇〇
愛知縣	三重縣	山形縣	富山縣	愛知縣	大府府	滋賀縣	富山縣	愛知縣	大府府

杉材	樅材	椴材	栗材	榎材	樺材	朴材	檉材	楸材	羅漢柏材	檜材	檜子松材	姫子松材
一、九二五	一、〇〇〇	六、八〇〇	五、〇〇〇	一、六五五	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇
四、九六〇	八、〇〇〇	一、八〇〇	一、七五〇	一、七五〇	一、七五〇	一、七五〇	一、七五〇	一、七五〇	一、七五〇	一、七五〇	一、七五〇	一、七五〇
二、八五五	五、三〇〇	六、四〇〇	五、〇〇〇	一、四九三	四、五〇〇	四、五〇〇	四、五〇〇	四、五〇〇	四、五〇〇	四、五〇〇	四、五〇〇	四、五〇〇
五、八五五	五、三〇〇	二、〇五八	一、七五〇	一、八八六	一、〇八〇	一、〇八〇	一、〇八〇	一、〇八〇	一、〇八〇	一、〇八〇	一、〇八〇	一、〇八〇
二、〇三七	四、六〇〇	五、三三八	七、〇〇〇	一、四〇五	三、七二〇	三、七二〇	三、七二〇	三、七二〇	三、七二〇	三、七二〇	三、七二〇	三、七二〇
四、三〇〇	六、三〇〇	一、七四〇	二、五〇〇	一、九七六	一、〇五二	一、〇五二	一、〇五二	一、〇五二	一、〇五二	一、〇五二	一、〇五二	一、〇五二
二、六八一	五、〇〇〇	七、四九五	二、三二五	二、三二五	一、五〇〇	一、五〇〇	一、五〇〇	一、五〇〇	一、五〇〇	一、五〇〇	一、五〇〇	一、五〇〇
五、三九〇	五、〇〇〇	二、五八四	二、五〇〇	二、五〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
愛知縣	三重縣	大府府	愛知縣	大府府	愛知縣	大府府	愛知縣	大府府	愛知縣	大府府	愛知縣	大府府

榧	栗	檜	杉	山	黄	松	雜	椎	松	下	下	經					
實	實	皮	皮	葵	連	請	茸	茸	茸	板	材	材					
計																	
	三 七 五 〇	二 〇	七 〇	五 〇	八 〇	一 四 〇	四 〇	一 五 〇	八 六 九 五	九 〇	一 八 〇	二 〇					
	二 〇	一 四 五	二 六	五 〇	四 〇	四 七	二 〇	二 五	八 六 七	七 〇	一 四 〇	四 〇					
	二	二 〇	五 〇	五 〇	七 〇	三 七 〇	一 八 〇	六 七	一 七 六 七	八 〇	二 六 〇	二 〇					
	五 三 四	四	二	五 〇	七 〇	九 九	一 八 〇	三 五	八 六 九	七 七	一 九 二	一 六					
	八	三 六	四 五	六 〇	一 〇 〇	五 五	二 〇 〇	一 〇 六	一 五 八 九	七 〇	三 四 〇	四 〇					
	五 七 二	一 七 三	一	四 〇	六 〇	二 七	二 〇 〇	四 〇	七 九 六	五 五	三 六 五	一 五					
	一 〇	一 〇	二 〇	五 〇	二 五	一 三 八	二 一 〇	二 六	一 〇 〇 〇	七 〇	四 一 〇	三 〇					
	五 三 七 九	五 〇	三	三 〇	一 五 〇	一 九	二 五 〇	六 五	七 五 六	六 〇	三 七 〇	二 〇					
	全	全	全	富	愛	太	東	富	神	東	三	愛	大	富	愛	兵	愛
				山	知	阪	京	山	奈	京	重	知	阪	山	知	庫	知
				縣	縣	府	府	縣	川	府	縣	縣	府	縣	縣	縣	縣

林業ハ本縣産業上重要ノ地位ヲ占ムルモノニシテ之レカ經營ノ如何ハ將來本縣ノ富力ニ至大ノ關係ヲ有スルカ故ニ縣ノ之カ獎勵保護ニ努ムル所頗ル厚シ方今縣ニ於ケル之レカ施設ノ概況ヲ記サハ左ノ如シ

(一) 樹苗圃

明治三十一年度ヨリ五十年度ニ至ル二十ヶ年ノ繼續事業トシテ之ヲ開設シ樹苗ヲ養成シテ無代下附シ併セテ苗木養成ノ模範ヲ示セリ

(二) 林業ノ講習

明治三十年以來林業技術員ヲ置キ森林ノ調査及林業思想喚起ノ爲講習、講話ヲ爲シ又副産物ノ獎勵トシテハ別ニ專門教師ヲ聘シ明治三十六年以來木炭ノ改良及三十八年度ヨリ椎茸製造ヲ傳習シ之レカ發達ヲ促セリ

(三) 森林ノ調査

森林ノ全般ニ亘リテ三十三年度以來調査整理ニ着手シ現ニ繼續調査中ナリ

(四) 模範林

林業經營ノ模範ヲ示シ併セテ縣ノ基本財産ヲ造成スルノ目的ヲ以テ三十九年度ヨリ十ヶ年ノ繼續事業トシテ揖斐川流域ノ御料林九百町歩ノ拂下ヲ受ケ四十年度ヨリ樹苗植栽ノ傍ヲ製炭、椎茸、醋酸製造ヲナセリ是レ等縣ノ施設以外ニ郡、町、村其他ノ獎勵的施設甚タ多ク將來大ニ望ミヲ屬スニ足ル

(四) 畜産業

本縣ノ東北部殊ニ飛騨ニ於テハ牧場ニ好適ノ地少ナカラス是レヲ以テ此地方ニ於テハ往時ヨリ牧畜ノ業比較的盛ニシテ今ヲ去ル百五十年前ノ時代ニ於テ既ニ牧場ノ開カレタルモノ多シ現今同國高根村ノ重ナルモノハ多ク此ノ時ノ開始ニ屬セリ而シテ三十九年ニ於ケル此ノ地方ノ牧場面積ハ五千二百六十六町歩ニ達シ放牧頭數、牛三百六十二頭、馬七百四十六頭、合計千八百頭ヲ算セリ此ノ他ノ地方ニアリテハ牧場ノ設ケナク常ニ農家畜舎ニ飼養シ林野ニ放養スルコトナシ

本縣ニ於ケル畜産ノ主力ハ牧馬ニシテ收牛之ニ亞キ養豚、養鶏ノ如キハ未タ幼稚ナルヲ免レス今三十九年十二月末日ニ

於ケル家畜現在數及三十九年前五ヶ年ニ於ケル其出產數ヲ示セハ左ノ如シ

(イ) 三十九年十二月末日現在數

牛	三、八七四頭	計	六、二九一頭
馬	九、七二九頭	計	二四、〇五九頭
豚	一九七頭	計	三三三頭
家兔	五五五頭	計	一、〇二八頭

(ロ) 三十九年前五ヶ年ニ於ケル出產數

年次	牛		馬		豚		家兔	
	牝	計	牝	計	牝	計	牝	計
三十五年	四、五五頭	四、五五頭	八〇七頭	一、六八頭	?	?	?	?
三十六年	五、五五頭	五、五五頭	七六五頭	一、五五頭	?	?	?	?
三十七年	五、五五頭	五、五五頭	六八三頭	一、四〇頭	?	?	?	?
三十八年	五、五五頭	五、五五頭	四八七頭	一、〇九頭	?	?	?	?
三十九年	四、五五頭	四、五五頭	四八七頭	一、〇九頭	?	?	?	?

前表ノ示ス所ニヨレハ三十八、九ノ兩年ハ牛、馬共著シク出產數ヲ減セリ是レ種牝ノ缺乏其一因ニシテ日露戰爭中馬匹價格ノ昂騰著シク爲ニ牡馬ヲ賣却シタルモノ多キニ由ルモノニシテ爾後馬匹價格ノ益々騰貴スルニ連レ却テ牝馬ヲ購求シ出產ヲ計ラントスル者近時益々増加ノ傾向ヲ呈シ來レリ

近年縣ニ於テハ畜産業ノ振興ニ努ムル所少ナカラス三十二年度以來產牛馬組合其他ノ團體ニシテ種牛馬ヲ購求スルモノニ對シ縣費ヲ以テ之ヲ補助シ來リ三十九年ニ於テ種牝牛三十九頭、種牝馬五十六頭ヲ有スルニ至リシカ四十年年度ヨリ更ニ縣立種畜場ヲ(面積十七町步)郡上郡上保村ニ設ケ向フ六ヶ年ヲ期シ種牝牛三十頭、種牝馬五十頭ヲ備ヘ以テ益々牛、馬ノ改良ヲ圖レリ其他家畜業ニ於テハ近年漸次發展ノ趨勢ナリト雖モ未タ種類ノ撰擇ニ留意スルモノ少ク縣下一、二郡ニ於テハ之レカ品評會ヲ開催シ益々善良種ノ購入普及ニ努メツ、アリ

(五) 鑛業

鑛產物ノ主ナルモノハ銀、銅、鉛及鉛合銀、銅ニシテ亞鉛及亞炭ノ產出稍多シ左ニ三十九年前五ヶ年間ニ於ケル鑛產物統計ヲ掲ク

品名	三十五年		三十六年		三十七年		三十八年		三十九年	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
金	一、五三〇、〇〇〇斤	一九、二九六圓	二、五三〇、〇〇〇斤	三〇、八五三圓	一、四四六、〇〇〇斤	一、九七六、八〇圓	一、三三二、八四三斤	一九、八七五圓	一、四八一、三三三斤	三、三三〇圓
銀	三、四四〇、〇〇〇斤	一〇、五六六圓	二、〇二二、二五斤	七、四一六圓	一、一五五、六五六斤	五、三〇、一八一圓	一、三六八、八一三斤	五、七七一圓	三、六九〇、九二斤	二〇、三六二圓
銅	一、九六六、六九斤	九、三四五圓	二、五三六、三三斤	一三、七五五圓	二、七二七、五斤	一三、三三二圓	二、五七三、九六六斤	一九、一六六圓	三、二四八、四四〇斤	二九、七九三圓
亞鉛										
亞鉛										
鉛										
燐										

鉛	銀	砂	亞	石	黒
含	鉛	錫	炭	炭	鉛
銅	鉛	錫	炭	炭	鉛
					120,000
					35,250
					43,531
					28,950
					35,900
					15,000
					29,240
					67,900
					9,250
					36,900
					1,900
					35,260

銀ハ主トシテ吉城郡ヨリ採掘セラレ郡上郡之レニ亞キ大野郡ヨリモ多少ノ産出アリ銅ハ益田郡、吉城郡ニ多ク郡上郡、大野郡、加茂郡之レニ次キ鉛ハ全部吉城郡ノ産出ニ係リ採掘高逐年増加セリ鉛含銀銅ハ大野郡ヨリ採掘セラレ亞炭ハ可兒郡ヲ第一トシ土岐郡、武儀郡ニモ多少ノ産出アリ要スルニ鑛産物ノ主ナルモノハ主ニ飛騨ノ國ニ産出シ美濃地方ハ本縣鑛業生産上見ルヘキノ地位ニアラス

(六) 水産業

本縣ノ水産業ハ地勢ノ關係ニヨリ極メテ微々タルモノニシテ木曾、長良、揖斐川ニ於テ僅カニ淡水漁業ノ行ハル、ニ止マリ將來ニ於ケル發達ノ餘地亦極メテ狭小ナリ左ニ三十九年前五ヶ年間に於ケル水産物統計ヲ掲ク

魚	三十五年		三十六年		三十七年		三十八年		三十九年	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
鯉	1,253	2,866	1,421	2,994	1,014	2,255	2,235	3,824	2,677	5,338
鮎	18,400	33,357	18,194	29,801	30,497	36,407	27,254	58,075	34,399	69,666
鱒	2,907	2,664	3,339	9,997	3,009	8,970	3,745	23,050	2,240	24,855

鮎漁業ハ本縣水産業ノ主位ヲ占ムルノ外鶴飼ノ奇觀ヲ見ントテ來ルモノ年々二萬人以上ニ上リ間接ニ本縣經濟ニ及ス利益尠少ナラサルカ故ニ縣ニ於テモ之レカ保護ニ努ムル所少ナカラス又養鯉事業ハ近時各地ニ之ヲナスモノ増加シ漸次發達ノ傾向ヲ示シ來レリ

主要工産品ノ狀況

(一) 生糸

年次	產額		數量		價額	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額
三十五年	75,129	4,099,096				
三十六年	79,201	4,403,311				
三十七年	68,699	4,322,074				
三十八年	89,619	5,025,180				
三十九年	104,169	6,155,458				

(二) 主要産地

惠那郡	加茂郡	郡上郡	大野郡	可兒郡	土岐郡
岐阜縣					三百六十五

羽島郡 岐阜市

(三) 製造戸數及職工數 (三十九年)

器械製糸

製造工場

二八六個

職工數

四八七人

男 一二、三七〇人

女

一二、八五七人

合計

八〇九男

使用馬力

座繰製糸

製造戸數

三、二四四戸

職工數

一一九人

男

五、五七六人

女

合計

五、六九五

(四) 製産狀況

養蠶業ノ發達ト共ニ本業モ亦年々發達シ五十繰以上ノ工場ヲ有スル者三十戸アリ而シテ座繰器械ニ依リテ製造スル者ハ多ク山間ノ者ニシテ農、林業者ノ兼營ニ屬ス

(五) 原料ノ需要供給

原料繭ハ主トシテ縣下ニ生産スルモノヲ用フレトモ滋賀、三重、愛知、三河、遠江及信濃地方ヨリノ輸入繭モ多少アリト云フ

リト云フ

(六) 製産費及收益ノ比較

生糸百斤(十六貫目)ニ對スル收支計算左ノ如シ

收 入

一金壹千百圓

生糸百斤賣却代

支 出

一金八百四拾八圓八拾五錢

原 料 代

一金百五拾圓

製 造 雜 費

計九百九拾八圓八拾五錢

差 引

金百壹圓拾五錢

純 益

(七) 販出額及仕向地

本品ハ大部分横濱、神戸港ヲ經テ米國、佛國等へ輸出ス今最近五ケ年間ニ於ケル輸出額ヲ示セハ左ノ如シ

年 次 數 量 價 額

三十五年 四七、四八五 二、五六四、二〇一

三十六年 四九、三一八 二、七二二、五一八

三十七年 五〇、一一七 二、七〇六、二九一

三十八年 五二、八四四 二、九五九、二八六

三十九年 七二、九一八 四、三〇八、八二〇

岐阜縣

(八) 販賣手續及取引慣習

外國輸出ニアリテハ神戸、横濱港ノ賣込問屋ヲ經テ居留地外國商人ニ賣渡シ内地向ノモノニアリテハ福井、京都及石川地方ノ問屋ヲ經テ販賣セラル、モノト此等地方ノ機業家ト直接取引スルモノトアリ

(九) 相場 (最近)

百斤ニ付

金千百圓

(十) 荷造法及其費用

桐油紙ニ包ミ更ニ松、椴製ノ箱ニ入レ九貫目拾六括入ト爲シ箱ノ上部ヲ蓋ニテ包ミ繩掛トスルヲ例トス其一個ニ對スル荷造費ハ凡ソ壹圓貳拾錢ナリト云フ

(十一) 主ナル製造者

惠那郡中津町	合名會社勝野商店
同 郡武並村	合名會社丹羽商店
同 郡坂下村	古 谷 市 三 郎
土岐郡土岐村	神 籠 館
可兒郡御嵩町	間 丈 助
加茂郡八百津町	加 茂 製 糸 場
郡上郡八幡町	開 祥 合 資 會 社
惠那郡明知町	合 名 會 社 金 水 館
同 郡坂下村	坂 下 共 同 社

武儀郡上之保村

羽島郡笠松町

郡上郡八幡町

同 郡同町

可兒郡廣見村

大野郡高山町

同 郡同町

貫 光 社
大 同 館
福 助 製 糸 場
武 藤 互 三
村 木 社
直 井 佐 兵 衛
村 田 半 六

(十二) 事業上ノ施設

縣費ヨリ毎年蠶業改良費ノ補助ヲ爲シ明治三十九年度ヨリ生糸専門ノ工業技師ヲ置キ管内ヲ巡回シテ講習、講話及實地指導ヲ爲サシム又明治四十年度ニハ經費金六千圓ヲ議決シ製糸教師十八名ヲ管内ニ派遣シ専ラ改良指導ヲナサシメツ、アリ

(二) 絹織物

(一) 産額

年 次

數 量

價 額

三十一年

一九一、四四二

一、四〇五、〇三五

三十六年

一四八、六七〇

九三九、四七四

三十七年

一四三、二〇三

二八二、七七〇

岐阜縣

三十八年
三十九年

二一八、〇四二
一九〇、四一八

一、二四三、五三四
二、四四八、三八六

(二) 種類

内地向ニアリテハ紋絹、無地絹、紋羽二重、綾羽二重、縮緬、綿建紬、晒綿平、羽二重、鹽瀬、紋鹽瀬、絹等主ナルモノニシテ輸出向トシテ綾羽二重及平地羽二重トス其長巾及目付ハ左ノ如シ

綾羽二重 巾二尺 二百四十匁ヨリ
長十二丈 三百匁マテ
羽二重 同 二百二十匁ヨリ
三百六十匁マテ

(三) 主要産地

稻葉郡 羽島郡

(四) 沿革

本縣ニ於ケル絹織物製造ノ起原ハ甚タ遠ク今之レヲ詳カニセスト雖モ舊藩時代ニ於テ羽二重ヲ模造シ之レヲ京都ニ輸送セリ然ルニ其輸出額ノ漸ク増加スルニ從ヒ京都地方ノ製造家ノ拒ム處トナリシヲ以テ百方苦心ノ末遂ニ哀請シテ尾州候ノ用品タルヲ許ツレ羽二重ノ稱ヲ改メ曾代絹ト名ヅク(當時原料ハ武儀郡曾代地方ノ生糸ヲ用ヒタルヨリ斯ク名ツケタルナランカ)爾來漸次各種織物ヲ製織シ以テ今日ニ至レリ

(五) 製造戸數及職工數 (明治三十九年)

製造工場 五戸 蒸氣機一臺
職工數 二四八人 馬力三
家内作業 六七二戸

職工數

一、二八七人

(六) 製産狀況

絹織物製造ハ主トシテ家内工業ニ屬シ規模ノ稍大ナル工場ハ甚タ稀ナリ故ニ先年輸出羽二重ノ製織ヲ始メタリシモ製品一定ヲ缺キ且ツ資本少キヲ以テ其製産額モ甚タ少ナク爲メニ價格ノ變動ニ對抗シテ能ク事業ヲ維持スル能ハス自然輸出品ノ製造漸次衰退シ現今ハ専ラ内地向品ヲ製織セリ

(七) 原料ノ需要供給

原料タル生糸ハ縣下ニ産スルモノヲ用フ

(八) 製産費及收益ノ比較

羽二重、曾代絹其他一疋(三百匁付)ニ對スル收支計算左ノ如シ

收 入	賣 價
一金貳拾貳圓	
支 出	原 料 生 糸 代
一金拾八圓參拾錢	織 賃
一金貳圓	精練其他雜費
一金五拾錢	
計金貳拾圓八拾錢	
差 引	利 益
金壹圓貳拾錢	

岐阜縣

向地

内地向販出額ハ詳カナラサルモ海外ヘノ輸出額(三十八年)ハ左ノ如シ

外國	向	數量	價額
		一五、二六三 ^斤	八七、〇四八 ^円

輸出品ハ福井、金澤ノ商人ニ委託シ同地ニテ精練ノ上横濱港ヲ經テ米國ニ輸出ス

内地仕向地ハ東京、京都ヲ主ナルモノトシ其他各地ニ仕向ケラル

(十) 販賣手續及取引慣習

輸出品ノ多クハ横濱、福井、金澤等ノ買繼商ニ販賣シ内地向ハ直接又ハ買繼商ノ手ヲ經テ各地ニ販賣セララル

(十一) 相場

練上ケ絹	上	拾壹圓七拾錢
	中	拾壹圓五拾錢
	下	拾壹圓貳拾錢

(十二) 荷造法及其費用並運賃諸費

荷造法ハ厚紙ニテ下包ミヲナシ更ニ之レヲ蘭蓆ニテ包ム其費用十貫目ニ付金貳拾錢ヲ要ス而シテ其瀛車賃百哩ニ付凡ソ壹圓ニシテ保険料ハ普通價格壹圓ニ付七錢ナリト云フ

(十三) 主ナル製造者及取扱商店

製造者	羽島郡中屋村下中屋	小島多三郎
-----	-----------	-------

取扱商店	稻葉郡更木村大野	齋藤倉二郎
	同郡同村三井	栗田桂二郎
	同郡同村同	栗田代二郎

取扱商店	羽島郡川島村松原島	鈴木富右衛門
	稻葉郡更木村三井	岩井兄弟商會

(十四) 事業上ノ施設

縣ニハ染織擔任ノ工業技師ヲ常置シ實地指導ニ從事セリ又同業組合アリテ漸次斯業ノ發達ヲ圖リツ、アリ

(三) 綿織物及絹綿交織物

(一) 產額	年次	數量	價額
(二) 種類	三十五年	一、四三一、七九一 ^斤	一、六三七、〇一一 ^円
	三十六年	一、六六八、〇一五	一、八九四、七九二
	三十七年	一、四九七、二二八	一、四八八、〇九〇
	三十八年	一、三八三、一九〇	一、四五七、三七三
	三十九年	二、二二八、三九七	二、四二四、〇一四

岐阜縣

内地向ノ主ナルモノハ紋織、綾織、白木綿、緋木綿、双子織、瓦斯無地、柞蠶織等ニシテ海外輸出品ハ被面、紫紺織、白縞、霜降織、絹紬織、寧波織、膠布、白木綿、納戸木綿、朝鮮木綿其他無地織ニシテ其長及巾ハ左ノ如シ

被面布	長巾五尺三寸	被面布	長巾一尺八寸
紋被面布	長巾四尺三寸	紫紺織	長巾二丈九尺分
白縞	長巾二丈九尺分	霜降織	長巾一尺八寸
絹紬織	長巾二丈九尺分	寧波布	長巾一尺八寸
膠布	長巾三十一尺	白木綿	長巾二丈九尺分
朝鮮木綿	長巾五丈六尺分	納戸木綿	長巾二丈九尺分
無地織	長巾二丈九尺分		

(三) 主要産地

羽島郡 稻葉郡

(四) 沿革

木綿機業ノ起原モ亦漠トシテ詳カナラスト雖モ今ヨリ凡ソ百二十餘年前ニアリト云フ即チ口牌ノ傳フル所ニ依レハ天明年間京都大火ノ後同地ノ某機業家縣下不破郡關ヶ原ニ移住シテ斯業ヲ營ムニ當リ羽栗郡柳津村ノ某往テ職工トナリ大體ヲ知得シ郷村ニ販リテ縞木綿ヲ製出セリ是レ即チ美濃縞ノ始ニシテ上州足利ノ人某妻女ト共ニ尾張葉栗郡佐千原村ニ來リ結城縞ヲ製出セリ爾來縣下各地ニ傳播シ逐次發達シテ今日ニ至レリ

(五) 製造戸數及職工數 (二十九年)

家内工業

製造戸數	一、五六七戸
職工數	三、〇〇三人
工場作業	三一個
職工數	七六九人
馬力	一九(石油發動機三)

(六) 製産並ニ輸出狀況

日露戰爭開始當時ハ内、外向各種織物ハ概シテ著シク不振ニテ産額甚タ減少セリ然レトモ三十八年下期ノ頃ニ至リ此ノ不況ヲ挽回シ益々好況ヲ呈シ三十九年ノ如キハ近年ニナキ盛況ヲ見タリ清國向被面ハ三十八年頃ヨリ著シク好況ヲ呈シ需要多ク價格亦上騰セリ然ルニ三十九年下期ニ至リ綿絲ノ騰貴ト共ニ本品市價ヲ引上ケタルト奈良、和歌山地方ニ於テ此ノ盛況ニ乘シ多數ノ粗製品ヲ輸出シタリシ結果輸出先ニ於ケル信用ヲ失墜シテ需要頓ニ減退スルニ至リ三十九年九月頃ヨリ一層不況ニ陥リ機業家ハ多ク他ノ織物製織ニ轉スルニ至リ其製産高大ニ減少セリ又清國向小巾紋綿布ハ年々盛況ニ向ヒツ、アリシニ上海稅關ニ於テ重稅ヲ課セラレタル結果漸ク衰退ヲ來セリ

(七) 原料ノ需要供給

綿及染料ハ概ネ愛知縣ヨリ購入シ絹糸ハ縣下生産ノモノヲ用ヒ柞蠶糸ハ清國ヨリノ輸入品ヲ岐阜商人ヨリ購入ス

(八) 製産費及收益ノ比較

收益ハ織物ノ種類ニ依リ一定セズト雖モ平均綿織物一疋ニ對スル收支計算左ノ如シ

收入

一金拾圓	支	出	賣	價
一金六圓四拾錢			原	料
一金貳圓			製	造
計金八圓四拾錢			費	代
差引			利	益
金壹圓六拾錢			賣	價
被面一枚 <small>(中四尺三寸)</small> ニ付	收	入		
一金五拾五錢			綿	糸
一金參拾九錢五厘	支	出	染	代
一金四錢			絹	糸
一金壹錢八厘			織	賃
一金七錢五厘			雜	費
一金貳錢				
計金五拾四錢貳厘				
差引				

金八厘

(九) 販出額及仕向地

内地	向	數	額	量	八六三、一九〇反
	價	數	額	量	九一八、六九三圓
外國	向	數	額	量	五二〇、〇〇〇反
	價	數	額	量	六二八、六八〇圓

仕向地ハ内國各地及清國、韓國、香港等ノ各地トス

輸出品經由港ハ神戸、大阪、横濱等ノ諸港ナリ

(十) 販賣手續及取引慣習

製造家ハ總テ買繼商ニ販賣スルモノトアリ而シテ買繼商ハ貿易商ノ手ヲ經テ輸出スルモノト清、韓ハ直接輸出スルモノトアリ買繼商ニ委託販賣スルモノハ一反ニ付五錢ノ手数料ヲ普通トス直接輸出スルモノハ荷爲替ニ付シ其歩合普通賣價ノ約二割トス

(十一) 相場

被面布	一枚	四十五錢ヨリ五十錢マテ
被面布 <small>(尺八)</small>	一本	二圓八十錢
紋被面布	一枚	一圓二十錢
紫紺縞	一反	七十錢ヨリ九十錢マテ
白縞	一反	七十錢ヨリ一圓十五錢マテ

岐阜縣